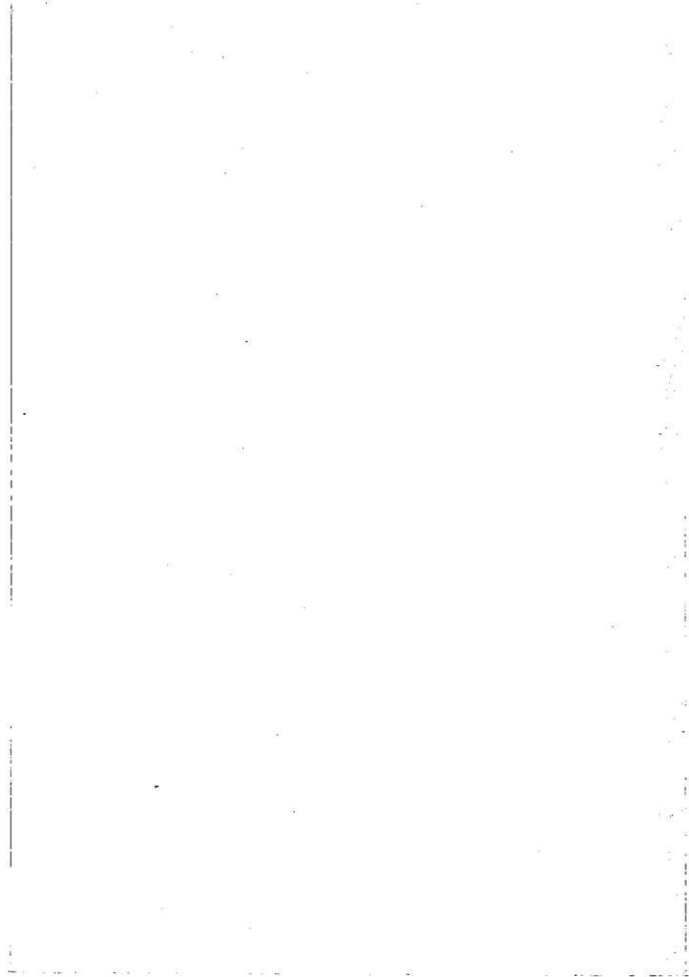


美沢川流域の遺跡群Ⅺ

—— 新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

昭和 63 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



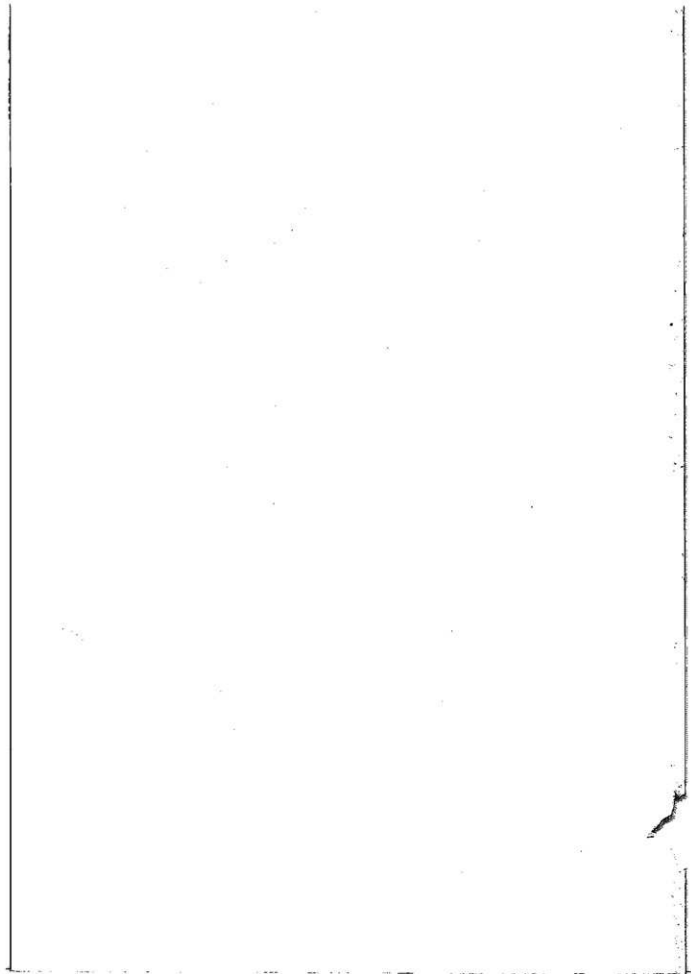
美沢川流域の遺跡群Ⅺ

—— 新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

美沢3遺跡

昭和63年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





足形付土版



足形付土版の出土状況



縄文早期後半の住居跡群



縄文早期後半の住居跡 H-11



Ⅱ群 a 類土器と出土状況



Ⅱ群 a 類土器の口縁部



I 黒層出土のVI群土器



I 黒層の焼土



F-1 断面



F-2 断面

例 言

- 1 本書は、昭和63年度に実施した新千歳空港建設用地内の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告である。
- 2 調査は、財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施し、本書は調査を担当した調査部調査第3課が作成した。土器の胎土の検鏡は調査第4課の花岡正光が行った。文責は文末に記す。
- 3 放射性炭素による年代測定は、京都産業大学山田治氏に依頼した。
- 4 黒曜石水和層年代の測定は、帯広畜産大学近堂祐弘氏に依頼した。
- 5 樹種同定は、北海道開拓記念館三野紀雄氏に依頼した。
- 6 種子の鑑定は、北海道開拓記念館矢野牧夫氏に依頼した。
- 7 残存脂肪酸の分析は、帯広畜産大学中野益男氏に依頼した。
- 8 室内整理後の出土遺物、諸記録は、北海道教育委員会が保管する。
- 9 調査にあたっては、つぎの人びと、諸機関のご協力をいただいた。

文化庁、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター、北海道開拓記念館野村崇、平川善祥、千歳市教育委員会大谷敏三、田村俊之、恵庭市教育委員会上屋真一、松谷純一、苫小牧市埋蔵文化財調査センター佐藤一夫、札幌市教育委員会加藤邦雄、上野秀一、羽賀薫二、市立函館博物館千代肇、長谷部一弘、函館市教育委員会田原良信、上ノ国町教育委員会松崎水穂、乙部町教育委員会森宏樹、江差町教育委員会藤島一己、松前町教育委員会久保泰、七飯町教育委員会石本省三、八雲町教育委員会三浦孝一、森町教育委員会藤田登、戸井町教育委員会古屋敷則雄、木古内町教育委員会鈴木正語、釧路市立博物館沢四郎、西幸隆、松田猛、斜里町教育委員会金盛典夫、標茶町教育委員会豊原照司、標津町教育委員会堀田光明、帯広市百年記念館佐藤訓敏、北沢実、旭川市教育委員会斎藤榮、瀬川拓郎、富良野市教育委員会杉浦重信、小樽市教育委員会大島秀俊、青森県埋蔵文化財センター三宅徹也、三浦圭介、成田滋彦、八戸市教育委員会工藤竹久、静岡県埋蔵文化財センター平野吾郎、北海道大学横山英介、札幌医科大学百々幸雄、大島直行（順不同敬称略）

記号等の説明

1. 遺構等の表記は以下に示す記号を用い、発掘順に番号を付した。なお、H-5、P-2は欠番である。

H：住居跡及び類似遺構 P：土墳（墓を含む）および住居跡に伴う柱穴状小ピット

T：Tピット F：焼土

2. 遺構図は、発掘区基線の北（西偏7°22'38"）を上にして示した。図版は原則として下記の縮尺である。例外については、その都度スケール・方位を示す。

1/40：住居跡、土墳、Tピット、焼土 1/10：遺物出土状況図

1/4：土器実測図 1/3：土器拓影図、礫石器の実測図

1/2：剥片石器、土製品、石製品の実測図

3. レベルは標高（単位m）で示す。

4. 遺物分布図では、原則として各種の遺物を下記の記号で表記する。例外については、その都度凡例を示す。

床面出土 ●：土器 ▲：剥片石器 ■：剥片 ▼：礫石器

◆：礫 ★：土・石製品

5. 遺構の規模は、確認面での長軸長×短軸長/床（底）面での長軸長×短軸長/確認面からの最大深（単位m）の順で記した。

6. 石器、土製品、石製品の大きさについては、最大長、最大幅、最大厚の順で記す。

7. 遺構出土の遺物は、伴出遺物、混入遺物ともに合わせて各遺構の項の中に記載する。

8. 土層名は、下記の略号で記す。

樽前a降下軽石層：Ta-a層(a)

樽前b降下軽石層：Ta-b層(b)

有珠山b₁火山灰：U_a-b₁層

第Ⅰ黒色土層：Ⅰ黒層(Ⅰ黒またはⅠB)

苫小牧火山灰：TM

樽前c₁降下軽石層：Ta-c₁層(c₁)

樽前c₂降下岩片層：Ta-c₂層(c₂)

第Ⅱ黒色土層：Ⅱ黒層(Ⅱ黒またはⅡB)

樽前d₁降下岩片層：Ta-d₁層(d₁)

樽前d₂降下スコリア層：Ta-d₂層(d₂)

第Ⅲ黒色土層：Ⅲ黒層(Ⅲ黒またはⅢB)

恵庭aローム層：En-aローム層(EnL)

恵庭a降下軽石層：En-a層(EnP)

支笏軽石流堆積物：Spfl層。

※火山灰の土層名・略号は、曾屋・佐藤（1980）、北海道火山灰命名委員会（1982）、横山ほか（1973）を引用し、（ ）内はそれをさらに簡略化したものである。

9. 土層の混在状態は、上記の略号を用いて下記のように表わす。

A+B：AとBはほぼ同量にまじる。

A>B：AにBが少量まじる。

A>>B：AにBが微量まじる。

目 次

口絵

例言

(記号等の説明)

目次

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査の経緯	1
4 調査結果の概要	4
5 遺物の記載について	7
II 第Ⅰ黒色土層の調査	9
1 調査の概要	9
2 遺構	11
3 包含層出土の遺物	24
4 まとめ	30
III 第Ⅱ黒色土層の調査	41
1 調査の概要	41
2 縄文時代早期の遺構	44
(1) I群b-3類土器の時期の遺構	44
(a) 土壌墓	44
(b) その他のピット	47
(2) I群b-4類土器の時期の遺構	53
(a) 住居跡	53
(b) 土壌墓	103
(c) その他のピット	106
3 縄文時代中期・後期の遺構	115
(1) III群a類土器の時期の住居跡	115
(2) IV群a類土器の時期の住居跡	128
(3) IV群b類土器の時期の住居跡	131
(4) 縄文時代中期・後期の性格不明のピット	141
(5) Tピット	147
4 包含層出土の遺物	162
(1) 土器	162

(2) 石器	197
(3) 土・石製品	202
5 まとめ	221
(1) 美沢3遺跡の遺構と遺物	221
(2) 美沢3遺跡出土の早期の土器にみられる文様について	227
(3) 美沢3遺跡の土壌に残存する脂肪の分析	237
(4) 美沢3遺跡出土の土器の胎土分析	245
付篇 炭焼窯跡について	335

挿 図 目 次

図Ⅰ-1 遺跡の位置	2	(等高線は $Ta-d_1$ 上面)	45
図Ⅰ-2 標準土層模式図	4	図Ⅲ-3 P-13と出土遺物	46
図Ⅰ-3 美沢川流域の遺跡群の位置と 発掘区の呼称	5	図Ⅲ-4 P-17と出土遺物	47
図Ⅰ-4 美沢川流域遺跡群の分布	6	図Ⅲ-5 P-1と出土遺物	48
図Ⅱ-1 I黒層下部の遺物分布	10	図Ⅲ-6 P-21と出土遺物	49
図Ⅱ-2 I黒層上部の遺構と 遺物の分布	10	図Ⅲ-7 P-22と出土遺物	50
図Ⅱ-3 I黒層の焼土	11	図Ⅲ-8 P-23と出土遺物	50
図Ⅱ-4 I黒層上面の炭化材出土 状況	12	図Ⅲ-9 P-24と出土遺物	51
図Ⅱ-5 I黒層出土の鉄製釘	12	図Ⅲ-10 SP-1・2と出土遺物	52
図Ⅱ-6 集石1	13	図Ⅲ-11 H-4	54
図Ⅱ-7 集石1-14の重量 ヒストグラム	14	図Ⅲ-12 H-4 覆土の遺物出土 状況と遺物	55
図Ⅱ-8 集石2	15	図Ⅲ-13 H-4 出土の遺物	56
図Ⅱ-9 集石3	16	図Ⅲ-14 H-6	59
図Ⅱ-10 集石4	17	図Ⅲ-15 H-6 エレベーションと 柱穴断面	60
図Ⅱ-11 集石5	17	図Ⅲ-16 H-6 出土遺物	61
図Ⅱ-12 集石6	18	図Ⅲ-17 H-6 覆土の土器と出土状況	62
図Ⅱ-13 集石7・8	20	図Ⅲ-18 H-7	65
図Ⅱ-14 集石10・12・13	22	図Ⅲ-19 H-7の柱穴断面と 覆土の土器出土状況	66
図Ⅱ-15 集石11	23	図Ⅲ-20 H-7 出土の遺物	67
図Ⅱ-16 集石14	23	図Ⅲ-21 H-7の遺物と盛土の 範囲	68
図Ⅱ-17 統縄文時代の土器出土 状況と土器	25	図Ⅲ-22 H-8と出土遺物	70
図Ⅱ-18 統縄文時代の遺物	26	図Ⅲ-23 H-9	73
図Ⅱ-19 縄文時代の土器	28	図Ⅲ-24 H-9の柱穴と盛土の 範囲	74
図Ⅱ-20 縄文時代の石器	29	図Ⅲ-25 H-9 覆土の遺物出土 状況	75
図Ⅲ-1 II黒層の全体遺構位置図 (等高線は $Ta-d_2$ 上面)	42	図Ⅲ-26 H-9 出土の土器	76
図Ⅲ-2 縄文早・前期の遺構位置図		図Ⅲ-27 H-9 出土の遺物(1)	77

図Ⅲ-28	H-9 出土の遺物(2)	78
図Ⅲ-29	H-10	81
図Ⅲ-30	H-10出土の遺物	82
図Ⅲ-31	H-11	84
図Ⅲ-32	H-11出土の遺物と 付属ピット・柱穴	85
図Ⅲ-33	H-12と出土の土器(1)	87
図Ⅲ-34	H-12出土の遺物	88
図Ⅲ-35	H-14	91
図Ⅲ-36	H-14の小ピット	92
図Ⅲ-37	H-14覆土1層土器出土 状況と出土の土器	92
図Ⅲ-38	H-14出土の遺物	93
図Ⅲ-39	H-15	97
図Ⅲ-40	H-15掘り上げ土の範囲	98
図Ⅲ-41	H-15出土の土器(1)	98
図Ⅲ-42	H-15出土の土器(2)	99
図Ⅲ-43	H-15出土の石器	100
図Ⅲ-44	H-17と出土の土器	101
図Ⅲ-45	H-17出土の遺物	102
図Ⅲ-46	P-16と床面出土の 足形付き土版	104
図Ⅲ-47	P-16出土の遺物	105
図Ⅲ-48	P-6と出土遺物	106
図Ⅲ-49	P-7と出土遺物	107
図Ⅲ-50	P-9と出土遺物	109
図Ⅲ-51	P-14と出土遺物	110
図Ⅲ-52	P-15と出土遺物	111
図Ⅲ-53	P-19と出土遺物	112
図Ⅲ-54	P-20と出土遺物	113
図Ⅲ-55	F-1と出土遺物	113
図Ⅲ-56	縄文中・後期の遺構位置図 (等高線はⅡ黒層上面である)	116
図Ⅲ-57	H-1	118
図Ⅲ-58	H-1エレベーションと	

掘り上げ土の範囲	119
図Ⅲ-59 H-1 出土の土器(1)	119
図Ⅲ-60 H-1 出土の土器(2)	120
図Ⅲ-61 H-1 出土の石器等	121
図Ⅲ-62 H-13	124
図Ⅲ-63 H-13と出土土器	125
図Ⅲ-64 H-13出土の遺物(1)	126
図Ⅲ-65 H-13出土の遺物(2)	127
図Ⅲ-66 H-16と出土の土器	129
図Ⅲ-67 H-16出土の石器	130
図Ⅲ-68 H-2と床面出土の土器	132
図Ⅲ-69 H-2 出土の遺物	133
図Ⅲ-70 H-3	135
図Ⅲ-71 H-3 掘り上げ土の範囲	136
図Ⅲ-72 H-3 出土の土器	136
図Ⅲ-73 H-3 出土の石器(1)	137
図Ⅲ-74 H-3 出土の石器(2)	138
図Ⅲ-75 H-3 出土の石器(3)	139
図Ⅲ-76 P-3と出土遺物	141
図Ⅲ-77 P-4と出土遺物	142
図Ⅲ-78 P-5	142
図Ⅲ-79 P-8	143
図Ⅲ-80 P-10と出土遺物	144
図Ⅲ-81 P-11と出土遺物	145
図Ⅲ-82 P-12と出土遺物	146
図Ⅲ-83 P-18と出土遺物	146
図Ⅲ-84 T-1・2	148
図Ⅲ-85 T-3・4	149
図Ⅲ-86 T-5・6	150
図Ⅲ-87 T-7と遺物	152
図Ⅲ-88 T-8と盛土の範囲	153
図Ⅲ-89 T-9と盛土下の遺物	155
図Ⅲ-90 T-10・13	157
図Ⅲ-91 T-11・12	158
図Ⅲ-92 T-14と遺物、T-15	159

図Ⅲ-93	T-16・17	161
図Ⅲ-94	土器分布密度(1)	162
図Ⅲ-95	土器分布密度(2)	163
図Ⅲ-96	土器分布密度(3)	164
図Ⅲ-97	I群b-1類土器	166
図Ⅲ-98	I群b-2類土器	168
図Ⅲ-99	I群b-3類土器(1)	170
図Ⅲ-100	I群b-3類土器(2)	172
図Ⅲ-101	I群b-3類土器(3)	174
図Ⅲ-102	I群b-4類土器(1)	176
図Ⅲ-103	I群b-4類土器(2)	177
図Ⅲ-104	I群b-4類土器(3)	178
図Ⅲ-105	I群b-4類土器(4)	179
図Ⅲ-106	I群b-4類土器(5)	180
図Ⅲ-107	I群b-4類土器(6)	181
図Ⅲ-108	I群b-4類土器(7)	182
図Ⅲ-109	I群b-4類土器(8)	184
図Ⅲ-110	Ⅱ群a類土器(1)	186
図Ⅲ-111	Ⅱ群a類土器(2)	187
図Ⅲ-112	Ⅲ群a類土器	189
図Ⅲ-113	Ⅳ群a類土器	191
図Ⅲ-114	Ⅳ群b類土器(1)	192

図Ⅲ-115	Ⅳ群b類土器(2)	193
図Ⅲ-116	Ⅳ群b類土器(3)	195
図Ⅲ-117	Ⅳ群c類土器	196
図Ⅲ-118	Ⅱ黒層出土の石器(1)	203
図Ⅲ-119	Ⅱ黒層出土の石器(2)	204
図Ⅲ-120	Ⅱ黒層出土の石器(3)	205
図Ⅲ-121	Ⅱ黒層出土の石器(4)	206
図Ⅲ-122	Ⅱ黒層出土の石器(5)	207
図Ⅲ-123	Ⅱ黒層出土の石器(6)	208
図Ⅲ-124	Ⅱ黒層出土の石器(7)	209
図Ⅲ-125	Ⅱ黒層出土の石器(8)	210
図Ⅲ-126	Ⅱ黒層出土の石器(9)	211
図Ⅲ-127	Ⅱ黒層出土の石器(10)	212
図Ⅲ-128	Ⅱ黒層出土の石器(11)	213
図Ⅲ-129	Ⅱ黒層出土の石器(12)	214
図Ⅲ-130	Ⅱ黒層出土の石器(13)	215
図Ⅲ-131	Ⅱ黒層出土の石器(14)	216
図Ⅲ-132	Ⅱ黒層出土の石器(15)	217
図Ⅲ-133	Ⅱ黒層出土の石器(16)	218
図Ⅲ-134	Ⅱ黒層出土の土製品・ 石製品	219

表 目 次

表Ⅰ-1 新千歳空港用地内の埋蔵文化財包蔵地調査の推移	3	表Ⅲ-1 H-4柱穴状小ピットー覧 ..	56
表Ⅱ-1 I黒層出土遺物一覧	9	表Ⅲ-2 H-6柱穴状小ピットー覧 ..	63
表Ⅱ-2 焼土出土の動物遺存体	11	表Ⅲ-3 H-7柱穴状小ピットー覧 ..	69
表Ⅱ-3 集石1計測値	13	表Ⅲ-4 H-8柱穴状小ピットー覧 ..	71
表Ⅱ-4 集石2計測値	15	表Ⅲ-5 H-9柱穴状小ピットー覧 ..	80
表Ⅱ-5 集石3計測値	16	表Ⅲ-6 H-10柱穴状小ピットー覧 ..	83
表Ⅱ-6 集石4計測値	17	表Ⅲ-7 H-11柱穴状小ピットー覧 ..	86
表Ⅱ-7 集石5計測値	18	表Ⅲ-8 H-12柱穴状小ピットー覧 ..	90
表Ⅱ-8 集石6計測値	19	表Ⅲ-9 H-14柱穴状小ピットー覧 ..	95
表Ⅱ-9 集石7計測値	20	表Ⅲ-10 H-17柱穴状小ピットー覧 ..	103
表Ⅱ-10 集石8計測値	21	表Ⅲ-11 包含層(Ⅱ黒層)の出土遺物一覧	249
表Ⅱ-11 集石9計測値	21	表Ⅲ-12 遺構(Ⅱ黒層)の出土遺物一覧	249
表Ⅱ-12 集石10計測値	22	表Ⅲ-13 Ⅱ黒層の遺構別出土遺物一覧	250
表Ⅱ-13 集石12計測値	22	表Ⅲ-14 遺構の掲載土器一覧	253
表Ⅱ-14 集石13計測値	22	表Ⅲ-15 遺構の掲載石器一覧	255
表Ⅱ-15 集石11計測値	23	表Ⅲ-16 包含層の掲載土器一覧	257
表Ⅱ-16 集石14計測値	23	表Ⅲ-17 包含層の掲載石器一覧	259
表Ⅱ-17 掲載土器一覧	26	表Ⅲ-18 遺構一覧	262
表Ⅱ-18 掲載石器一覧	26		
表Ⅱ-19 掲載土器一覧	29		
表Ⅱ-20 掲載石器一覧	29		

I 調査の概要

この調査は、北海道開発局開発建設部が建設を進めている新千歳空港の用地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の緊急調査で、本年度は第13年次にあたる。

1 調査要項

事業名 新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査
事業委託者 北海道開発局札幌開発建設部
事業受託者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
調査遺跡 美沢3遺跡（J-02-81） 苫小牧市美沢164番地10
調査面積 17,464㎡
調査期間 昭和63年5月9日～平成元年3月25日

2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター 理事長 沢 宣彦
専務理事 山本慎一(昭和63年5月31日まで)
※ 永田春夫(昭和63年6月1日より)
常務理事 竹田輝雄(同上)
業務部長 間宮道男(昭和63年4月18日まで)
※ 伊藤庄吉(昭和63年4月19日より)
調査部長 中村福彦
(発掘担当者) 調査第3課長 大沼忠春
文化財保護主事 遠藤香澄
※ 佐川俊一
※ 長沼 孝
嘱託調査員 前田正憲
※ 森岡健治
※ 皆川洋一

3 調査の経緯

道央地方の南部、千歳市から苫小牧市にかけての一帯は、数万年以来、森林に覆われていた地表に火山灰が降り、再び森林に覆われ、再度火山灰に覆われ、さらに森林が出来るという、交互に繰り返す自然環境にあった。新千歳空港の建設工事に伴い昭和49、50年度に千歳市教育委員会によって、美沢川の両側に広がるこの森林の伐開線にそって分布調査が行なわれ、昭和



図I-1 遺跡の位置（この地図は、国土地理院発行の5万分の1
地形図「千歳」を複製したものである。）

51年度から北海道教育委員会によって、発掘調査が実施された。昭和54年度に財団法人北海道埋蔵文化財センターが設立されるとともに事業を引き継ぎ、以来毎年調査を実施するところとなっている。本年は13年次となる。

発掘調査の結果、現地表をなす表土層下に、主要な火山灰層が5層認められ、その間に黒色土層の形成されている状態であった。この黒色土層には森林の形成されていたことが推定されるが、美沢川に沿う森林地帯は、2万年ほど以前から人々の生活にかかわる活動の場となっていたことが知られた。人々が川のほとりに竪穴式の住居を営むようになったのは、ほぼ7,000年前頃からであり、縄文土器を用い、石器を使用する縄文文化の人々によるものであった。美沢川流域の遺跡群は左岸の千歳市側の8か所の遺跡と、右岸の苫小牧市側の4か所の遺跡の調査が行なわれているが、これまで、縄文時代の早期から、晩期にわたる竪穴住居の群在する集落跡、墓地、通路、その他の施設の跡が川沿いの低地から背後の台地の縁辺にかけて、多数発掘されていて、それらの集落の形成と廃絶が集落のない期間をはさみ繰り返されていることが知られた。この調査地区内では紀元前300年頃からあとの時期の集落跡は発見されていない。樽前c火山灰の降灰直後に形成された住居群の跡が最後である。縄文時代の末期以降、続縄文時代、縄文時代を通じて集落はこの地域を離れた所に形成されていたようであるが、その集落のない時代の遺物も残されていることから、生活の領域にはなっていたことであろう。地形の変化は、苫小牧市の低地に砂丘が形成されていることから徐々に進行していったことであろうし、時代の状況も変わってきていたであろう。

第1期工事予定地の調査は既に終了し、本年度は新空港開港の運びとなった。調査予定地は残り僅かであり、これまでの調査地区の続きの部分の内容を明らかにするとともに、これまでに判明した事実と、近隣地域の調査結果などを参考として、全体像を把握する作業が必要となっている。美沢3遺跡はこれまで2度（昭和51・55年度）調査されていて、縄文時代早期から、晩期に及ぶ遺跡で、住居跡、土坑、Tピットなどの遺構と、遺物が出土している。本年度の

表1-1 新千歳空港用地内の埋蔵文化財包蔵地調査の推移

所在地	遺跡名	調査年度	51年度	52年度	53年度	54年度	55年度	56年度	57年度	58年度	59年度	60年度	61年度	62年度	63年度	平成元年度	平成2年度	平成3年度
美沢川	遺跡1跡跡 A-01-01											15,055	15,000					15,000
	遺跡2跡跡 A-02-01																	15,000
	遺跡3跡跡 A-03-01	1,300					7,150				6,475	6,385	5,089	4,385			6,115	15,000
	遺跡4跡跡 A-04-01	300					6,425	732	6,425			6,544						2,425
	遺跡5跡跡 A-05-01						5,900		5,450									5,450
	遺跡6跡跡 A-06-01						5,900		5,450									5,450
	遺跡7跡跡 A-07-01																	5,450
	遺跡8跡跡 A-08-01																	5,450
	遺跡9跡跡 A-09-01																	5,450
	遺跡10跡跡 A-10-01																	5,450
苫小牧市	遺跡1跡跡 I-01-01	750	7,640	11,300		3,340												11,300
	遺跡2跡跡 I-02-01		10,500															10,500
	遺跡3跡跡 I-03-01	1,750				3,480												3,480
	遺跡4跡跡 I-04-01																	3,480
	遺跡5跡跡 I-05-01																	3,480
	遺跡6跡跡 I-06-01																	3,480
	遺跡7跡跡 I-07-01																	3,480
	遺跡8跡跡 I-08-01																	3,480
	遺跡9跡跡 I-09-01																	3,480
	遺跡10跡跡 I-10-01																	3,480
新千歳市	遺跡1跡跡 J-01-01																	3,480
	遺跡2跡跡 J-02-01																	3,480
	遺跡3跡跡 J-03-01																	3,480
	遺跡4跡跡 J-04-01																	3,480
	遺跡5跡跡 J-05-01																	3,480
	遺跡6跡跡 J-06-01																	3,480
	遺跡7跡跡 J-07-01																	3,480
	遺跡8跡跡 J-08-01																	3,480
	遺跡9跡跡 J-09-01																	3,480
	遺跡10跡跡 J-10-01																	3,480
計			4,900	16,480	27,820	15,312	25,370	11,360	8,875	11,475	23,620	7,722	16,325	16,007	11,484	41,313	6,901	282,940

●第1黒色土層以上を調査。第2黒色土層以下は調査未了。

●第2黒色土層以下を調査。但し、密着集計から除外。

●●調査面積約240㎡。但し、密着集計から除外。

I 調査の概要

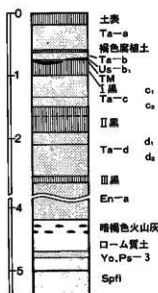


図 I-2 標準土層模式図

調査地区は昭和51年度の調査地区に隣接する部分で、川に臨む低位段丘にかかるので、竪穴住居跡の多数存在することが予想されていた。また従来薄前c火山灰層下の第Ⅱ黒色土層にのみ遺物が包含されていたが、低位段丘ではその火山灰層の上部の第Ⅰ黒色土層にも遺物の存在することが想定された。

調査にあたっては、第Ⅱ滑走路の中心線を基準として、これまでの調査と同様のグリッド設定を行い、調査を実施することとした。調査範囲は低位平坦面から台地上部の平坦面まで11,500㎡の予定で調査を開始したが、斜面が多く、遺物の出土状態が稀薄であったため、調査地区を広げて、最終的に、17,464㎡を調査した。ただし下位平坦面978㎡については第Ⅱ黒色土層の調査が未了となっている。

調査地区は図 I-4 に示したように東西に長く、f-70から一部 a-70区にかけて265m、南北に c-68

から e-72区にかけて約175mにおよぶ範囲であった。空港開港に伴う工事用道路の切替に伴い、e-72から開始し、e-71、e-70、f-70、d-70、d-69、c-70、b-70、b-69、c-69区と調査を進め、合わせて周辺の地区の調査と、c-68区の第Ⅰ黒色土層の調査を行った。なお c・d-70区に遺されていた近代の炭焼窯跡の調査も実施した。第Ⅰ黒色土層から縄文時代～弥生時代もしくは、中・近世の遺構、遺物が検出された。

4 調査結果の概要

第Ⅰ黒色土層からは、集石跡14か所、焼土2か所が認められ、縄文時代～弥生時代の遺物が多く出土した。焼土に伴って、鹿の肢骨の細片が出土し、また、中・近世頃のものかとみられる釘と炭化材も認められている。この内、縄文時代初頭頃の遺物は空港用地内の調査では初めて出土した。

第Ⅱ黒色土層からは、墓壇を含む土壇23、Tピット17、住居跡16の遺構が検出され、出土遺物には、縄文早期から後期の土器、石器、土・石製品が認められている。遺物の中で石刃鎌が3点いずれも破損品ながら出土している。この地域では従来未見のものである。早期の遺構としては、足形付土版が出土した P-16は、遺構の形態と、内部を埋めている土の堆積状態から墓壇と考えられるもので、東剣路Ⅳ式の時期のものともみられる。この種の遺構は先に昭和55年に美々6遺跡で1例発見されたのに次ぐものである。足形付土版も、昭和53年度の美々5遺跡で発見されたのに次ぎ2度目の発見であり、先のもも縄文早期のものと考えられるに至った。住居跡は、早期に属する遺構11軒の内、1基を除き壁柱穴がめぐって、プランは

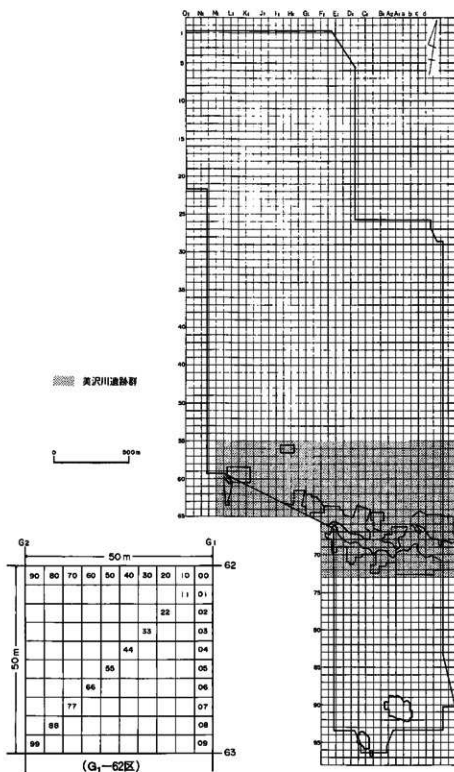


図1-3 美沢川流域の流域群の位置と発掘区の呼称

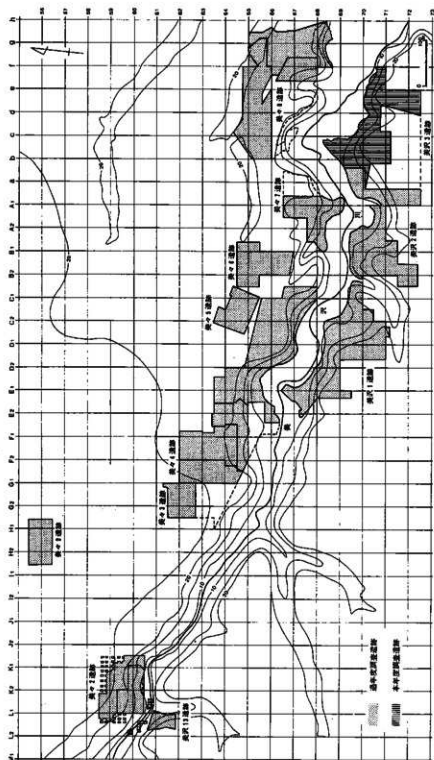


図 I-4 利根川流域の分布

径3～4mの円形である。Ⅱ黒層下面から掘り込まれていて、深さは70cm前後を測り比較的深い。東銅路Ⅳ式の時期のもので、この時期の住居跡がこれほどまとまって発見されたのは初めてである。前期では初頭の遺物がややまとまって出土している。関東地方の花積下層式に相当するとみなされる土器がほぼ器形を知りうるほどに復元されている。これも道内で初めての例である。縄文中期の円筒上層式の時期の住居跡が2軒、後期前葉の住居跡が1軒、後期中葉の住居跡が2軒検出されている。これらの内中期の住居跡1軒と、後期前葉の住居跡には焼失家屋の形跡が認められた。Tピットには単独に形成されているようにみえる溝形のもと、明らかに列をなして配置されている小判形のものがある。中期、後期の遺構はⅡ黒層の上部から掘り込まれていた。

なおⅡ黒層の調査終了後Ⅲ黒層の調査を行ったところ、c-69-70区で黒曜石製のフレイクが1点出土した。この水和層年代は約12,000年前と測定されている。未調査区に接する部分であるので、その部分での調査結果と合せて報告する予定である。

5 遺物の記載について

土器については昭和51年以来時期毎の区分を行ってきた。その間若干の変更をみているが本年度の調査結果と、近年の調査結果を考え合わせ、以下の区分によって表示することとした。石器については、器種別の大分類にとどめている。

(1) 土器

I群 縄文時代早期に属するものを本群とする。本群は大きく二つに分類される。

a類 貝殻縁圧痕文、条痕文のある土器群。今回の発掘調査では出土していない。

b類 縄文、菱糸文、結条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などの施される土器群。これらは東銅路Ⅲ式、コックロ式、中茶路式、東銅路Ⅳ式に相当するものがある。

b-1類 東銅路Ⅲ式に相当するもの。c-69区で主に出土した。集計はb-2類に含めている。

b-2類 コックロ式に相当するもの。c-69区で主に出土した。

b-3類 中茶路式に相当するもの。b・c-69、c・d・e・f-70区で主に出土した。

b-4類 東銅路Ⅳ式に相当するもの。b・c-69区、c-70区で主に出土した。

Ⅱ群 縄文時代前期に属するものを本群とする。本群は大きく二つに分類される。

a類 縄文の施された円底、尖底を特色とする土器群。さらに二者に分類される。

a-1類 刷土土器に相当するものと、結束のない羽状縄文の施された円底を特色とする土器を本類とする。

a-2類 春日町式、中野式など、縄文の施された尖底を特色とする土器を本類とする。今回の調査では出土していない。

b類 円筒土器下層式、植苗式に相当する土器群。今回の調査では出土していない。

Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器を本群とする。さらに二者に分類される。

I 調査の概要

a 類 円筒土器上層式に相当するもの。b・c-69区で主に出土している。

b 類 天神山式・柏木川式・トコロ6類等に相当するもの。今回の調査では出土していない。

IV群 縄文時代後期に属する土器を本群とする。さらに三者に分類される。

a 類 余市式・入江式に相当するもの。e-69区で主に出土している。

b 類 船泊上層式・手稲式・鮎瀬式・エリモB式に相当するもの。b・c-69区で主に出土した。

c 類 堂林式・三ツ谷式・御殿山式に相当するもの。c-69区で主に出土した。

V群 縄文時代晚期に属するものを本群とする。今回の発掘調査では出土していない。

VI群 縄文時代中期に属する土器を本群とする。c-68区で出土した。

VII群 縄文時代に属する土器を本群とする。c-68区で出土した。

(2) 石器

出土した石器には、剥片石器に石鏃、石槍、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー類、異形石器があり、礫石器には石斧、たたき石、すり石、くぼみ石、石錘、砥石、石皿、台石、などがある。この他に石核(コア)、剥片、石屑(フレイク、チップ)、擦切痕のある礫、自然礫などがある。使用痕、加工痕のある剥片はRフレイクに一括している。石製品には玉類、ミニチュア石斧などがある。

なお表に示した石材の略号は次のとおりである。

Apl.: アプライト。And.: 安山岩。Aga.: メノウ。Aga-Sh.: メノウ質頁岩。Ba.: 玄武岩。Bl-Sch.: 黒色片岩。Che.: チャート。Dio.: 閃緑岩。Gni.: 片麻岩。Gra.: 花崗岩。Gr-Mud.: 緑色泥岩。Gr-Sch.: 緑色片岩。Jad.: 硬玉。Mud.: 泥岩。Obs.: 黒曜石。Per.: カンラン岩。Por.: 珩岩。Qua.: 珪岩。Sa.: 砂岩。Sch.: 片岩。Ser.: 蛇紋岩。Sh.: 頁岩。Sl.: 粘板岩。Ta.: 滑石。Tu.: 凝灰岩。Hornf.: ホルンフェルス。Rhy.: 流紋岩。

(3) 土製品

土製品には、土器片を利用した円盤がある。

(4) 鉄製品

鉄製品には釘がある。

(5) その他

上記の他に、動植物の遺存体が出土している。

(大沼忠春)

Ⅱ 第Ⅰ黒色土層の調査

1 調査の概要

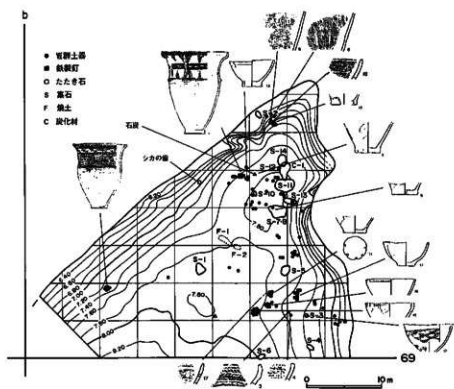
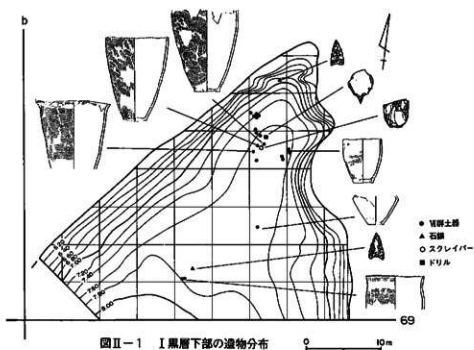
調査範囲はc-68区とそこから、c-69区へ続く部分で1,100㎡ほどである。地形は美沢川右岸の低位段丘で川が北側に大きく蛇行する部分の南側にあたり、ほぼ平坦な面をなしていた。Ta-a・b層を除去するとⅠ黒層上面に、炭化材、礫群、擦文土器などが認められ、浅い窪地をなす所も認められた。炭化材は台地の先端近くに、柱状のものが数本やや放射状に広がる状態で検出された。その細部の構造を明確にすることはできなかったが2・3本の柱で組立てられた構築物が炭化して倒れたもののようであった。礫群はB調査の際に出土したものを含めて14か所にあり、多くは中央から東側に存在した。Ⅰ黒層上面に露出していたもの他、土を被っているものもあった。焼土は調査区の中央付近にあり、わきにやや広く白色の灰が広がっていて、シカの肢骨片が含まれていた。包含層からはシカの歯も検出された。また、擦文土器も所々まとまった状態で出土した。中にはⅠ黒層上面に露出していたものもあった。調査の結果、Ⅰ黒層の堆積は先端側中央部では薄く、その下のTa-c層が中央でわずかに高まりをもつ状態であった。その先端側のわずかに高まる所から縄文時代の初頭頃の土器が3個体分と破片3個体分がつぶれた状態で一括出土した。浅く窪みをなす部分は住居跡の存在を予想して調査を行ったが、縄文時代前期前葉の土器と石鏃・礫などが出土し、作業場として利用されたような形跡がみられたのみで、Ta-c層の上面がやはりくぼみを示す状態であった。おそらく、より下のⅡ黒層に住居跡などのくぼみが存在し、Ta-c層がそれを覆って堆積しているものと判断された。

(大沼忠春)

表Ⅱ-1 Ⅰ黒層出土遺物一覧表

名 称	数 量	名 称	数 量
土 器 (Ⅵ群)	785	コ ア	1
(Ⅶ群)	812	R フレイク	10
土 器 計	1,597	フレイク・チップ	162
石 鏃	2	礫・礫片(石炭1)	199
石 錐	1	鉄 製 品	1
スクレイパー	1	石 器 等 計	385
た た き 石	4	総 計	1,982
台 石	4		

II 第I黒色土層の調査



2 遺構

(1) 焼土

F-1 (図Ⅱ-3、図版Ⅱ-4・5)

位置 c-68-46・47

F-2 (図Ⅱ-3、図版Ⅱ-4・5)

位置 c-68-46・47

土層 1 灰白色(灰・焼骨片を含む) 2 赤褐色(焼土)

3 黒褐色(Ⅰ黒上面は赤褐色の焼土が混じる)

4 明赤褐色(焼土 細かい炭化物、焼骨片を含む)

5 黒色(Ⅰ黒)

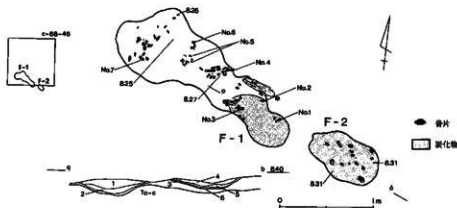
6 暗赤褐色(焼土+Ⅰ黒 0.5~1cmの厚さで堆積する)

特徴 F-1と2をまとめて記載する。F-1、2はⅠ黒層を5~10cm隔った段階で検出された。F-1は非常に硬く締った赤褐色の焼土が堆積し、骨片と炭化物が焼土の上面と周囲から検出された。F-2は硬く締った灰白色の炭化物混りの灰とその下部に焼土が堆積していた。上面には骨片が広い範囲から検出された。すべて鹿の骨で焼けた状態であった。また隣接するc-68-55区からはシカの歯(シカRM₃)が検出された。F-1、2はほぼ同時期のものと考えて良いであろう。

(追藤香澄)

表Ⅱ-2 焼土出土の動物遺存体

図番号	同定結果	重量(g)	図番号	同定結果	重量(g)
1	シカ焼骨片(四肢)	1.2	5	シカ中手四肢(焼)	2.0
2	シカ焼骨片(四肢)	1.6	6	シカ大腿骨他片	9.8
3	シカ焼骨片(四肢)	1.8	7	シカ焼骨片(四肢)	10.6
4	シカ中手足骨片	0.8			



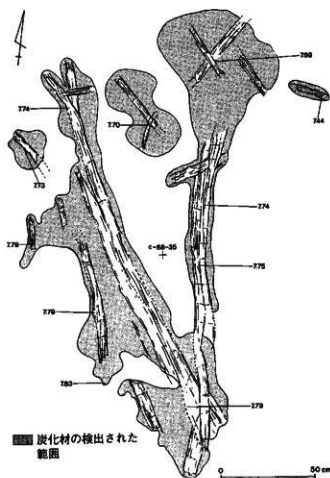
図Ⅱ-3 Ⅰ黒層の焼土

Ⅱ 第Ⅰ黒色土層の調査

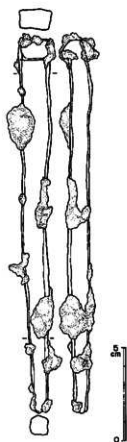
(2) 炭化材 (図Ⅱ-4、図版Ⅱ-3)

位置 c-68-24・25・34・35

特徴 調査区南東部の台地の先端近く、標高7.80mのⅠ黒層では一番高い位置から検出された。長さ3～4m、幅10～20cmの柱状のものが、数本放射状に重なり広がる状態で検出された。これら太い材の間には短い材が折り重なっている。放射状に重なった部分はやや高まりがある状態であった。何か簡単な建物のようなものが構築されていたかと思われる。検出されたレベルから判断すると中世頃の遺構であるとみなされる。
(遠藤香澄)



図Ⅱ-4 Ⅰ黒層上面の炭化材出土状況



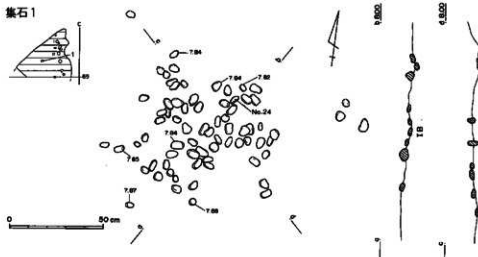
図Ⅱ-5 Ⅰ黒層出土の鉄製釘

(3) 集中職

集石1 (図Ⅱ-6、図版Ⅱ-2-1)

位置 c-68-57

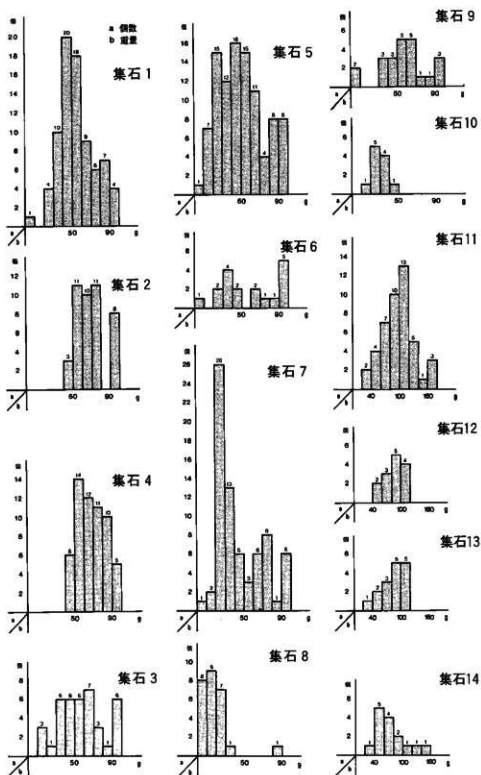
特徴 標高7.90mの平坦地にある。Ta-b火山灰を除去した段階で、10数個の礫が検出された。さらに5-10cm程掘り下げると1m程の狭い範囲に79点の礫がうまっていた。礫はやや凹んだ地形のところに、置かれた様な状態であった。礫は重さが50g前後のものが多い。Ⅱ黒層の石器(たたき石)を利用したかと思われるものもあった(図No.24)。



図Ⅱ-6 集石1

表Ⅱ-3 集石1 計測値

番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)
1	61.3	26.6	18.3	49.2
2	62.3	27.8	16.5	59.4
3	49.5	23.0	18.1	50.8
4	2.0	9.9	1.8	1.4
5	45.0	28.6	13.0	35.5
6	58.0	37.9	14.7	49.5
7	69.0	68.0	21.3	101.3
8	51.0	43.8	13.4	49.2
9	45.0	42.0	25.0	61.8
10	55.0	47.0	20.1	53.2
11	56.1	43.7	20.8	61.0
12	52.3	38.0	18.3	54.6
13	35.0	43.1	11.6	40.5
14	48.1	31.5	21.4	46.8
15	66.0	37.4	18.4	72.1
16	55.0	41.8	15.0	42.3
17	68.2	37.8	22.6	80.9
18	59.5	41.5	23.7	78.6
19	84.4	37.5	27.1	57.8
20	63.5	38.9	17.7	68.8
21	43.3	27.4	18.5	46.0
22	59.3	38.8	20.6	75.0
23	51.3	38.1	14.9	41.1
24				49.5
25	51.1	37.5	14.3	43.3
26	46.8	38.0	13.8	37.1
27	41.2	38.9	11.4	28.6
28	55.2	40.5	20.0	72.9
29	58.4	38.5	15.0	48.8
30	62.4	48.5	17.4	88.1
31	58.9	51.6	15.5	75.0
32	49.0	34.6	12.3	32.6
33	47.4	42.8	21.0	54.9
34	62.8	39.0	20.0	58.8
35	47.5	30.4	20.2	38.4
36	57.4	41.7	17.8	53.3
37	66.0	37.0	17.0	64.9
38	49.4	39.4	23.5	62.8
39	56.9	40.4	28.0	88.6
40	63.0	43.0	19.0	88.1
41	77.6	40.7	16.3	75.3
42	50.5	31.5	12.0	28.4
43	61.7	31.1	16.3	50.3
44	60.0	43.2	22.7	88.6
45	55.5	27.7	12.8	40.6
46	23.7	33.2	20.2	32.3
47	50.0	42.2	16.0	48.8
48	37.8	29.6	26.1	49.3
49	47.0	27.0	20.0	57.5
50	57.0	41.0	18.5	64.9
51	44.5	31.0	18.6	38.4
52	66.3	36.6	17.9	54.0
53	51.5	33.1	20.9	54.8
54	66.6	41.2	13.3	50.6
55				96.8
56	58.8	43.5	11.1	42.4
57	52.8	31.4	22.1	51.8
58	58.2	41.1	18.0	57.2
59	61.0	48.0	21.8	98.1
60	50.0	34.9	16.0	39.2
61	65.7	49.5	17.4	81.5
62	61.3	39.5	12.5	49.3
63	53.5	39.8	18.3	46.4
64	51.3	36.0	12.0	35.9
65	60.0	33.3	21.0	55.2
66	41.9	32.9	22.6	50.0



図Ⅱ-7 集石1～14の重量ヒストグラム

遺物 大 き さ (mm)					遺物 大 き さ (mm)					遺物 大 き さ (mm)				
番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)	番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)	番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)
67	42.5	25.0	21.4	29.8	72	62.8	37.4	15.3	55.4	77	54.1	39.3	11.8	40.0
68	49.6	35.4	19.3	46.6	73	41.7	35.5	14.5	31.0	78	50.7	37.8	9.8	31.0
69	49.9	35.1	18.0	49.3	74	59.4	40.0	13.9	54.2	79	45.0	44.1	15.0	36.3
70	44.1	33.2	12.1	27.8	75	40.4	39.3	21.4	49.7					
71	45.8	38.1	26.1	66.8	76	52.1	40.2	17.5	60.1					

集石 2 (図 II-8)

位置 c-68-33

特 徴 調査区の北端、美沢川に続く標高5.90m~6.60mの斜面にある。Ta-b火山灰層を除去した段階で確認できた。90gをこす礫(8点)もあるが、長さが5~7cm、重さ50~70gの厚みのある楕円形の比較的大きなものが多い。斜面の端にあったものが崩れ落ちた可能性もある。

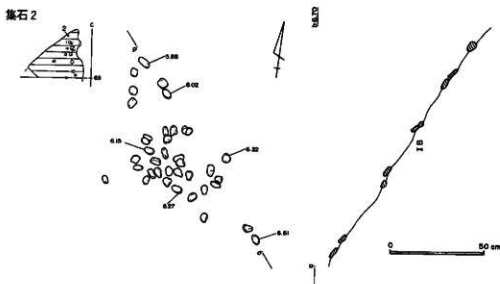


図 II-8 集石 2

表 II-4 集石 2 計測値

遺物 大 き さ (mm)					遺物 大 き さ (mm)					遺物 大 き さ (mm)				
番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)	番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)	番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)
1	55.7	37.2	21.3	57.6	16	53.2	41.3	13.3	79.9	31	48.5	37.4	19.0	47.0
2	55.3	41.5	20.2	72.7	17	52.7	37.9	28.4	69.1	32	57.0	43.0	36.0	121.4
3	57.0	40.3	18.1	57.4	18	60.5	36.8	15.9	55.0	33	60.0	40.0	17.2	66.6
4	59.1	39.4	29.4	96.1	19	62.0	37.1	21.8	64.2	34	66.0	43.4	22.0	94.1
5	56.9	36.4	22.2	70.4	20	46.0	37.2	20.9	51.3	35	54.5	46.9	27.0	98.0
6	54.3	33.6	23.3	70.8	21	51.1	35.0	23.0	54.2	36	50.0	40.0	16.7	47.6
7	57.8	39.5	16.5	56.0	22	48.0	36.3	23.0	64.4	37	45.0	40.0	23.6	60.7
8	41.4	35.8	21.5	46.2	23	58.2	44.2	31.4	108.8	38	68.5	41.7	27.5	109.4
9	61.8	37.0	17.0	53.4	24	55.4	41.8	18.0	58.1	39	42.5	38.5	21.4	56.0
10	54.3	43.8	30.0	74.4	25	50.9	38.1	24.1	66.5	40	52.4	39.0	23.9	67.9
11	61.1	39.5	19.5	72.2	26	55.4	38.5	22.5	70.9	41	58.5	39.1	22.4	73.4
12	60.2	39.5	30.7	70.5	27	52.7	48.5	25.0	97.0	42	61.0	45.2	22.3	75.5
13	56.0	35.5	23.0	54.9	28	57.8	44.0	14.5	53.3	43	61.3	49.4	18.6	88.3
14	52.5	43.3	39.0	61.0	29	69.8	45.0	22.9	109.1					
15	60.1	40.6	20.4	73.6	30	55.0	35.0	27.5	67.2					

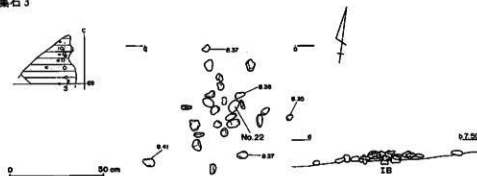
Ⅱ 第Ⅰ黒色土層の調査

集石 3 (図Ⅱ-9)

位置 c-68-28

特徴 Ta-b 火山灰を除去した段階で礫が何点か確認できた。礫は長さ 4-6 cm、幅 4 cm 程の比較的大きい角ばった礫が多い。図 No. 22 の様な扁平な礫もある。図Ⅱ-19-12 の土器は集石とはほぼ同じ面から出土した。

集石 3



図Ⅱ-9 集石 3

表Ⅱ-5 集石 3 計測値

遺物 番号	大 き い	幅	厚 さ	重量(g)
9	36.2	30.1	10.0	16.7
10	62.3	45.8	28.1	97.1
12	55.3	36.8	27.1	76.7
14	72.5	35.4	9.2	40.5
15	36.8	28.8	9.7	17.4
16	37.7	30.0	10.0	18.0
20	49.8	30.5	13.0	40.8
21	64.1	49.0	20.0	101.6
22	106.0	84.4	25.0	422.9
25	54.3	36.1	15.8	48.8
26	53.0	26.3	11.1	20.2
27	42.3	33.0	25.0	30.9
28	59.0	35.0	18.6	58.2
29	43.1	38.0	22.4	47.2
30	49.5	33.0	27.1	62.0
31	45.3	33.9	24.5	61.6
32	54.0	41.3	28.6	100.2
33	42.2	29.4	20.5	31.2
34	55.4	45.5	24.6	63.3
35	44.4	32.6	29.5	41.6
36	54.0	35.3	24.3	59.8
37	62.7	33.0	25.0	79.1
38	61.6	47.7	18.6	67.2
39	49.8	29.2	20.4	32.6
40	51.5	33.3	20.5	47.8
41	69.2	49.4	17.4	93.6
42	49.4	36.7	19.3	34.1
43	61.2	34.3	25.1	74.3
44	57.0	39.5	32.4	84.6
45	48.2	36.6	18.0	39.8
46	50.0	38.1	25.5	62.4
47	43.2	36.7	22.0	57.2
48	53.1	38.5	20.8	62.2
49	57.1	29.3	23.5	56.6
50	61.6	39.0	19.9	63.1
51	50.3	25.0	19.6	34.1
52	56.6	41.0	26.8	87.9
53	51.5	25.4	20.5	38.2
54	57.5	38.7	19.6	56.0

集石 4 (図Ⅱ-10, 図版Ⅱ-6-1)

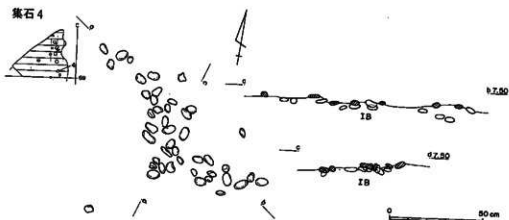
位置 c-68-38, 39

特徴 調査区南端に位置する。1.5m 四方程の中に、58個の礫が検出された。礫は扁平な楕円形のものが多く、長さ 5-7 cm、幅 4 cm 前後、重さ、50-80 g のものである。

集石 5 (図Ⅱ-11)

位置 c-68-27, 37

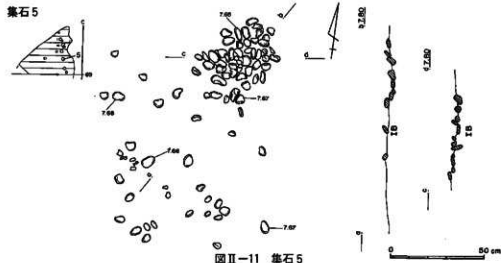
特徴 Ta-b 火山灰を除去した段階で 1.5m 四方程の範囲から礫が重なる様な状態で検出された。98個の礫のうち半数以上が破片であった。これらの破片は接合したものも何点かあった。Ⅱ黒層の石器を利用したとみられるものもある。礫はやや凹んだ地形のところにまとめて置かれているような状態である。破片のものも含めて 40-60 g 位のものが多く。



図II-10 集石4

表II-6 集石4 計測値

番号	長さ	幅	高さ	重量(g)
1	63.7	32.1	26.5	75.0
2	73.5	39.6	10.4	34.1
3				32.5
4	64.4	42.0	23.0	94.4
5	67.1	43.7	26.0	94.2
6	68.0	39.5	21.7	85.2
7	48.6	35.4	20.4	53.8
8	67.2	38.3	21.4	91.7
9	45.5	42.0	22.0	52.7
10	70.4	44.8	14.5	83.6
11	42.1	37.3	22.2	48.0
12	48.2	31.1	24.9	51.2
13	57.2	39.3	19.3	64.9
14	51.0	33.1	21.0	79.5
15	61.2	47.3	26.0	99.0
16	60.5	35.0	25.2	81.9
17	54.0	41.2	14.6	64.8
18	56.0	37.3	20.0	65.6
19	64.0	45.5	21.0	99.6
20	46.0	38.3	25.0	53.8
21	48.0	41.0	26.1	68.2
22	58.0	36.0	15.8	48.0
23				43.6
24	56.1	43.8	19.0	65.7
25	58.5	45.5	23.2	89.9
26	66.4	40.3	19.0	73.7
27	67.4	42.8	14.3	67.8
28	66.5	48.9	15.1	88.4
29	70.0	43.0	18.1	86.3
30	64.6	37.4	24.8	80.8
31	68.2	43.1	13.0	69.8
32	58.0	35.5	21.5	70.4
33	59.7	37.0	24.4	74.8
34	54.8	43.0	20.5	66.4
35	52.0	35.5	28.0	70.2
36	52.0	36.8	25.0	55.7
37	48.0	40.4	21.4	61.0
38	65.0	32.2	28.3	84.5
39				48.7
40	58.2	40.3	19.0	66.3
41	61.2	43.4	19.3	79.4
42	49.0	40.0	18.9	53.7
43	62.4	43.0	20.0	78.8
44	57.4	46.7	17.0	97.2
45	43.5	35.6	22.9	51.0
46	56.0	42.3	15.0	70.7
47	49.4	37.7	18.5	45.7
48	58.0	38.0	22.4	74.4
49	45.4	34.2	21.7	52.8
50	50.5	37.5	23.4	54.8
51	62.5	34.6	24.4	92.1
52	55.8	41.3	12.0	67.0
53	54.3	38.4	15.3	47.9
54	62.7	38.6	22.0	78.8
55				66.7
56	49.7	39.3	21.0	53.4
57	61.6	50.1	16.8	83.7
58	54.3	35.0	25.8	64.5



図II-11 集石5

Ⅱ 第Ⅰ黒色土層の調査

表Ⅱ-7 集石5 計測値

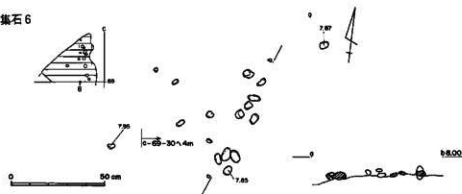
遺物 番号	大 き さ (mm)				重量(g)		遺物 番号	大 き さ (mm)				重量(g)		遺物 番号	大 き さ (mm)				重量(g)	
長さ	幅	厚さ	重さ	長さ			幅	厚さ	重さ	長さ	幅			厚さ	重さ					
1					48.3		34					89.5		67					14.6	
2	61.0	46.4	21.0		52.3		35					51.4		68					13.4	
3	51.0	40.5	17.2		53.0		36					61.2		69					14.8	
4					46.7		37					80.4		70	53.0	43.7	17.0		55.8	
5					43.4		38					33.6		71	49.3	38.3	15.0	43.9		
6					44.5		39					48.9		72	49.3	31.5	16.7	32.4		
7	67.8	40.2	21.0		85.4		40					25.5		73	60.0	37.0	17.0	50.2		
8	62.4	42.0	22.0		105.0		41					30.5		74	61.6	36.5	19.0	37.2		
9	63.4	34.0	22.5		69.5		42	47.4	38.0	23.7		56.8		75	48.1	27.0	16.3	23.0		
10	45.6	33.0	29.1		73.4		43					54.6		76	65.0	46.0	21.0	82.4		
11					55.9		44	50.8	37.6	24.6		62.2		77	83.6	41.6	21.5	83.5		
12	63.1	36.6	24.0		56.1		45					58.4		78	42.0	31.0	21.0	48.1		
13					44.7		46					57.4		79	42.1	24.9	14.1	53.2		
14					32.1		47					42.7		80	55.9	39.3	17.7	62.8		
15					86.2		48					73.1		81	56.5	44.2	23.8	77.3		
16					56.0		49					80.4		82	31.3	40.7	17.0	48.5		
17					24.8		50					19.0		83	49.5	27.5	13.2	28.9		
18					20.0		51	56.8	34.3	17.2		48.5		84	42.5	27.0	15.3	20.7		
19					44.2		52					21.7		85					9.3	
20					67.0		53					58.2		86					17.7	
21					53.5		54					34.0		87	51.4	38.0	26.0	62.1		
22					47.3		55					28.2		88	66.6	42.6	21.2	87.1		
23					62.2		56					35.5		89	45.0	28.6	17.0	25.2		
24					27.1		57	62.3	40.6	17.4		75.0		90	53.0	38.0	17.2	46.0		
25					26.6		58					24.2		91	42.0	29.3	10.0	19.8		
26	44.0	36.0	16.1		27.9		59					40.6		92	45.3	32.9	22.8	45.3		
27					34.3		60					64.7		93	133.0	104.0	22.0	756.0		
28	64.4	45.0	18.0	69.2			61	68.5	47.3	19.4	101.8		62	94	65.3	46.2	18.6	80.9		
29					33.2		62					40.8		95	68.6	49.5	18.2	82.7		
30	60.7	39.1	16.5	51.9			63					59.6		96	39.5	43.6	19.4	58.4		
31					23.9		64	66.6	50.5	17.7	95.6		65	97	72.0	44.3	25.9	115.2		
32	58.3	45.5	25.0	82.0			66					34.4		98	69.0	45.0	20.3	141.5		
33					24.8		67					15.4								

集石6 (図Ⅱ-12)

位 置 c-69-39

特 徴 調査区南端の標高7.90mの平坦面に位置する。礫はいくつかが立った状態で出土していることから、窪みに置かれたような状態であったと予想できる。1m四方の中にまとまっていた。径が5～6cm、重さが70g～90gの比較的大きな礫と径が4cm前後、重さ50g以下の小形の歪な礫がある。遺物番号18の様な小指の大きさ程の礫もある。

集石6



図Ⅱ-12 集石6

表Ⅱ-8 集石6 計測値

遺物 番号	大 き さ (mm)			重量(g)	遺物 番号	大 き さ (mm)			重量(g)	遺物 番号	大 き さ (mm)			重量(g)
	長 さ	幅	厚 さ			長 さ	幅	厚 さ			長 さ	幅	厚 さ	
1	89.7	38.6	18.5	86.2	7	65.0	40.2	25.5	97.7	13	42.7	33.0	21.5	43.8
2	62.0	48.8	22.0	102.2	8	70.4	48.2	16.2	91.8	14	50.0	27.2	18.0	30.9
3	69.5	49.0	20.0	98.9	9	65.4	39.0	22.4	81.6	15	47.4	30.5	18.6	38.0
4	37.0	30.8	11.5	30.6	10	49.3	33.4	22.1	49.8	16	36.5	26.6	17.3	25.2
5	52.3	44.8	21.0	74.9	11	58.8	38.1	31.5	95.0	17	44.3	29.0	22.2	33.6
6	53.7	46.2	18.7	62.1	12	41.8	27.3	15.0	22.2	18	21.8	14.4	8.0	2.9

集石7 (図Ⅱ-13)

位 置 c-69-36

特 徴 Ta-b火山灰層を除去した段階で確認できた。78個の礫が広範囲から出土した。北東側の1.5m四方の一群と、南西側に散らばる約20個の一群は別なまとまりと考えたほうが良いかもしれない。

礫はNo. 2・6・7の様な長さ5~7cm、幅4~5cmの楕円形の扁平礫が北東側に集中しその東側に33・34・40・42等の長さ3~4cm、幅3cm前後の比較的小さい礫が広がっている。24・30・29は礫片である。No. 1のような敲打痕が側縁の一部にみられる大きな扁平礫や、礫片は縄文時代の石器を利用しているものかもしれない。

南西側のやや離れた位置にある一群は、径4~5cm、幅3cm前後の小さな礫である。

No. 33~39の礫の下に黒色土の薄い層が一層あり、その下位から集石8が検出された。

集石7のNo. 32~39の礫はレベル的に集石7の中では一番低い位置にあること、礫の形状が集石8のものと似ていることなどから、下位の礫群(集石8)のものとしたほうが良いかもしれない。

礫群とはほぼ同じレベルから、冴群土器(図Ⅱ-19-9)の底部が出土した。

集石8 (図Ⅱ-13)

位 置 c-69-36

特 徴 集石7の礫No. 33~39を取り除いた段階で薄い黒色土の自然堆積層があり、それを掘り下げた段階で浅い窪みに置かれたような状態で26個の礫が重なって出土した。No. 1を除きほかの礫は長さ3~4cm、幅2~3cm重さ40g以下の小さな丸みのある礫である。集石の中で一番小さな礫の一群であるが、形状の違う礫群(集石7と集石8)が間層をはさんで出土したことから時間的な差があることがわかる(図の網の部分は集石7の網の部分と同じ位置関係を示す)。

集石9

位 置 c-69-36・46

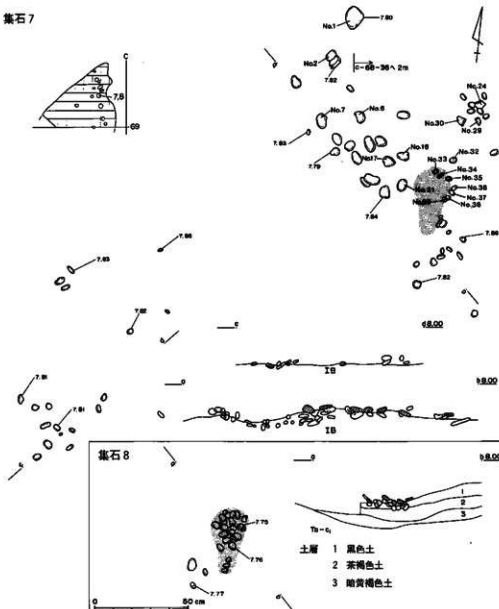
特 徴 集石7・8の西側に位置する。試掘調査のビットの掘削によって原位置がわからないものが大部分で、テストビット周辺に残っていた礫の出土状態などから集石であると判断した。礫は重さ900gをこす大きな扁平礫(遺物番号4)をはじめ、長さ5~7cm、幅4cm内外の楕円形の扁平な礫が主である。

II 第I黒色土層の調査

表Ⅱ-9 集石9 計測値

遺物 番号	大 き さ (mm)				遺物 番号	大 き さ (mm)				遺物 番号	大 き さ (mm)			
	長 さ	幅	厚 さ	重量(g)		長 さ	幅	厚 さ	重量(g)		長 さ	幅	厚 さ	重量(g)
1	46.2	25.0	18.7	30.6	9	45.4	30.0	23.6	44.3	17	48.7	37.1	16.7	39.7
2	31.6	45.2	14.5	54.5	10	79.0	55.0	17.3	121.8	18				69.3
3	53.1	43.6	18.0	63.9	11	55.5	30.4	24.4	54.0	19				31.4
4	163.0	126.0	28.0	915.0	12	57.5	28.5	17.5	40.4	20				39.4
5	68.0	42.1	12.4	61.1	13	70.0	38.4	25.0	89.4	21				48.6
6	47.8	36.6	24.8	66.4	14	48.0	35.0	27.3	54.6	22				79.6
7	55.8	38.0	20.2	62.2	15	65.3	43.0	23.4	113.5	23				8.5
8	62.7	47.5	19.6	95.8	16	48.1	30.0	25.2	55.4	24				9.9

集石7



図Ⅱ-13 集石7・8

表Ⅱ-10 集石7 計測値

遺物 番号	大 き さ (mm)				遺物 番号	大 き さ (mm)				遺物 番号	大 き さ (mm)			
	長	幅	厚	重量(g)		長	幅	厚	重量(g)		長	幅	厚	重量(g)
1	123.5	59.0	25.5	583.5	27	30.2	25.0	18.1	23.3	52	44.1	35.0	18.5	35.2
2	70.5	42.5	15.3	76.6	28	37.1	26.2	18.4	23.0	53	14.7	42.7	13.1	48.6
4	64.4	48.0	17.5	78.9	29				45.6	54	39.9	35.0	15.0	35.2
5	34.3	28.9	14.4	23.6	30				55.4	55	37.0	32.5	23.4	39.2
6	69.4	44.0	21.2	112.9	31	42.7	31.7	14.7	32.1	56	41.0	30.0	17.4	27.6
7	72.1	51.2	11.6	69.9	32	39.2	32.5	13.6	24.8	57	43.0	37.5	21.4	47.1
8	39.8	26.5	19.4	30.6	33	38.8	22.0	21.3	26.0	58	57.8	33.1	18.3	54.2
9	71.0	48.2	20.0	107.4	34	40.5	25.0	20.0	27.5	59	62.6	38.6	20.0	63.6
10	56.5	44.3	21.0	71.9	35	42.1	31.6	22.4	42.9	60	32.4	32.0	15.0	24.1
11	63.8	49.6	17.6	85.1	36	34.4	25.5	20.5	23.9	61	44.5	32.7	11.1	22.7
12	69.0	45.6	13.7	77.8	37	35.5	27.0	12.3	17.8	62	32.5	30.5	20.0	30.0
13	73.2	47.8	12.2	71.6	38	45.0	30.3	20.1	42.1	63	40.3	30.3	15.8	25.0
14	62.0	51.4	25.4	106.2	39	35.0	27.6	20.0	25.8	64	46.1	29.5	21.4	33.8
15	67.5	45.7	19.2	96.7	40	16.0	9.7	6.1	14.0	65	40.0	32.8	12.7	23.6
16	64.0	49.7	14.5	69.3	41	36.0	26.5	19.1	26.2	66	33.8	29.0	17.1	23.0
17	64.0	50.4	14.3	71.9	42	44.7	28.8	13.6	31.1	67	61.5	32.1	29.6	52.0
18	79.0	43.5	16.7	104.0	43	37.3	29.5	20.7	35.8	68	34.9	30.3	17.9	25.7
19	58.0	43.3	20.8	79.1	44	35.5	30.4	12.2	18.0	69	36.5	34.1	12.4	30.4
20	62.5	51.7	22.4	107.2	45	41.0	29.2	18.4	32.3	70	37.8	28.0	15.8	23.6
21	57.3	47.1	15.0	69.9	46	36.2	29.9	15.6	23.8	71	50.8	33.8	24.0	65.9
22	44.2	25.6	20.1	29.0	47	40.0	26.6	17.5	27.2	72	41.3	32.7	14.0	26.7
23	40.8	25.3	16.6	25.5	48	43.0	23.3	16.4	24.2	73	46.3	33.0	12.0	27.5
24				70.8	49	41.0	31.2	18.7	33.9	74				66.0
25	36.7	27.8	13.7	21.0	50	34.1	27.3	15.8	24.5					
26	44.0	27.5	12.2	25.0	51	42.3	40.0	17.1	41.2					

表Ⅱ-11 集石8 計測値

遺物 番号	大 き さ (mm)				遺物 番号	大 き さ (mm)				遺物 番号	大 き さ (mm)			
	長	幅	厚	重量(g)		長	幅	厚	重量(g)		長	幅	厚	重量(g)
1	72.8	50.0	15.1	95.0	10	46.3	31.6	15.0	33.8	19	52.7	32.0	12.5	17.6
2	41.3	32.1	19.5	37.9	11	43.6	29.2	12.1	21.9	20	35.5	30.6	17.0	34.7
3	32.5	24.7	18.4	17.7	12	45.5	31.5	11.6	25.1	21	32.8	28.1	14.0	19.3
4	43.1	36.0	14.3	37.6	13	39.4	29.0	22.1	32.2	22	36.8	28.3	16.7	24.6
5	35.1	25.2	15.0	19.7	14	40.3	30.6	17.1	30.8	23	40.9	25.5	16.1	22.5
6	38.3	24.7	15.4	19.2	15	42.9	32.4	19.5	40.6	24	38.9	24.8	13.0	17.4
7	37.8	27.7	14.1	24.8	16	42.3	32.2	13.5	27.9	25	37.7	24.2	19.1	23.4
8	41.5	33.5	21.6	39.6	17	33.5	26.7	14.7	16.3	26	43.0	29.8	14.7	25.0
9	41.4	28.4	21.0	30.5	18	32.4	22.5	19.2	19.8					

集石10 (図Ⅱ-14左)

位 置 c-69-35

特 徴 I 黒層を5cm程掘り込んだ段階で検出された。11個の礫が20cm四方の極狭い範囲に集中していた。これらの礫は長さが4cm、幅3cm内外、重さが15g～30gの小さな規格のものばかりである。集石8の礫に似ている。

集石12 (図Ⅱ-14中)

位 置 c-69-34

特 徴 12個の礫が30cm四方の中に重なる様な状態で出土した。これらの礫は長さが6～7cm前後、幅5cm、厚さ2cm内外の楕円形の扁平な礫である。集石13の礫に似ている。南西側に隣接する集石11よりも全体的に小形の扁平礫である。

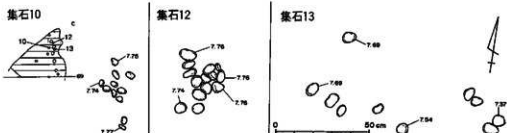
集石13 (図Ⅱ-14右、図版Ⅱ-2-2)

位 置 c-68-25、35

特 徴 調査区東側の標高7.80m～7.40mの美沢川に臨む斜面にある。集石12に似た扁平な礫

II 第I黒色土層の調査

が16点散らばっていた。長さ、幅はほぼ同じ位であるがやや薄味である。集石とはほぼ同一レベルから鉄製の釘(図II-5、図版II-5-6)が検出されている。



図II-14 集石10・12・13

表II-12 集石10 計測値

遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)
1	46.6	32.3	18.4	35.1
2	43.0	29.0	14.7	28.6
3	43.1	30.2	26.5	45.6
4	38.4	27.4	16.2	24.6

遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)
5	41.3	22.1	18.3	34.8
6	36.7	30.2	14.0	24.7
7	38.2	25.0	14.7	17.4
8	44.2	24.3	15.6	34.4

遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)
9	42.4	30.0	29.0	36.0
10	44.3	33.2	9.7	23.5
11	40.5	23.0	18.3	23.5

表II-13 集石12 計測値

遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)
1	73.1	52.5	14.1	84.8
2	57.2	44.8	16.5	67.7
3	64.0	39.3	17.6	60.4
4	61.0	50.3	11.6	59.5
5	51.1	41.6	15.0	59.7

遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)
6	55.1	47.5	29.9	101.7
7	74.0	56.5	10.3	69.6
8	85.7	57.8	30.8	113.5
9	59.0	48.7	30.3	115.0
10	60.5	44.5	24.0	92.8

遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)
11	62.8	55.3	17.7	97.5
12	71.8	52.0	13.5	87.5
13	71.6	52.7	21.0	114.0
14	62.4	53.4	18.0	82.8

表II-14 集石13 計測値

遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)
1	84.3	48.0	17.0	80.0
2	36.0	30.0	16.5	18.2
3	80.0	53.4	12.8	94.1
4	82.0	50.0	16.0	117.5
5	66.0	47.4	16.0	60.0
6	67.0	50.5	23.0	114.6

遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)
7	70.8	45.7	10.9	63.5
8	40.5	54.0	21.0	112.9
9	70.0	52.2	12.0	79.3
10	60.5	48.4	13.0	54.7
11	72.1	54.0	18.0	106.2
12	61.6	51.3	21.6	102.7

遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)
13	63.0	50.0	20.4	97.1
14				50.4
15	63.5	61.5	16.7	87.4
16	73.0	62.3	16.7	81.1

集石11 (図II-15、図版II-6-2)

位置 c-68-25、35

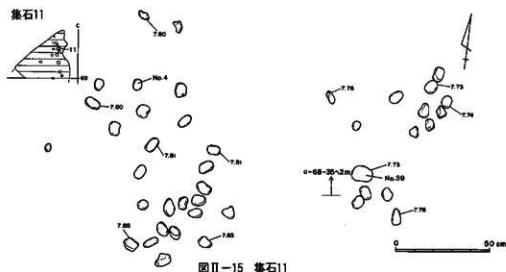
特徴 調査区北東側の標高7.80mの平坦面の末端部から斜面にかけて広がっている。2m四方の範囲から、46個の礫が検出された。図示しなかったが東側の斜面下側にも2個あった。集石11の礫は長さ7cm、幅5cm前後、重さ70~100gの楕円形の扁平なものも多く、礫片やNo.4の様な珪岩の球形礫、No.39の様な側縁に敲打痕のある縄文時代のたたき石かと思える泥岩の500gをこえる大きな礫もあった。同一のレベルから縄群土器(図II-19-8)が出土している。

集石14 (図II-16)

位置 c-68-34

特徴 集石12に隣接する。標高7.60mの平坦面にある。1.5m四方の範囲に15個の礫が散らばっていた。礫は長さ5cm、幅4cm程の歪なゴツゴツした礫が主で、No.1の様な細長い棒状礫もあった。

(遠藤香澄)

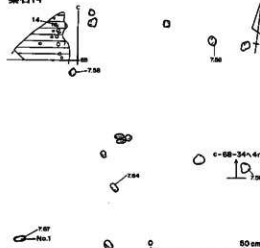


図II-15 集石11

表II-15 集石11 計測値

遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)
1				48.2
2				64.1
3	72.3	36.5	30.4	143.8
4	47.7	38.1	43.8	240.2
5	62.0	53.0	19.1	101.8
6	82.5	50.0	18.0	111.6
7	73.0	57.0	20.4	128.7
8	67.0	50.5	23.0	110.3
9	82.0	55.1	21.6	137.7
10	70.4	47.0	17.5	85.2
11	64.5	44.7	24.0	99.5
12	86.3	55.6	19.3	160.2
13	76.4	49.1	24.1	117.2
14	50.0	26.2	9.1	20.1
15	70.6	51.9	11.5	71.4
16	77.4	59.2	16.1	114.0
17	76.7	57.2	18.4	132.6
18	70.6	46.0	18.0	88.5
19	60.7	47.0	20.1	84.5
20	75.0	58.5	15.0	97.2
21	78.2	52.0	19.0	119.2
22	73.4	51.7	19.8	119.3
23	67.5	37.5	22.4	120.1
24	70.0	51.3	13.0	80.6
25	67.6	44.0	30.0	119.6
26	81.1	43.2	16.0	88.4
27	65.3	44.0	21.3	102.0
28	65.4	43.3	10.5	43.7
29	63.0	32.0	25.1	74.7
30				15.0
31	72.1	49.5	14.0	63.5
32	69.0	47.5	24.0	118.4
33	68.3	51.2	13.4	78.9
34	65.0	52.0	18.0	95.6
35				69.5
36	76.0	48.5	22.5	134.2
37	66.3	46.6	28.3	119.7
38	55.1	43.4	15.3	58.3
39	139.0	87.0	35.6	570
40	79.6	52.7	17.3	116.0
41	68.0	50.5	13.4	83.6
42	74.3	51.0	16.1	94.7
43	79.6	45.3	17.9	101.7
44	50.0	47.1	15.5	61.5
45	60.2	43.1	14.4	57.2
46	106.5	50.0	25.0	229.6

集石14



図II-16 集石14

表II-16 集石14 計測値

遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量(g)
1	73.6	32.4	20.5	89.5
2	65.0	49.3	34.5	128.4
3	46.0	39.6	21.0	51.0
4	45.6	34.2	30.4	48.6
5	52.0	29.5	23.8	59.6
6	37.8	43.0	19.0	65.2
7	48.5	39.0	27.2	57.8
8	59.0	56.1	29.3	131.4
9	60.0	50.7	23.6	108.6
10	46.6	38.1	27.0	62.3
11				70.6
12	44.0	39.9	26.5	64.0
13	37.0	33.0	28.1	48.1
14	48.1	40.6	28.0	67.8
15	49.0	41.2	26.8	82.5

3 包含層出土の遺物

(1) 縄文時代の遺物

1) M群土器(図Ⅱ-17・18、図版Ⅱ-3、4-1~4)

1、3・4はc-68-35区から3個体がほぼ同じレベルから押しつぶされた様な状態で出土したものである(図Ⅱ-17)。5は隣接するc-68-25区から出土した。

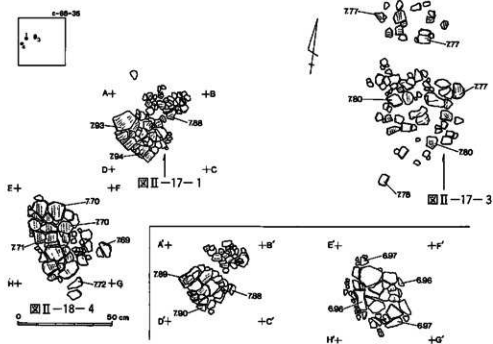
1は大形の深鉢形土器。底部は直立しわずかに外側に張り出す。あげ底に作られたものであるが中央が突出して一見丸底風になっている。器壁は口縁部に向って直線的に開き口縁部がやや薄くなり直立する。器面は凹凸がありRL原体を左上から右下に浅く回転施文した縦行縄文が施され、ところどころ縄文施文後磨かれている。底面にも縄文が施されている。口唇には同様の縄の原体による刻み目が深く施されていて、口唇が外側に広がる部分が多い。間隔は不揃いである。口縁部から胴上半部には炭化物が付着し黒褐色、胴下半部は赤褐色を呈し、底部付近は黒褐色である。内面にはヘラなどで調整の痕跡があり、胴上半から下部にかけてところどころ炭化物が付着する。

3は大形深鉢形土器。底部はあげ底で口縁部に向って直線的に開き頸部がややくびれる器形のもの。口縁部は欠損している。器面調整は雑で内・外面ともに凹凸がある。頸部と底部にRL原体を右上から左下に浅く回転施文した横走する縄文が施されている。胴部には同じ原体を左上から右下に回転施文し縦行する縄文が施されている。胴上部には炭化物が付着し黒・茶褐色、胴下半部は二次火熱を受けていて赤褐色を呈する。

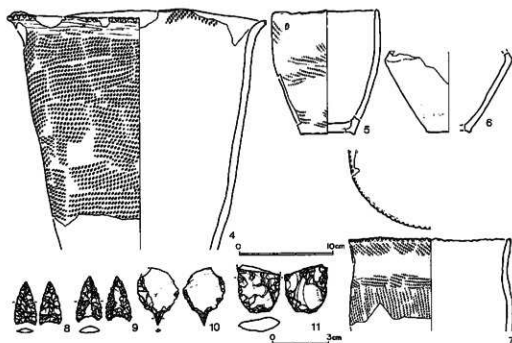
4は大形の深鉢形土器。底部は欠損している。胴部は直線的に開き口縁部でやや強く外反する。器面にはLR原体を左上から右下に浅く回転施文した横走する縄文が施されている。縄文施文後口唇直下と器面のところどころが磨かれている。口唇上には棒状工具によるとみられる刻み目が不規則につけられている。口縁部から胴上部には炭化物が付着し茶褐色、下半部は赤褐色を呈する。内面は横位にヘラ削りの痕跡が残る部分的に炭化物が付着している。

5は小形の深鉢形土器。1、3、4からやや離れた位置でまとまって出土した。底部はあげ底。胴部が膨らみ口縁部がまっすぐに立ち上がる。口縁は不規則にゆるやかな波状を呈する。器面にはRL原体の縄文が体上半部は斜行、体下半部は横走するように浅く施文されている。縄文施文後は磨かれている部分が多い。口縁部から胴部半ばまで炭化物が付着し黒褐色を呈するとところ、口縁部から底部まで黄褐色を呈するところがある。内面にも一部炭化物が付着する。

2は口縁部の破片。歪みがあるが口径17cm~20cmである。器面にはLR原体による横走する帯状縄文が浅く施されている。口唇には口縁に沿って指頭による刻みが施されている。爪跡が残っている。器面は大部分が二次焼成を受けている。6は小形の鉢形土器で口縁部は欠損している。あげ底で胴部は直線的に開き頸部がくびれる器形のもの。器面にはナデ整形の痕跡があり黄褐色を呈する。7はc-68-58区で木の根によるとみられる攪乱の落ち込みの中とその



図Ⅱ-17 統縄文時代の土器出土状況と土器



図Ⅱ-18 縄縄文時代の遺物

周囲から検出された。頸部がわずかにくびれる中形深鉢土器。胴部上半のみのもので、口唇の断面は切り出し形である。体部には、RL 原体により縦行する帯状の縄文が施され、その上位には横走する帯状の縄文が施されている。口縁部には2cm程の幅で同じ原体で斜行縄文が施されている。器面は縄文施文後に丁寧に磨かれている。口唇は表面側に傾斜して棒状工具による刻み目が施されている。焼成は非常に良く、器面には部分的に炭化物が付着し黒褐色を呈するが、その他のところは赤褐色である。内面には多量に炭化物が付着する。

2) 石器 (図Ⅱ-18、図版Ⅱ-4-5)

8・9は無茎凹基鉄。10は機能部のみ作り出したもの。11はスクレイパーの破片。いずれも黒曜石製。

(遠藤香澄)

表Ⅱ-17 縄縄土器一覧

図番号	発掘区	図番号	発掘区
1	c-68-35	5	c-68-25
2	c-68-35	6	c-68-45
3	c-68-25, 35	7	c-68-29
4	c-68-35		

表Ⅱ-18 縄縄石器一覧

図番号	名称	発掘区	大きさ(mm)	重さ(g)	材質
8	石 鏃	c-68-35	22.8×11.6×2.7	0.5	Obs.
9	石 鏃	c-68-58	24.0×13.4×3.3	0.8	Obs.
10	ドリル	c-68-35	29.8×21.7×1.8	0.9	Obs.
11	スクレイパー	c-68-35	24.5×23.3×7.4	4.0	Obs.

(2) 縄文時代とそれ以降の遺物

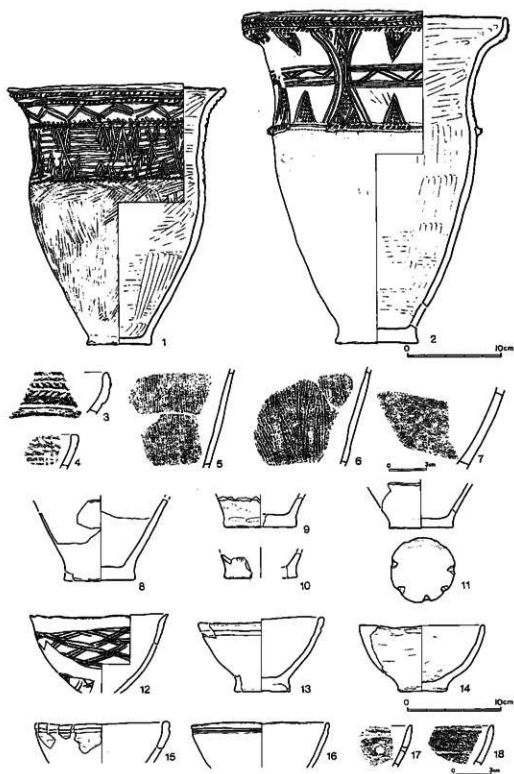
1) Ⅴ群土器(図Ⅱ-19 図版Ⅱ-5-1-5)

1~11は深鉢形土器。1は調査区西側のc-68-78区からまとまって出土した大形の深鉢形土器。胴部が膨らみ口縁部が外反する。底部は僅かに張り出している。文様帯は口縁部と胴部にあり、胴部の最大径の位置に文様帯を区画する沈線を施している。また口縁部にも沈線を施し、沈線の間から口唇にかけて調整後に、1条沈線を引きなおしている。口縁部文様帯と胴部文様帯との間には2本の沈線で右から左へ順次鋸歯状文を描いている。胴部には上下の沈線で区画された部分に、横走る10数条の沈線を密に施した後、上下の沈線間を繋ぐように交差する沈線を施している。これらの沈線の間にはV字形、逆V字形を沈線で描いている。交差する沈線からもそれぞれ短い刻み目が斜め方向に施されている。その後上縁には羽状の刻み目、下縁には1条の刻み目をめぐらせている。沈線は器面調整の際に用いたへら状工具の先端を使用したものと思われる。胴部上半部はあらかじめ器面を縦に調整しており口縁部をなで、胴上半部をその後横側に調整している。底部付近は横側になで調整されている。内面上半部は横方向に刷毛目調整され、その後へらで口縁部付近は横方向に、底部付近は縦方向に磨いている。口縁部から胴上半部は茶褐色、下半部は黄褐色を呈する。

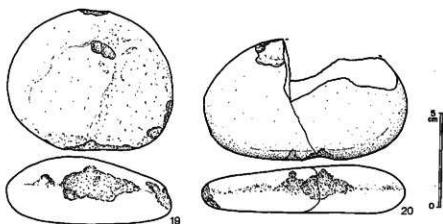
2は大型の深鉢形土器。調査区北部のc-68-44・45区からまとまって出土したものである。底部が張り出し胴部がやや膨らむ。口縁部は一旦強く外反して立上り、口縁部が直立する。胴部の最大径の位置に沈線を施し文様帯を区画している。沈線には断面が三角形の隆起帯を貼り付けている。隆起帯上には器面調整に用いたと思われる木目のあるへら状工具で斜めに刻み目がつけられている。同時に口縁部に施された沈線の間とその下端に、それぞれ逆向きの刻み目を施している。隆起帯で区画された胴上部の文様帯には、口縁部と胴部をつなぐように細い沈線で縦長のㄧ字状の文様が7ヵ所に施され、縦の区画を形成している。ㄧ字の区画の上下に開いた部分にはさらにV字形と山形の沈線を加えている。左右のㄧ字状の沈線の中央を繋ぐように、3本組の細い沈線が2段施されている。その間には2本組の沈線で鋸歯状の文様を描かれている。さらに2、3本の沈線で上下逆向きのV字形の文様を描かれている。沈線で囲まれた三角形の小区画には刺突文が充填されている。器面はあらかじめ縦方向に調整したのち、胴部の膨らむ部分を横方向に調整している。内面の底部付近には横方向に刷け目調整した痕跡がある。内面の胴部から口唇の外面上にかけては非常に丁寧に磨かれている。

3は頸部にくびれのある大形深鉢の破片。口縁と胴部に横走る沈線が施され、口縁部の沈線間には刻み目がつけられている。4は口縁にあまりくびれない中形の深鉢の破片。口唇上にはかすかに沈線の痕跡がある。体部には横走沈線に重ねて縦の沈線が施されている。5~7は刷け目調整痕が残る胴部の破片。8~11は底部。11は7ヵ所に切り込みがあるとみられる。

12~18は胴部が膨らむ坏形土器。12は口縁部に細い沈線を1条施し、胴部には2本もしくは3本一組の沈線で鋸歯状の沈線を重ねて斜格子目様の文様を描いている。器面は丁寧に磨かれている。13は口縁部に幅の広い浅い沈線が1条めぐっている。内外面ともよく磨かれ、内黒に



図Ⅱ-19 縄文時代の土器



図Ⅱ-20 縄文時代の石器

なっている。14は部分的に成形痕が残る。体部が膨らむもので口縁はやや薄味になるように磨かれている。器面には凹凸があり、内面には指頭によるナデの跡が残る。15は裏面は良く磨かれ黒光りする。口縁部には浅い沈線が施されている。内黒である。16は口縁部にヘラ状工具によるとみられる沈線が1条ひかれている。内外面から口唇にかけて磨かれている。内黒である。17にも同様の沈線が施されている。16と同一かもしれない。18はヘラ削りの後磨かれ内黒になっている。口縁部と胴部に細い沈線が施されている。薄くて体部の膨らむ器形のもの。

1) 石器等 (図Ⅱ-20、図Ⅱ-5、図版Ⅱ-4-6、-5-6)

19・20は扁平礫の側縁の一部に使用痕がある。19はアブライト、20は泥岩製。図Ⅱ-5はc-68-25区から、集石13とはほぼ同一レベルから出土した鉄製の釘である。断面形は正方形に近い形で頭部が折れ曲がっている。大きさは長さ19.8cm、最大幅1.6cm、最大厚1.8cm、重さ136gである。

(速藤香澄)

表Ⅱ-19 掲載土器一覧

図番号	発掘区	図番号	発掘区	図番号	発掘区
1	c-68-78	7	c-68-33	13	c-68-45
2	c-68-44・45	8	c-68-35	14	c-68-28
3	c-68-28	9	c-68-36	15	c-68-38
4	c-68-28	10	c-68-33	16	c-68-38
5	c-68-33	11	c-68-28	17	c-68-38
6	c-68-33	12	c-68-28	18	c-68-33

表Ⅱ-20 掲載石器一覧

番号	名称	発掘区	長さ (mm)	重さ (g)	材質
19	たたき石	c-68-48	89×77×33	975	Apl.
20	たたき石	c-68-48	104×67×22	(765)	Mad.

4 まとめ

1. 遺跡の性格について

Ⅰ黒層の調査によって、統縄文時代の遺物と埴文時代の土器及び礫群、焼土、炭化材など埴文時代からそれ以降の遺構遺物も出土した。

統縄文時代の遺物には土器と石器、礫などがあり、Ⅰ黒層下面から出土している。土器については出土状態から二つのグループに分かれ、それぞれ特徴を異にしている。台地の北側から出土したものをA群、南側から出土したものをB群とする。

A群の土器は6個体認められ、大形のものが4個と小形のものが2個ある。底部の知られるものは4個体がいずれも掘底となっている。口縁の知られるものは直立気味のものと外反するものがある。胴部はややふくらみ、頸部のややくびれるものが認められる。土器の文様は縄文のみで、1は全面縦行縄文でやや圧痕は深く、日高地方の大持部式に通ずる特色を示している。2・3には帯状縄文風の横定縄文が施されている。肩が張り頸部のくびれた器形は二枚橋式の粗製土器と通ずる器形と施文の特色を示すものようである。1～6はほぼ大持部式の時期に比定されるものと考えられる。掘底の一般化と、帯状縄文の出現期のものである。

B群の土器は1個体の上半部のみがあり、所謂恵山式の特色を示すものであるが、口縁部内面に稜をもたず、恵山式中葉の瀬棚地方の南川Ⅲ期、胆振地方のアヨロ2b期に位置づけられるものと考えられる。B群に近いものは美々8遺跡Ⅰ黒層で出土している。それらは口縁内面に稜があり、本遺跡例より若干古いアヨロ2a期の所産かとみられる。道央地域の恵山式はアヨロ2a・b期に対応するものとされているが、その当時の土器の組合せには縄縄文土器などを多く伴い、道南地方の西結梗B₂遺跡などの恵山文化の遺跡の状態とは異なっている。墓にコハクの玉などを副葬する特色もあることから、軽川文化として抱括的に把握すべきものと考えている。本遺跡のB群土器は軽川文化の終末頃に位置づけられるものと考えられる。

石器は、その出土位置から、やや細身の無茎石鏃とドリル、スクレイパーはA群土器とやや幅の広い無茎石鏃はB群土器と伴ったものとみなしたい。A群土器の時期には土器の量がやや多く、2次的に焼けたものもあることから、季節的にこの地を利用したとしても、やや長期の滞在期間があったものと考えられる。

埴文時代以降の遺物はⅡ黒層上面か、上面に近い位置に散点的に存在していた。それらの出土状態は対岸の美々8遺跡での出土状態と全く共通の状態であって、美々8遺跡と一体して理解されるべき遺跡の性格を示すものとみることができる。坏形土器については口唇直下と体部に横線を施すもの(18)から、口唇直下に沈線をめぐらすもの(13、15-17)、口唇近くをやや薄くして磨きを加えるもの(14)、口縁の外反するもので体部に細い沈線を施すもの(12)がみられる。深鉢形土器では口縁の外反するもの(1)、少し立ち上りの認められるもの(4)、口縁にくびれの認められるもの(3)、くびれの強くなるもの(2)が存在している。文様には横定する沈線に斜線、縦線を重ねるものが認められ、横定沈線を下地にしない大柄な文様を

構成するものがみられる。これらは縄文時代中期から後期にかけてのものとみなされるが、かなり長期に亘るこの遺跡の利用期間を推定させる。資料には、この時期の資料を多く出土した美々8遺跡の例にないものが多く、その空白の時期を補完するものとみなされ、美々8遺跡と美沢3遺跡の密接な関係を示すものとみられ、両遺跡を一体のものとして理解すべきかもしれない。

遺構として認められる焼土、礫群、中世のものかとみなされる炭化材遺構や釘など、縄文時代以来、継続した時期の遺物が認められている。美々8遺跡は近世の記録では松浦武四郎によって「ミミ(ビビ)憩所 船乗場」として図示記録された所であり、縄文時代の大遺跡や、多くのチャシの残る千歳地域は、道央地方の文化の中心地の一つであったと考えられるが、そこからの出口であり、そこへの第一歩を印す入口の場所であったと考えられる。船の停泊地として、この美々8と美沢3の両遺跡は理解されるのではなかろうか。これらの遺跡の調査によって、ビビ船乗場、あるいは船着場の始まりは7世紀代からのことであったと考えられる。阿部比羅夫が、シリコ(シコツと解する見解もある)に至り、「シリヘシをもって政所とすべし」という地元の人々の言を容れ郡領を置いた頃のことである。

7世紀から8世紀頃の本州とかかわりのある遺物は道央部にかなり多く、このビビの遺跡にも数多く認められている。美々8遺跡の縄文時代の遺物の出土状態が特異なものとして関心をもたれてきたのであるが、美沢3遺跡での出土状態と共通し、このような船着場としての性格をもつものとして両遺跡の出土状態を理解することができそうである。(大沼忠孝)

2. 集石について

I黒層において、14ヵ所で礫が集中する地点があった。集石は調査区東側、美沢川の下流側の平坦面に集中している。集石3、4、6は調査区南端のやや離れた位置に、集石2は美沢川に続く斜面に、広がっていた。Ta-b火山灰層を除去した段階で検出されたものと、I黒層を掘り進んで調査中に検出されたものがあり、各集石には時間的な差があることが充分考えられる。集石7と集石8の間には黒色土の間層があってその上下から出土していることから判断できる。

礫の形状は、丸いもの、細長いもの、楕円形のもの、歪なものなど様々である。大まかにみて、長さが3-4cmで重さが40gをこえない小形のものと、長さが5cmをこえ重さ50-90gの比較的大きなものがある。小形のものには、丸いもの歪なものが多い。細長い(棒状のもの)(集石3に多い)もある。後者は比較的厚味のない扁平な楕円形のものが多い。

各集石によって多少のばらつきもあるが、大体はほぼ同一規格の礫がまとまっている集石が多い。また集石5の様に割れた礫の破片が半数以上を占めている集石もある。形は不揃いであるが、手に持った感じ、重さにはあまりばらつきはない。これらの礫片の中には、縄文時代の石鏝、たたき石等の石器を利用したかと思えるものも混じっていた。その他、重さが10gにも満たない親指大の程の極小さな礫の混じっていた集石もあった。礫の石質は砂岩、片麻岩、珪岩、泥岩、アブライト、チャートなどである。(遠藤香澄)



PERCENTAGE OF AREA COVERED BY WATER

PERCENTAGE OF AREA COVERED BY LAND

PERCENTAGE OF AREA COVERED BY WATER

PERCENTAGE OF AREA COVERED BY LAND

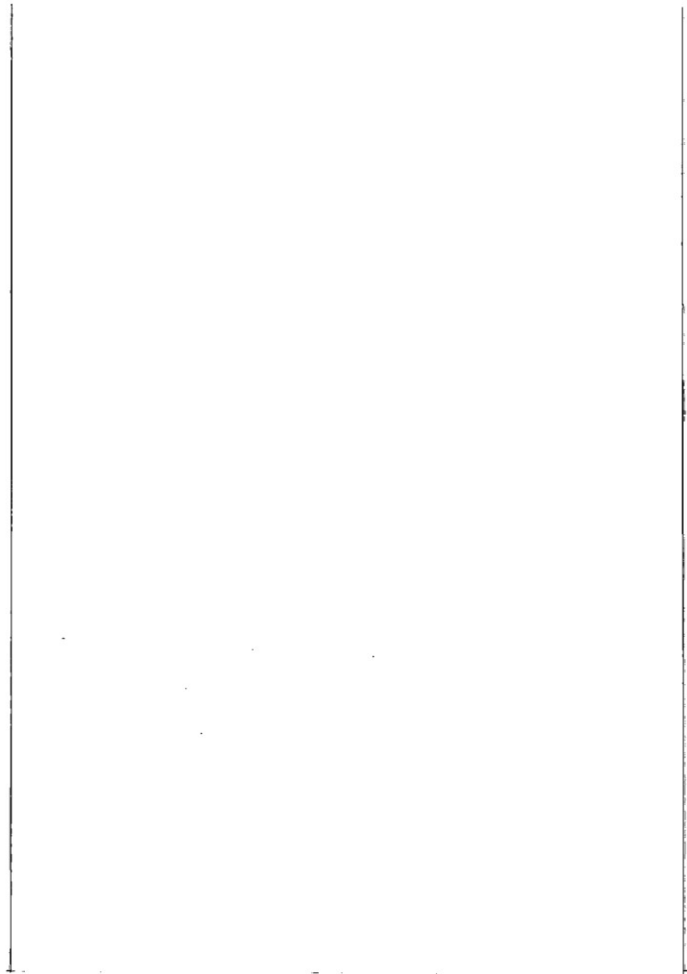
PERCENTAGE OF AREA COVERED BY WATER

PERCENTAGE OF AREA COVERED BY LAND

写真図版

図版目次

図版Ⅱ-1	35	5 VI群土器(3)(図Ⅱ-17-3)	37
1 遺跡風景(西から、中央の火山灰の堆積した部分がI黒層調査地区)	35	図版Ⅱ-4	38
2 調査風景(北東から)	35	1 VI群土器(4)(図Ⅱ-18-5)	38
3 完掘風景(北東から)	35	2 VI群土器(5)(図Ⅱ-18-6)	38
図版Ⅱ-2	36	3 VI群土器(6)(図Ⅱ-18-7)	38
1 集石1の出土状況(西から)	36	4 VI群土器(6)の出土状況(南西から)	38
2 集石13と鉄製品の出土状況(南から)	36	5 I黒層下面の刺片石器	38
3 炭化材出土状況(北西から)	36	6 I黒層上面の礫石器	38
4 焼土(北西から)	36	図版Ⅱ-5	39
5 焼土の断面(南東から、右F-1、左F-2)	36	1 VI群土器(1)の出土状況(西から)	39
図版Ⅱ-3	37	2 VI群土器(1)(図Ⅱ-19-1)	39
1 VI群土器(1)・(2)の出土状況(西から)	37	3 VI群土器(2)(図Ⅱ-19-2)	39
2 VI群土器(3)の出土状況(南東から)	37	4 VI群土器(3)(図Ⅱ-19-12~14)	39
3 VI群土器(1)(図Ⅱ-18-4)	37	5 VI群土器片	39
4 VI群土器(2)(図Ⅱ-17-1)	37	6 鉄製品(図Ⅱ-5)	39
		図版Ⅱ-6	40
		1 集石4の遺物	40
		2 集石11の遺物	40





1 遺跡風景（西から、中央の火山灰の堆積した部分がⅠ黒層調査地区）



2 調査風景（北東から）



3 完掘風景（北東から）



1 集石1の出土状況(西から)



2 集石13と鉄製品の出土状況(南から)



3 炭化材出土状況(北西から)



4 焼土(北西から)



5 焼土の断面(南東から、右F-1、左F-2)



1 VI群土器(1)・(2)の出土状況(西から)



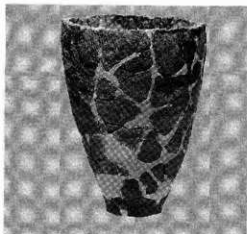
2 VI群土器(3)の出土状況(南東から)



3 VI群土器(1) (図Ⅱ-18-4)



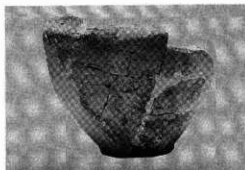
4 VI群土器(2) (図Ⅱ-17-1)



5 VI群土器(3) (図Ⅱ-17-3)



1 VI群土器(4) (図Ⅱ-18-5)



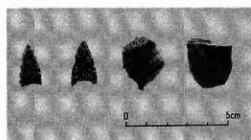
2 VI群土器(5) (図Ⅱ-18-6)



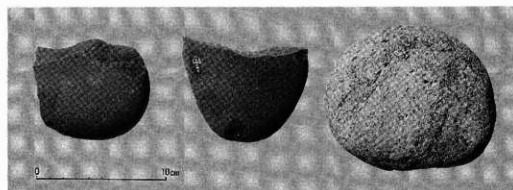
3 VI群土器(6) (図Ⅱ-18-7)



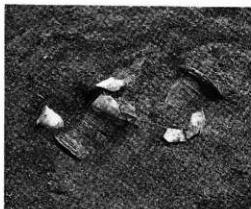
4 VI群土器(6)の出土状況 (南西から)



5 I黒層下面の剥片石器



6 I黒層下面の礫石器



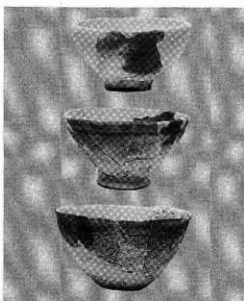
1 VI群土器(1)の出土状況(西から)



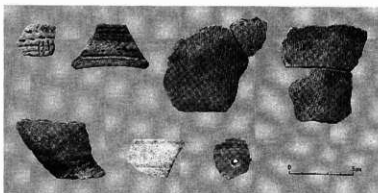
3 VI群土器(2) (図Ⅱ-19-2)



2 VI群土器(1) (図Ⅱ-19-1)



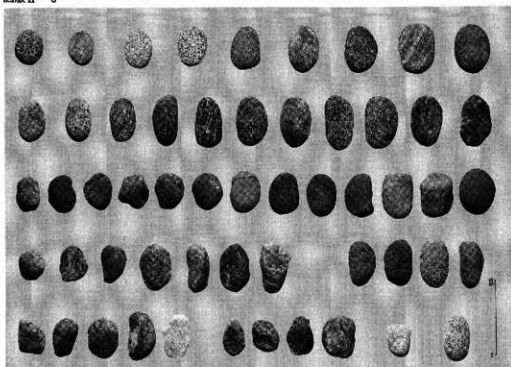
4 VI群土器(3) (図Ⅱ-19-12~14)



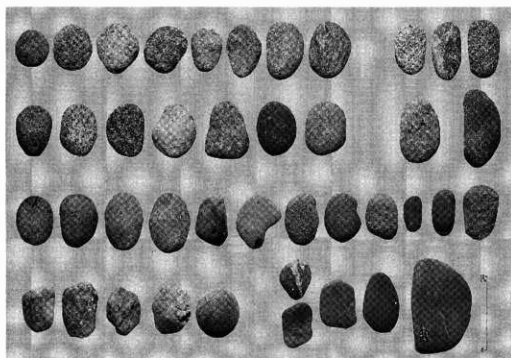
5 VI群土器片 (図Ⅱ-19)



6 鉄製品 (図Ⅱ-5)



1 集石4の遺物



2 集石11の遺物

Ⅲ 第Ⅱ黒色土層の調査

1 調査の概要

Ⅱ黒層の調査地区はf-70区からb-70区に及ぶ遺物の希薄な広い斜面をはさみ、c-69区を中心とする低い平坦部分と、e-71・72区を中心とする南東側の台地上部、c-70区から71区にかけての南西側の台地上部の平坦面からなっている。

当初台地上部にも、美沢1遺跡（周堤墓）や美沢2遺跡（大形住居跡）のように遺構の存在することを予想していたが、調査の結果そのような大形の遺構は存在せず、低位段丘面に特に遺構・遺物が集中する、縄文時代早期を主体とし、前期から後期に及ぶ遺跡であることが判明した。

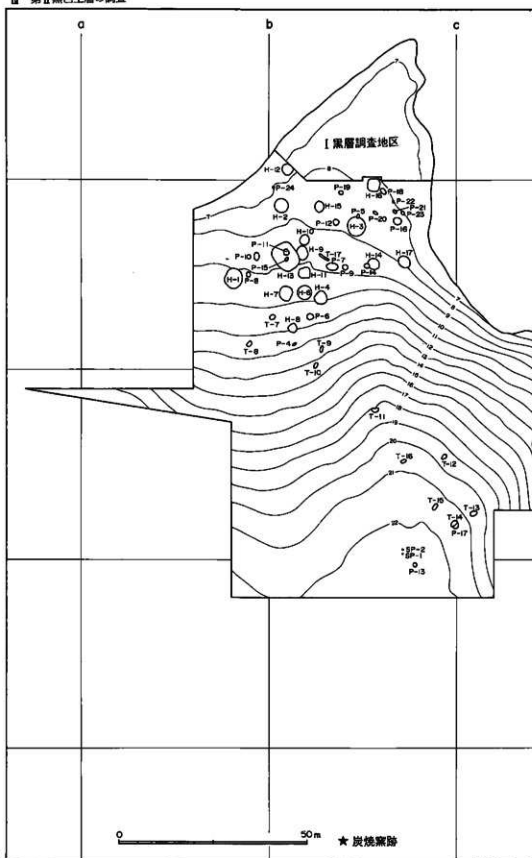
調査に着手したのは南東側台地上のe-72区である。そこからe-71・70区にかけてⅡ黒層は比較的浅く、遺物はⅠ群b-3類の土器を主体としていたが、小形の土壇（P-1）に流れ込んだ1個体の他には散点的な出土状態を示していた。Ⅱ黒層の調査中に盛土が認められ、Tピットの存在が予測されたが、小形の楕円形のもので5カ所、溝状のもので1カ所認められた。引き続きf-70区の斜面の調査を行ったが、ここからは3点の石刃鏃をはじめ、有茎のものまで、各種の石鏃が55点出土した。また、石斧の折損したものが比較的多く出土している。

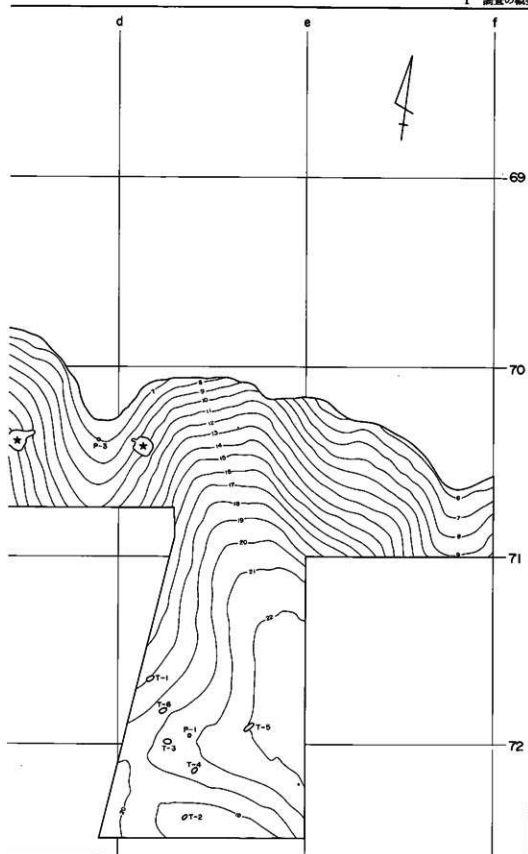
e-70区からc-70区にかけて深い沢状の地形をなしていたが、その斜面に近代の炭焼窯跡が認められたほか、Ⅱ黒層にはピットが1カ所存在し、Ⅲ群a類、Ⅳ群c類の土器、フレイクの集中する所などがあり、礫を3個まとめて置かれた所（早期）、すり石や石錘（前期）などの遺物も出土している。

c-70-71区の南西側の台地上にはⅠ群b-3類の時期の墓壇とみなされるものや、小ピットに砥石やすり石の立てられたような、人為的な遺構かと疑われるような出土状態も観察されている。Tピットがc-69区から続く列をなす状態で検出され、その方向は、未調査地区をはさみ、先に調査したe-71区の列につながるようでもある。

b・c-69区は、本年度の調査の中心となった地区で、各類の土器と、住居跡や各種のピットが群在していた。これらの遺構は、掘り込み面の差によって大きく2つに区分される。早・前期に属するものはⅡ黒層下面から、中・後期に属するものはⅡ黒層上部から掘り込まれていることが判明した。中・後期の遺構ではⅡ黒層上面に盛みを残し、その周囲には盛土の広がり認められた。早・前期の遺構と中・後期の遺構と2者に大きく区分して報告することとする。なお、この地区の調査は、H-1の中期の住居跡の調査をまず行い、H-2・H-3の後期の住居跡の調査を進め、H-4をはじめとする早期の住居跡の調査を続けた。その間、H-13・H-16の中期と後期の住居跡の調査や、各種のピット、焼土等の調査を合わせて実施した。

（大沼忠春）



図III-1 II黒層全体透視位置図 (等高線は $Ta - d_2$ 上面)

2 縄文時代早期の遺構

早期の遺構にはⅠ群b-3類土器の時期のものと、Ⅰ群b-4類土器の時期のものがある。

c-69区を中心とする遺構の分布をTa-d₁層上面の等高線図に示してある(図Ⅲ-2)。Ⅰ群b-3類土器の時期の遺構には墓墳と考えられるP-13、性格不明のP-17・P-1・P-21・22・23・24、SP-1・2がある。墓墳とSPは南西側台地、他はc-69区に多い。

Ⅰ群b-4類土器の時期の遺構にはH-4・6~12・14・15・17の竈穴居跡状の遺構、P-16の墓墳、その他の性格不明のP-6・7・9・14・15・19・20のピットと焼土がある。これらはc-69区にほぼ集中していた。

これらの遺構の時期はその時期の土器の分布と一致しているが、Ⅰ群b-3類土器とⅠ群b-4類土器の分布とは重なり合う部分が多い。遺構内部を埋める土の中からⅠ群b-4類土器を出土しないもの、Ⅰ群b-3類土器や、それに伴うとみなされる石器類を伴うもの、検出レベルがⅠ群b-4類土器の包含層の下にあるもの、遺構埋没後に形成された上部層からⅠ群b-4類土器の出土しているものなどをⅠ群b-3類土器の時期の遺構としたが、遺構内部からⅠ群b-3類土器を出土していないものについては、より古い時期の遺構である可能性は残る。

Ⅰ群b-4類土器の時期の遺構は、検出レベルが、Ⅰ群b-3類土器の時期の遺構と同様、Ⅱ黒層下面にあり、遺構を埋める土の中からⅠ群b-4類土器を出土しているもので、Ⅱ群a類土器が遺構埋没後に形成された上部層から出土するものである。Ⅰ群b-4類土器のみを出土する遺構では検出レベルが、Ⅱ黒層中部のものは縄文時代中期以降のものと判断した。

なお、Ⅱ群a類土器の時期の遺構は認められていない。このような遺構の時期判定は、墓に副葬された土器があるような積極的な時期判定資料を欠くもので、はなはだ大まかなものであり、細かい検討が必要となるが、それらについては今後の課題である。また性格不明のピットの中には自然要因により形成された可能性をもつものもあるが、それらについての検討も今後の課題としておきたい。

(大沼忠春)

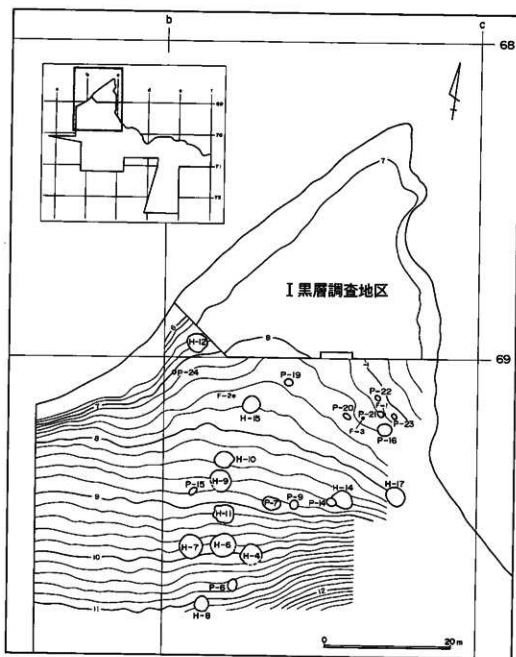
(1) Ⅰ群b-3類土器の時期の遺構

(a) 土墳墓

P-13 (図Ⅲ-3、図版Ⅲ-40)

位 置	c-71-20	規 模	1.04×1.03/0.79×0.74/0.63m
土 層	1 明茶褐色 (EnL + d ₂ >> d ₁)	2 暗赤褐色 (d ₂ + Ⅲ黒)	
	3 明茶褐色 (EnL + d ₂ >> Ⅲ黒 >> d ₁)	4 暗褐色 (Ⅲ黒 > EnL)	
	5 茶褐色 (d ₂ + d ₁ > EnL > Ⅲ黒)	6 暗褐色 (Ⅲ黒 > EnL)	
	7 橙褐色 (d ₂)	8 暗褐色 (Ⅲ黒 > EnL)	
	9 橙褐色 (d ₂)	10 赤褐色 (d ₂ > d ₁)	

- | | |
|------------------------------------|--------------------------------|
| 11 茶褐色 ($d_2 > d_1$) | 12 明茶褐色 ($d_2 + \text{EnL}$) |
| 13 暗茶褐色 ($d_2 > d_1 > \text{黒}$) | 14 明褐色 ($d_2 + \text{EnL}$) |
| 15 明褐色 ($d_2 + \text{EnL}$) | |

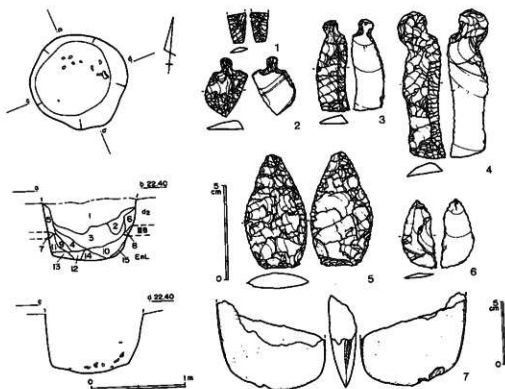


図Ⅲ-2 縄文早期の遺構位置図（等高線は $Ta-d_1$ 上面である）

特 徴 Ⅱ黒層の包含層調査を完了した $Ta-d_1$ を除去した後に、 $Ta-d_2$ 上面に径約 1 m のプランと黒曜石製の剥片計 7 点が検出された。調査した結果、台地上の $Ta-d_1$ 上面から掘込まれた土壌である事が確認された。平面形は径約 1 m の円形で、深さ約 63 cm の底面までは垂直に掘込まれている。坑底は、EnL に構築されている。覆土は、 $Ta-d \cdot \text{Ⅲ黒} \cdot \text{EnL}$ からなる埋め戻し土である。遺物は、図で示したように底部から覆土中にかけて弧を描いて連なるように出土した。縄文早期の墓墳と考えられる。

遺 物 遺物は、覆土 1 層の上面から長さ 1 cm 前後の黒曜石製の剥片が 7 点出土した。土壌内からは、黒曜石製の石鏃片とスクレイパー、頁岩製つまみ付ナイフ、蛇紋岩製石斧片などが出土した。

1 は、坑底から出土した。薄身で長身の石鏃片で、斜めに走る細長い剥離が全面に施されている。2 は、小型のつまみ付ナイフでより大型のつまみ付ナイフの破損品を再加工したものと考えられる。珪質分の多い頁岩製である。3・4 は、右側刃部が緩やかに内湾し先端部がやや平坦ぎみの形を呈する頁岩製つまみ付ナイフである。3 の左側縁には、使用による光沢が認められる。5 は、両面加工の頁岩製スクレイパーである。周辺には、粗い剥離が施されており使用痕は認められない。6 は黒曜石製の剥片の周縁全部に加工を施したスクレイパーである。7



図Ⅲ-3 P-13と出土遺物

は、蛇紋岩製磨製石斧の刃部である。幅の広い偏平形を呈しており、刃部先端にはかなりの磨耗が認められる。擦り切り痕は認められない。

時期 美沢3遺跡の台地からは、台地の縁辺部でⅠ群b-3類の土器片の集中が、台地上でⅠ群b-4類の土器片の集中が検出されている。石鏃やつまみ付ナイフの形態は、Ⅰ群b-4類に伴なうものよりは古い段階のものと考えられる。これらのことから、P-13は縄文時代早期のⅠ群b-3類以前の可能性が強い。(皆川洋一)

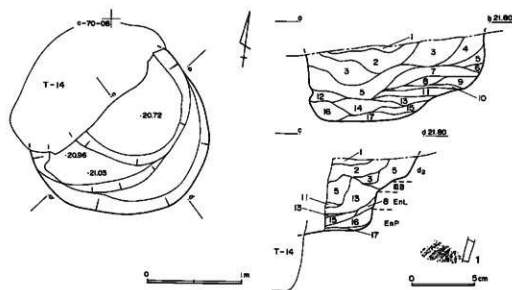
(b) その他のピット

P-17 (図Ⅲ-4、図版Ⅲ-40)

位置 c-70-08・d-70-98

規模 1.89×1.25/1.60×1.13/0.77m

- | | |
|---------------------------|--------------------------------|
| 土層 1 黒色 (Ⅱ黒) | 2 黒褐色 (Ⅱ黒 > d_2 > EnL > EnP) |
| 3 暗茶褐色 (Ⅱ黒 + d_2 > EnL) | 4 暗赤褐色 (d_2) |
| 5 暗赤褐色 (d_2) | 6 黒色 (Ⅲ黒) |
| 7 黄褐色 (EnP > EnL) | 8 茶褐色 (d_1 > d_2) |
| 9 暗褐色 (Ⅲ黒 + EnL) | 10 暗赤褐色 (d_2 > Ⅲ黒) |
| 11 明黒褐色 (Ⅲ黒 + EnL) | 12 茶褐色 (Ⅲ黒 + EnL > d_2) |
| 13 暗赤褐色 (d_2 > Ⅲ黒) | 14 暗茶褐色 (Ⅲ黒 + d_2) |
| 15 明褐色 (Ⅲ黒 + EnL + EnP) | 16 褐色 (d_2 > EnP) |
| 17 赤褐色 (d_2 > EnP) | |



図Ⅲ-4 P-17と出土遺物

Ⅲ 第Ⅱ黒色土層の調査

特 徴 T-14を完掘した段階で南西側の壁に立ち上がりが認められ調査を行った。台地上端部に位置するTa-d₁上面から掘込まれた径1.9m前後の円形の土壌である。壁の北側は、T-14に切られている。南側は、崩落している。本来は、墳底部から推定して径1.4m前後の円形を呈していたものと思われる。覆土は、崩落と流れ込みによる埋没土である。

遺 物 覆土上部からⅠ群b-4類の土器片が出土している。

時 期 縄文時代早期の土壌である。

(皆川洋一)

P-1 (図Ⅲ-5、図版Ⅲ-42)

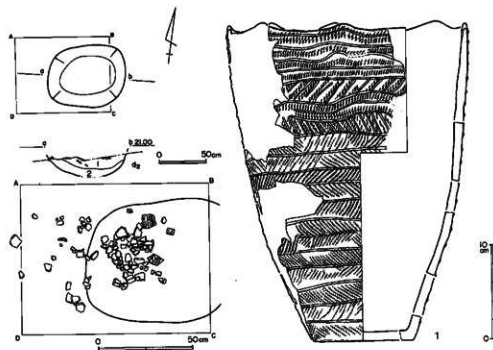
位 置 e-71-69

規 模 0.83×0.64/0.64×0.40/0.20m

土 層 1 暗褐色土 (d₁ > Ⅱ黒ブロック) 2 暗橙色土 (d₂ > d₁)

特 徴 プランは長円形を呈す。d₁層中に遺物の散布を確認したものの、プランの確認はd₂上面である。底面から壁にかけてゆるやかに立ち上がり、断面形は半円形を呈する。底面に凹凸は少ないが、壁面は凹凸があり、明確な面を確かめずらい。覆土は2層に分かれており、遺物を検出した層は、覆土上層のd₁層中及び、覆土第1層にまたがっている。遺物の散布状況は、土壌を中心として斜面下方に散乱している。これらの遺物はすべて土器片で、しかもほとんどが接合し、1個体となったものである。

遺 物 深鉢形土器で、胴部下半からゆるやかにすばまる器形を呈す。全体に薄手で焼成は良好である。胎土は緻密であるが、細粒砂を含有する。口縁は山形を呈し底部は平底と思われる。



図Ⅲ-5 P-1と出土遺物

器外面の文様は、貼付による細い隆起線を施す。胴部上位には平行する隆起線間に3本の隆起線を波状に貼付する。両隆起線間は矢羽根状に施した隆起線で埋める。これらの胴部上位文様帯の貼付隆起線間には、短縄文が付される。これに対し、胴部下位文様帯は、平行する貼付隆起線間に、LRやRLの原体を、隆帯を介して羽状に施文するのが特色である。いずれも隆起線上には施文されない。

時期 土壌の構築時期と遺物の時期とは、遺物の出土状況から若干の時間差があるものの、ほぼ同時期と思われる。したがって土器の文様から、中茶路式の時期に相当するものと思われる。

(前田正憲)

P-21 (図Ⅲ-6)

位置 c-69-31

規模 0.91×0.90/0.57×0.51/0.26m

土層 1 黒褐色 ($d_1 > d_1$)

2 暗褐色 ($d_2 > d_1$)

3 暗褐色 ($d_2 > d_1$)

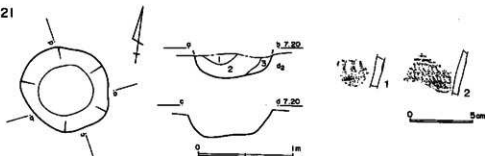
特徴 Ta-d₂上面を精査中に確認した。平面形は不整形円形で、断面形は皿状である。床面は軟らかい。覆土は非常に硬い。

遺物 覆土からⅠ群b-2類・(1)b-3類(2)土器と黒曜石のフレイク、チップが出土した。1には短縄文と軸が角形と思われる絡条体圧痕文が施されている。2は微隆起線間に短縄文が施されている。

時期 縄文時代早期の中茶路式～東釧路Ⅳ式期と思われる。

(遠藤香澄)

P-21



図Ⅲ-6 P-21と出土遺物

P-22 (図Ⅲ-7)

位置 c-69-31

規模 0.76×0.63/0.40×0.32/0.24m

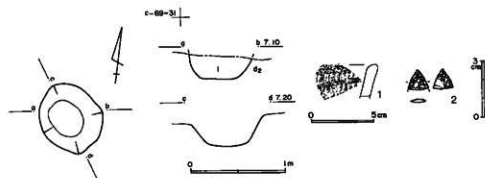
土層 1 暗褐色 ($d_1 > d_2$, 硬い)

特徴 Ta-d₂上面を精査中に円形の落ち込みを確認した。平面形は不整形楕円形。床面は軟らかくほぼ平坦で、壁は全周でやや急角度に立ち上がる。

遺物 覆土からⅠ群b-1類(1)土器と石鏡片(2)、黒曜石のフレイク、チップが出土した。1は角形軸に縄を巻いた絡条体圧痕文が施されている。

時期 縄文時代早期の中茶路式～東釧路Ⅳ式期と思われる。

(遠藤香澄)



図Ⅲ-7 P-22と出土遺物

P-23 (図Ⅲ-8)

位置 c-69-21

規模 $1.06 \times 0.76 / 0.70 \times 0.52 / 0.24 \text{ m}$

土層 1 暗褐色 ($d_1 \gg d_2$)

2 黒褐色 (Ⅱ黒 $\gg d_2$)

3 暗褐色 ($d_1 + d_2 \gg \text{Ⅱ黒}$)

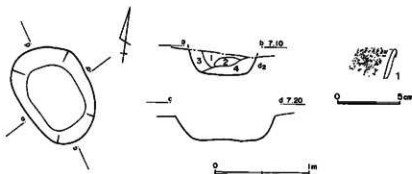
4 暗褐色 ($d_2 \gg d_1$)

特徴 Ta-d₂上面を精査中に確認できた。平面形は楕円形。壁は全周でほぼ急角度に立ち上がる。覆土は全体的に硬い。P-20・21・22・23はいずれもc-69-21・31・41区の狭い範囲から検出され、覆土の堆積状態も似ている。構築時期にあまり時間差はないものとみられる。

遺物 覆土からⅠ群b-3類土器(1)と黒曜石のフレイクが出土した。1は表面が剥落している文様ははっきりしないが、口縁に縄文圧痕が施されているかと思われる。

時期 縄文時代早期の中茶路式～東釧路Ⅳ式期と思われる。

(遠藤香澄)



図Ⅲ-8 P-23と出土遺物

P-24 (図Ⅲ-9)

位置 c-69-90

規模 $0.55 \times 0.51 / 0.45 \times 0.43 / 0.15 \text{ m}$

土層 1 褐色 ($d_1 \gg d_2$)

特徴 遺構集中区の南西端、標高約7mの川縁に近い斜面上に位置する。c-69-90区のTa-d₂上面を精査中に確認した。平面形は径0.5mの円形を呈し、深さは確認面から15cmである。底面はTa-d₂中につくられ、壁の立ち上がりはやや急角度である。遺物は南東壁際

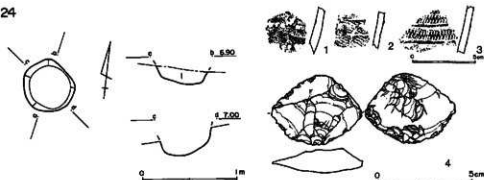
の覆土中から黒曜石製のスクレイパー(4)が出土した。そのほかに覆土中からⅠ群b-3類土器が6点(2, 3ほか)、Ⅰ群b-2類土器が1点(1)出土している。

遺物 1は結条体圧痕および縄端圧痕による文様が施されたⅠ群b-2類土器である。2・3はⅠ群b-3類の胴部破片である。4は黒曜石製のスクレイパーである。

時期 覆土中からⅠ群b-3類土器が出土しているので、この時期の遺構と思われる。

(佐川俊一)

P-24



図Ⅸ-9 P-24と出土遺物

SP-1・2 (図Ⅸ-10、図版Ⅲ-45-1)

位置 c-70-29

規模 SP-1 径0.13/0.07/0.22m

SP-2 径0.16/0.10/0.19m

土層 SP-1 1 暗茶褐色(d_1)

SP-2 1 暗橙色(d_2 が多少汚れた土) 2 暗黄褐色(d_2 、土は硬い)

特徴 調査区南西部の台地上平坦面に位置する。標高は22.30mである。SP-1・2ともTa-d₂の上面を精査中に確認した。SP-1はSP-2の南側1.0mのところに位置する。

SP-1は、平面形が一边約13cmの隅丸形で土層断面では先端の方が斜めにまがっている。遺物は確認面から長方形の砥石2が直立した状態で出土した。そのほかに覆土上部から黒曜石製の使用痕のあるフレイク(1)が1点出土した。

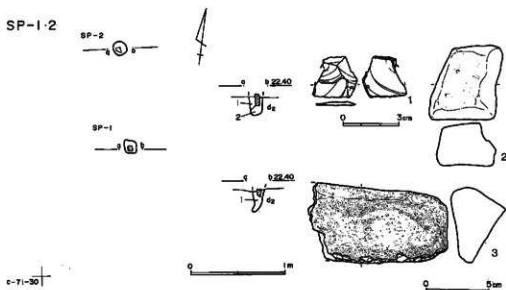
SP-2は、平面形が円形を呈している。覆土は2層からなり、土層断面のすぐ東側は、木根によるものかと思われる攪乱がみられる。遺物は確認面上から断面三角形のすり石片(3)が直立した状態で出土した。すり面は幅が8mm程度で、ところどころ使用によると思われる剥離がみられる。石材は珪岩製である。

時期 Ⅰ群b-3類土器の時期と思われる。

(佐川俊一)

Ⅱ 第Ⅱ黒色土層の調査

SP-1・2



図Ⅲ-10 SP-1・2と出土遺物

(2) I群b-4類土器の時期の遺構

(a) 住居跡

H-4 (図Ⅲ-11-13、図版Ⅲ-5)

位置	c-69-65・66・75・76	規模	3.40×3.27/3.15×3.05/0.40m
土層	1 黒褐色 (Ⅱ黒>d ₁ >d ₂)	2 暗黄褐色 (d ₂ ローム≫d ₂ ブロック)	
	3 橙褐色 (d ₂)	4 暗橙褐色 (d ₁ +d ₂ 、d ₁ の混入顕著)	
	5 暗橙褐色 (d ₁ +d ₂ 、色調は4層より明るくd ₁ の混入顕著)		
	6 橙褐色 (3層に同じ)	7 褐色 (Ⅱ黒>d ₁ +d ₂ 、レンズ状に堆積)	
	8 黒褐色 (Ⅱ黒>d ₂ 、1層よりもd ₂ ブロックの混入多い)		
	9 暗褐色 (Ⅱ黒+d ₁ +d ₂)		

特徴 遺構集中区の南部、標高約10mの緩斜面上に位置する。c-69-76区付近の包含層調査中、Ta-d₁上面で汚れたTa-d₁の範囲を確認した。トレンチを入れて調査したところI群b-4類の土器片や黒曜石のチップが出土した。トレンチにより壁の立ち上がりを確認した後、遺構の中央部から壁に向かって住居跡の覆土を取り除いていった。調査は遺物の出方、床面近くから出土する細かな炭化材、覆土の特徴であるTa-d₁混じりのTa-d₂の土をたよりにプランを広げていった。

住居跡は径3.4mの円形を呈し、床面はTa-d₂下面からⅢ黒層上面につくられている。壁の立ち上がりは、全周とも急角度である。壁のうち北西側の一部は風倒木底によってその上部が壊されている。炉はない。

柱穴は壁際に14個検出された。大きさは、径5~7cm、深さ5~30cmで、先端の尖るものと、まるいものがある。柱穴の先端の形は異なるものの、その間隔がほぼ同じであることから同時期のものであろう。柱穴の確認にあたっては、床面で検出できたものがいくつかあったが、その多くは床をⅢ黒層まで下げて検出した。なお、柱穴のうちP-8・13・14は住居跡の調査終了後のⅢ黒層調査中に検出した。

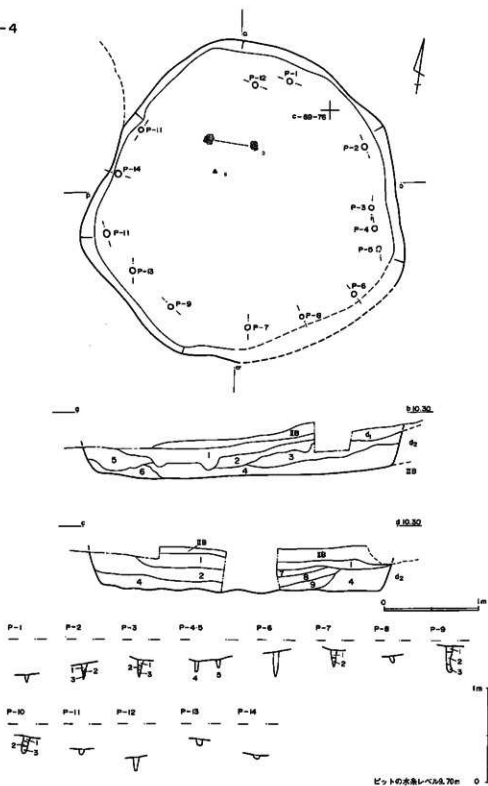
遺物は、床面中央部のやや北寄りにI群b-4類の胴部破片(3)が2ヵ所に、それより南側に五角形の石鏃が1点(6)出土した。

覆土から土器が252点、石器等が33点出土した。土器はほとんどがI群b-4類土器である。石器等では、石鏃2点、つまみ付ナイフ1点、Rフレイク、フレイク・チップが出土した。層別には、覆土1層上面からI群a類の口縁部破片(5)が出土し、その後この近くの覆土1層中からI群b-4類土器の細かな破片の集中(4ほか)がみられた。

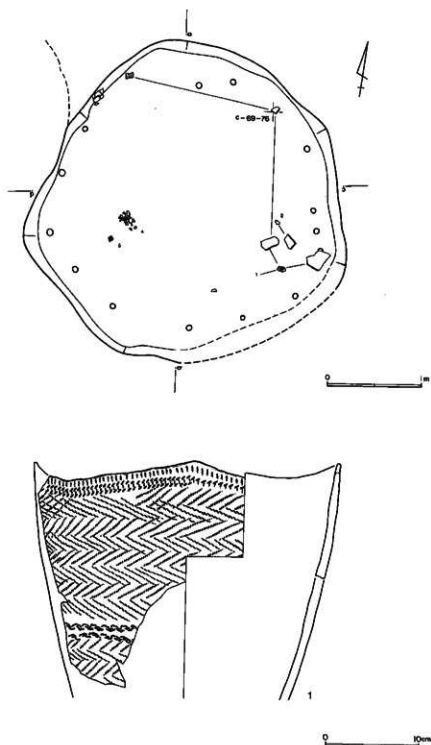
H-4北西壁上部の覆土5層中と、南東部壁寄りの覆土4層中から出土したI群b-4類の土器破片は接合し、図Ⅲ-12-1の土器が復元された(図Ⅲ-12)。

遺物 1は、I群b-4類の深鉢である。口縁部には山形隆起部を4ヵ所(現存するのは2ヵ所)にもち、口縁部から底部にかけてゆるやかにすばまる。体部には自縄自巻RLと

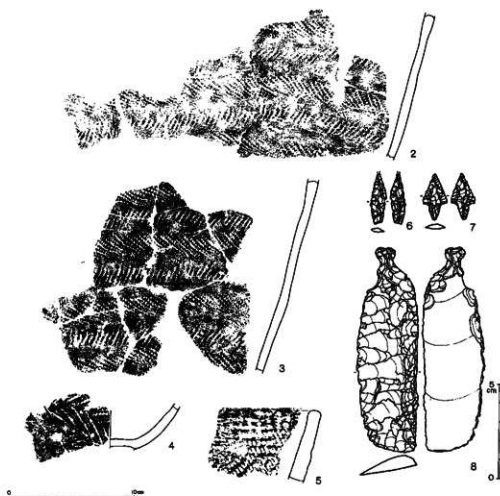
H-4



図Ⅲ-11 H-4



図Ⅲ-12 H-4 覆土の遺物出土状況と遺物



図Ⅲ-13 H-4 出土の遺物

LR の原体で羽状縄文を施し、口縁上部には、同じ原体を使用した圧痕文をめぐらす。また、体部の下の方には、綾格文が2条みられる。土器の大きさは径32cm（推定）、現存高24cmで、底部を欠いている。

2～4はⅠ群b～4類、5はⅡ群a類の土器破片である。2・3は、0段多条のLRの原体による縄文とその原体を燃った3段RLRの原体で羽状縄文が施されている胴部破片である。土器破片の湾曲の具合から大型のものであろう。4は自縄自巻の原体による縄文が施された底

表Ⅲ-1 H-4 柱穴状小ビット一覧

P No.	径(cm)	深さ(cm)	備 考	P No.	径(cm)	深さ(cm)	備 考
P-1	5	5	d ₁ >EaL	8	4	(7)	d ₁ >EaL
2	6	16	1.d ₁ >EaL 2.EaL 3.1等間隔	9	7	20	1.d ₁ >EaL 2.EaL+d ₁ 3.d ₁ >EaL
3	5	23	P-3に同じ	10	9	18	1.目線+EaL 2.目線 3.d ₁ >EaL
4	5	8	d ₁ >EaL	11	5	5	d ₁ >EaL
5	5	11	d ₁ >EaL	12	5	13	d ₁ >EaL
6	5	15	d ₁ >EaL	13	6	(6)	EaL+d ₁
7	7	28	1.d ₁ >EaL 2.EaL+d ₁	14	6	(4)	目線>d ₁

部である。5は、口縁部に条の横定する縄文を施し、さらに重ねて縦行縄文を施す。

6・7は、黒曜石製の石鏃である。6は、幅に比べ長さの長い五角形鏃で、先端部を少し欠損している。8は、覆土5層から出土した頁岩製の大きなたつまみ付きナイフである。片面加工で、裏面の右側縁に調整剥離が施される。

時期 床面出土の土器から、I群b-4類土器の時期である。

(佐川俊一)

H-6 (図Ⅲ-14~17、図版Ⅲ-6・7)

位置	c-69・75・76・85・86	規模	3.70×3.53/2.57×2.42/0.78m
土層	1 黒褐色 (Ⅱ黒>d ₂ >d ₁)	2 茶褐色 (d ₂ >Ⅱ黒>d ₁)	
	3 褐色 (d ₁ +d ₂)	4 明褐色 (Ⅲ黒>EnL>d ₂)	
	5 明褐色 (Ⅲ黒>EnL>d ₂)	6 褐色 (d ₁ +d ₂)	
	7 暗橙褐色 (d ₂ >Ⅲ黒)	8 赤褐色 (d ₂)	
	9 暗橙褐色 (d ₂ >Ⅲ黒>EnL)	10 暗赤褐色 (Ⅲ黒+d ₂)	

特徴 H-6は、美沢川右岸の台地から急斜面を経て美沢川にいたる河川沿岸の標高10m前後の低台地上に位置している住居跡である。

Ta-cを除去したⅡ黒層上面に径約1.5mの窺みが確認されたため、南北に長さ3m、幅20cmのトレンチを設置した。Ta-d中に掘り込みと土器片の面的な出土が確認されたため遺構と判断し調査を行った。付近には、H-4・H-7・H-11が三方を囲むように位置している。平面形は、円形に近い楕円形で壁上面のテラス状の段は崩落によるものと考えられる。東側壁は、Ta-c上面から風倒木痕の攪乱によって切られている。この風倒木痕は、さらにH-4の西側壁を切っている。

床面はⅢ黒層からEnLにかけて構築されている。炉跡とみなされる焼土は認められず、床面から最大5ミリ前後の炭化物が散点的に検出されている。

床面からは、2個の付属ビットと50ヵ所の柱穴状の小ビットが検出された。

2個の付属ビット(P-1・2)は、いずれもEnLによって埋められており床面を約8cm掘り下げた検出であった。図Ⅲ-15上は、床面から約8cm掘下げたエレベーションである。柱穴状の小ビット(P-3~52)は、壁際及び壁途中に検出されている。Ⅲ黒層からEnLにかけて構築されている床面にTa-d₂またはⅢ黒層の入った小径のブランが多数確認された。小ビットの切斷調査中にも、床面では未確認の小ビットが検出されたため、さらに掘り下げ調査を行った。小ビットは、複雑に重なりあいながら壁際をめぐっている。そのほとんどが径5~7cm前後で、中心方向に向かって傾斜している。付属ビットと同様にEnLで埋められているものもあった。なお、柱穴状小ビットの検出調査は本遺構外約30cmまで行ったが、図示した以外には検出されなかった。

床面からは、I群b-4類の土器片とつまみ付きナイフが出土している。P-1からは、I群b-4類の土器片が出土している。

本住居跡は、Ⅱ黒層が形成されはじめた頃に埋没状態となっていた。そのⅡ黒層が形成され

はじめた頃の覆土からは、Ⅰ群b-4類の土器が大量に出土している。土器片は流れ込んだ状態で出土しており、A・B・Cの3個のグループに分けられる(図Ⅲ-17、図版Ⅲ-6-2)。

Aグループは1層の下部2層直上に出土した。住居跡覆土内南西の壁側から中心部に向かって流れ込んでいる。大きめの土器破片が多く、復元可能であった。

Bグループは1層の下部2層直上に出土している。西北の壁側から中心部に流れ込んでいる。壁側は、細かい土器片が多く中心部では大きな土器片になる。

Cグループは2層中から出土している。中心部のやや南側に位置しており、南南西側から流れ込んでいる。大きな土器片が多い。流れ込んだ順序は、古いものからC・A・Bの順である。

本住居跡外の北北西には盛土の広がりが見られ、その直上面にはⅠ群b-4類の一括土器が出土した。

本住居跡に設けられた柱穴状の小ピットの数は、本遺跡内の同時期の住居跡と比較しても格段に多い。また、それらは前述したようにほとんどが傾斜しているが、これもこの住居跡の特徴である。

遺物 1はP-1出土、2・9は床面出土、3は盛土直上、4・8・10-13は覆土から出土した。土器はすべてⅠ群b-4類である。1-5・8は古い段階、6・7・13は新しい段階のものである。

1は胴部、2は平底の底部である。自縄自巻の原体による縄文が施されている。3は、細い自縄自巻RLとLRの原体による縄文とその間に4列の綾結文が施される胴部である。1・3はH-11覆土4層出土の8(図Ⅲ-32)と同一個体である。1-3は、器壁も薄く文様も丁寧に施されており焼成も良好である。本住居跡のⅠ群b-4類の古い段階の中でも比較的古いものと考えられる。

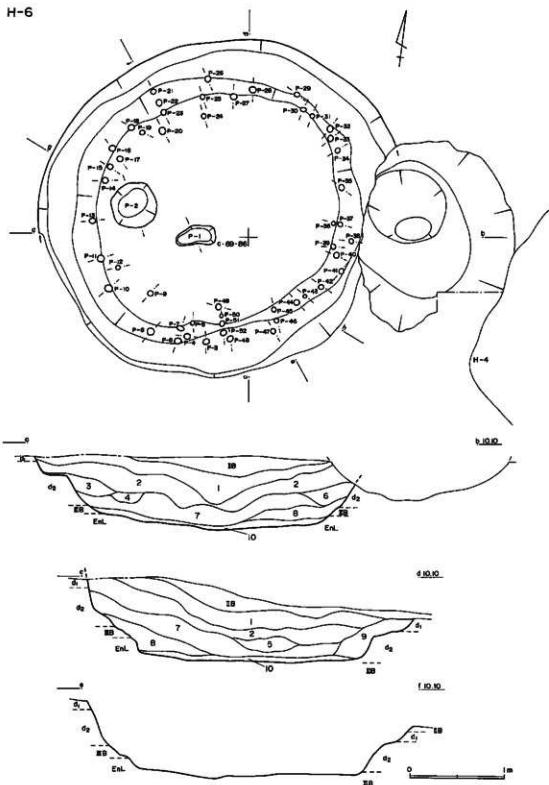
4・5はCグループの土器片で、同一個体である。器壁は比較的厚く、焼成は悪く胎土は脆い。4は尖った口唇断面をもつ口縁部である。口唇上には、縄による刻みが施されている。口縁部には縄轡痕が横位に三列施文され、その下には細い自縄自巻の原体による縄文が交差ぎみに施されている。5は、円底の底部で施文はされていない。

6・7はBグループの土器片である。口縁から胴部まで自縄自巻の原体による縄文が施されている。胎土には繊維が多く含まれており、表面の剥落が著しい。8は、Aグループ直下から出土した。二列ずつ横位に施される2段の綾結文の間に自縄自巻LRとLLの原体による縄文が施されている。

14はAグループの土器片を復元した深鉢である。口唇上には、縄による刻みが施されている。胴部には、太い自縄自巻LRとLLの原体による縄文が施されている。13のたたき石は、Cグループとともに出土した。

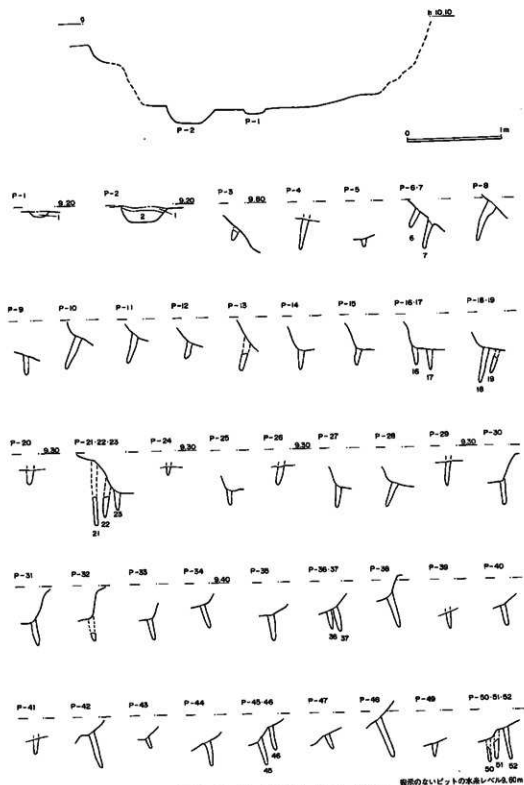
時期 覆土には、埋没過程においてH-4かH-7の掘上げ土と考えられる堆積が認められ、前述の覆土内遺物の出土状態とあわせて考えるなら、H-6はⅠ群b-4類の時期の住

H-6



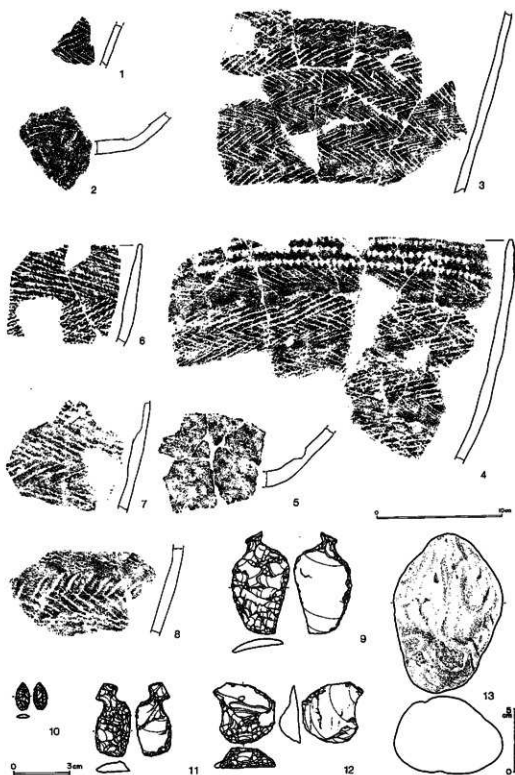
図Ⅲ-14 H-6

Ⅲ 第Ⅱ黒色土層の調査

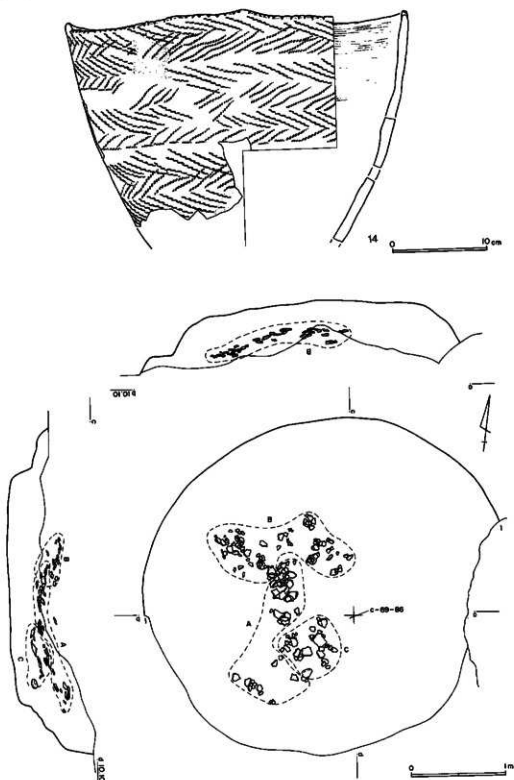


図Ⅲ-15 H-6 エレベーションと柱穴

図中の点のビットの深度レベルは0.90m



図Ⅲ-16 H-6 出土の遺物



図Ⅲ-17 H-6 層土の土器と出土状況

表Ⅱ-2 H-6 柱穴状小ピット一覧

P No	深さ又は 穴幅×穴幅(m)	長さ(m)	内径	方向	層 土	P No	深さ又は 穴幅×穴幅(m)	長さ(m)	内径	方向	層 土
1	42×29	6	—	—	1.暗褐色	27	6	25	7.5	174.5	暗褐色 (d ₆ +E _{nL} >E _{nL})
2	52×48	16	—	—	1.暗褐色 (d ₆ +E _{nL} >E _{nL}) 2.暗褐色 (d ₆ +E _{nL} >E _{nL})	28	7	27	26.0	174.5	暗褐色 (d ₆ +E _{nL})
3	7	116	26.07	251.5°	暗褐色 (E _{nL})より多い	29	5	130	—	—	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})
4	7	34	—	—	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})	30	4	39	5.0	191.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})
5	5	9	0	351.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})	31	5	39	6.5	194.5	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})
6	4	22	22.0	5.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})	32	5	127	7.0	200.5	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})
7	4	29	15.0	5.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})	33	6	23	13.0	222.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})
8	9	47	—	—	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})	34	5	26	18.5	229.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})
9	5	22	4.0	23.5	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})	35	7	38	—	—	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})
10	7	38	22.5	42.5	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})	36	5	21	12.0	279.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})
11	6	23	19.0	61.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})	37	5	27	14.5	289.5	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})
12	5	19	17.0	70.5	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})	38	6	49	17.0	298.5	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})
13	6	180	16.0	77.5	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})	39	5	130	—	—	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})
14	6	22	7.0	89.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})	40	5	24	13.0	282.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})
15	5	13	9.0	114.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})	41	5	130	—	—	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})
16	6	20	—	—	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})	42	6	43	16.0	297.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})
17	5	22	—	—	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})	43	3	13	22.0	304.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})
18	6	38	—	—	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})	44	7	27	8.0	309.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})
19	5	120	—	—	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})	45	5	32	17.0	329.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})
20	8	110	5.0	140.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})	46	5	26	8.0	339.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})
21	5	120	2.5	140.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})	47	4	18	22.0	322.5	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})
22	6	120	0.5	140.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})	48	6	48	23.0	345.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})
23	6	32	0.0	140.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})	49	6	18	—	—	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})
24	5	11	—	—	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})	50	5	120	2.5	348.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})
25	5	17	—	—	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})	51	6	120	6.0	348.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})
26	7	120	—	—	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL} +E _{nL})	52	6	38	18.5	348.0	暗褐色 (E _{nL} +E _{nL})

居跡の中で比較的古い段階のものと思われる。

H-7 (図Ⅲ-18~21、図版Ⅲ-8・9)

位置 c-69-85・86・95・96

規模 3.83×3.55/2.55×2.78/0.77m

土層 1 黒褐色 (Ⅱ黒>d₂)

2 黒色 (Ⅱ黒)

3 暗茶褐色 (d₂>d₁)

4 赤褐色 (d₂>d₁)

5 褐色 (Ⅲ黒+d₂)

6 明褐色 (Ⅲ黒+E_{nL})

7 暗褐色 (Ⅲ黒+E_{nL})

特徴 H-6に隣接する住居跡である。H-6と同様にⅡ黒層上面の径約1.5mの窪みにトレンチを設置して確認調査を行った。

平面形はほぼ円形で、壁上部は、崩落によってテラス状になっている。床面はⅢ黒層からE_{nL}にかけて構築されている。H-6と同様に、炉跡とみなされる焼土は認められず5mm前後の炭化物が散点的に検出されている。

住居跡にともなう遺構としては、3個の付属ピットと37ヵ所の柱穴状の小ピットが確認された。付属ピット(P-1~3)は、東南側の壁際に位置している。P-1は、床面直上の覆土と同じ暗茶褐色の覆土で埋没していた。P-2・3は、H-6の付属ピットと同様に埋め戻されている。P-2の下からも柱穴状の小ピットが検出されている。覆土は、水洗したが出土遺物はなかった。

柱穴状の小ピット（P-4~40）は、H-6と同様の検出状況であった。床面壁際か壁の途中を壁を沿う状態で設けられており、北側は30~40cmのほぼ等間隔に配列されている。南側は、やや複雑に配列されている。径は4~8cmで、ほとんどが垂直に設けられている。主柱穴が認められないことから、これらの小ピットがそれに替わる機能もはたしていたものと考えられる。なお、柱穴状小ピットの検出調査は本遺構外約40cmまで行ったが図示した以外には検出されなかった。

床面の遺物は少ない。床面の土壌を水洗したところ黒曜石のチップが多数出土している。Ⅱ黒層が形成され始めた頃の覆土からは、多数の遺物が出土している。土器は、Ⅰ群b-4類の新しい段階のものが3層直上の1・2層に北方向から流れ込んだ状態で出土した。また、古い段階のものが3層で出土した。

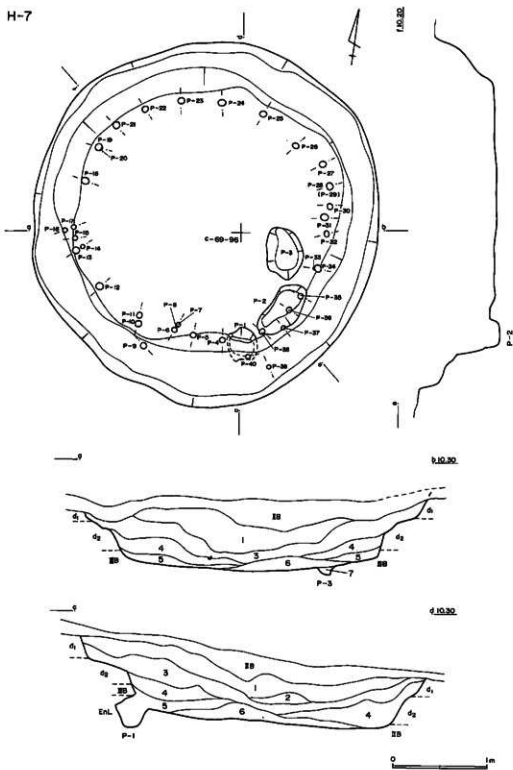
住居跡外の北北西側には本遺構の盛土が検出されており、この盛土から出土する遺物を盛土上・盛土中・盛土下に分けて調査を行った。その結果、盛土上・中からは盛土下に面をなして出土したものよりも古い段階のⅠ群b-4類が出土していることがわかった。これは、住居構築時に古い段階の包含層を掘り下げて盛土下の土器片上に捨てたためと考えられる。

遺物 1~5・25・29・30は盛土上、6~10・23・24は盛土中、11は盛土下から出土した。12~15は覆土3層上から、16~20は覆土1層から、31は主に2層から出土した。

土器はⅠのⅠ群b-3類以外は、すべてⅠ群b-4類である。2~4・6~16は古い段階、2・6~8・12は中でも比較的古いものである。5・17~20・31は新しい段階のものである。

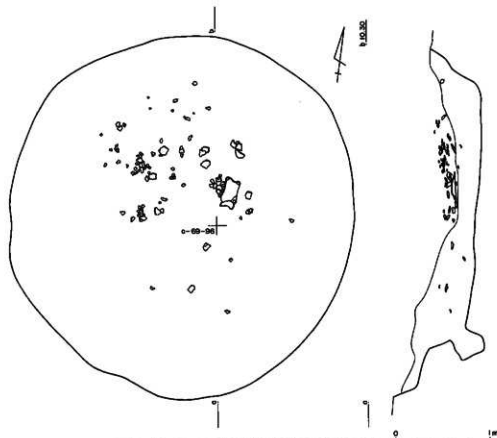
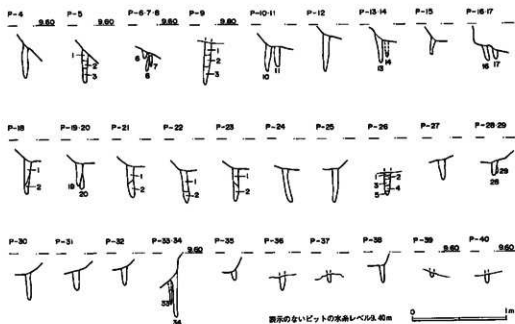
2は、縄端圧痕文と捺糸文が施された胴部である。3は、口唇断面が丸く口唇上には縄による刻目が施されている。器面には2列の縄端圧痕文と自縄自巻の原体による縄文が施されている。4は切りだし形の口唇断面を呈する口縁である。口唇部と器面には、自縄自巻の原体による縄文が施されている。7・8は同一個体で、7は底部近くの胴部、8は平底の底部である。焼成は良好で器壁は薄く自縄自巻の原体による縄文が施されている。9は、口唇断面が尖り、口唇直下には横走する自縄自巻の原体による縄文が施されており、その間に細い自縄自巻の原体による縄文が施されている。H-11の4層出土の7（図Ⅲ-32）と接合した。11は、盛土下（d₁上）で出土した山形隆起部を有する一括土器の口縁部である。器面の剥落が著しい。口唇断面は角型で、交差する自縄自巻の縄文が施されている。12は、細い自縄自巻の原体による縄文が施された底部で、平底を呈する。14は、魚骨回転文が施された口縁部である。口唇が薄くなり口唇断面は丸味をおびている。胎土には繊維が比較的多く含まれる。18・19は同一個体である。器壁は厚く、粗い縄文が施されている。口唇断面はやや丸みをおびている。本遺構内で出土したⅠ群b-4類の新しい段階のものの中でも比較的新しいものである。31は、3層直上の主に2層から出土した深鉢の復元個体である。口唇断面は角型で、器面に2条並列する縄の圧痕が羽状に施されている。自縄自巻RRLとLLRの原体によるものとみられる。

時期 本住居跡は、大きさ・構造・覆土内の遺物の出土状態が、近接するH-6と似てい

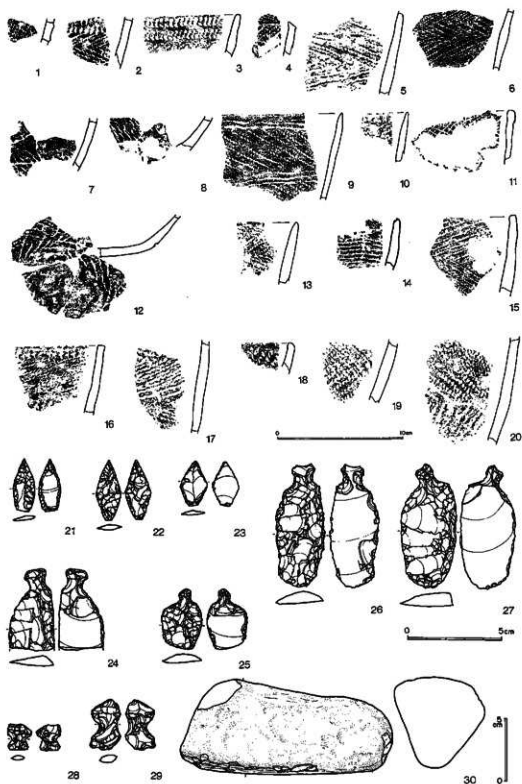


図Ⅲ-18 H-7

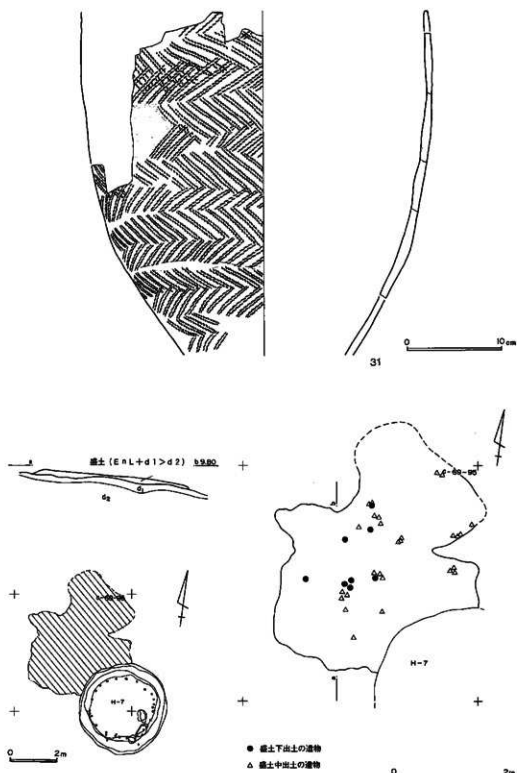
Ⅲ 第Ⅱ黒色土層の調査



図Ⅲ-19 H-7の柱穴断面と覆土の土器出土状況



図Ⅲ-20 H-7の遺物



図Ⅲ-21 H-7の遺物と盛土の範囲

ることから、ほぼ同じⅠ群b-4類の時期に構築されたものと考えられる。(皆川洋一)

表Ⅲ-3 H-7 柱穴状小ピット一覧

P No.	掘り出し 深さ(m)	掘り出し 深さ(m)	角度	方向	掘 土	P No.	掘り出し 深さ(m)	掘り出し 深さ(m)	角度	方向	掘 土
P-1	60C2	20	—	—	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)より多い	21	8	35	—	125.5	1.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ) 2.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
2	60C2	—	—	—	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	22	7	3.5	—	6.0	1.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ) 2.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
3	50C38	(8)	—	—	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	23	6	3.0	0	170.5	1.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ) 2.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
4	6	38	1.5	353.5	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	24	7	3.0	—	21.0	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
5	6	35	0	3.5	1.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ) 2.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	25	6	3.0	—	202.0	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
					3.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	26	7	(20)	0	218.0	1.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ) 2.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
6	5	10	0	18.0	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)						3.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ) 4.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
7	4	(10)	—	—	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)						5.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
8	3	(20)	—	—	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	27	8	22	4.0	222.5	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
9	7	45	—	—	1.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ) 2.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	28	7	1.0	0	245.0	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
					3.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	29	—	13	—	—	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
10	6	29	—	—	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	30	5	29	3.0	265.5	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
11	5	21	0	5.0	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	31	7	21	2.0	261.0	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
12	7	40	3.0	39.0	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	32	6	23	—	—	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
13	7	30	0	48.0	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	33	5	(27)	3.5	271.5	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
14	4	(10)	—	—	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	34	8	50	3.0	271.5	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
15	5	30	—	—	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	35	4	11	7.0	290.5	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
16	5	(10)	—	—	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	36	6	(2)	0	295.5	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
17	5	(12)	—	—	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	37	4	(9)	—	—	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
18	8	29	1.0	102.5	1.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ) 2.暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	38	5	18	—	—	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
19	7	25	2.0	99.5	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	39	4	(4)	—	—	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)
20	4	25	—	—	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)	40	4	(9)	—	—	暗褐色(Ⅱ黒>Ⅰ)

H-8 (図Ⅲ-22、図版Ⅲ-10)

位置 c-69-87

規模 2.29×2.26/2.08×1.90/0.28m

土 層 1 褐色(Ⅱ黒>Ⅰ+d₁+d₂)2 暗褐色(Ⅱ+d₁+d₂)3 暗黄褐色(ⅡEnL>d₂)4 暗褐色(Ⅱ+d₂)5 明褐色(Ⅱ黒>d₂)

特 徴 遺構集中区の南端、標高11.20mの緩斜面上に位置する。c-69-87区のTa-d₁上面で径約2mのⅡ黒層の落ちこみを確認した。トレンチを入れて調査したところ、Ⅲ黒層上面近くから炭化材の小片が多く出土した。

住居跡は、径約2mの円形を呈し、床面はTa-d₂下部またはⅢ黒層上面につくられ平坦である。炉はない。壁際からは、付属ピット2個、柱穴状小ピット15個が検出された。付属ピットP-16は、南壁際に位置し56×46cmの楕円形をした皿状の浅いものである。P-16の底面近くからは、層厚1~1.5cmで黒色土と炭化した草本類が混じって出土した。

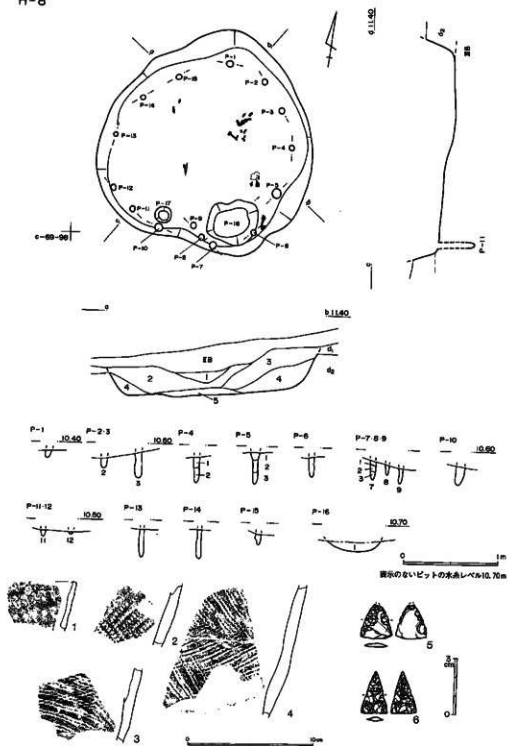
柱穴状小ピットは径4~9cm、深さ4~33cmのものが35~55cmの間隔で15個検出された。柱穴の入り方は床面に対してほとんど垂直である。

遺物は覆土からⅠ群b-4類の土器破片が10点、石鏃2点、フレイク・チップが7点出土した。このほか床面から径1.5cmほどの丸太状の炭化材が出土している。

遺 物 1~4は、Ⅰ群b-4類の土器破片である。1は、縄網の圧度がつけられた口縁部

Ⅲ 第Ⅱ黒色土層の調査

H-8



図Ⅲ-22 H-8と出土遺物

である。2は自縄自巻LRとRLの原体で羽状縄文が施されている。胎土の特徴から1と2は同一個体と思われる。3と4は2条一組の襷糸文が施された胴部破片である。5・6は黒曜石製の石鏃である。5は側縁のみを加工した簡単なつくりの三角形鏃、6は入念な加工の施された二等辺三角形鏃である。いずれも出土層位は覆土上部のⅡ黒層中である。

時期 壁際に小柱穴をもつⅠ群b-4類の住居跡に構造が類似するので、その時期と思われる。(佐川俊一)

表Ⅲ-4 H-8 柱穴状小ピット一覧

P. No.	径(m)	深さ(m)	備 考	P. No.	径(m)	深さ(m)	備 考
P-1	7	8	$d_0 > EnL$	10	8	20	$d_0 > 覆土 + EnL$
2	7	12	$d_0 > EnL$	11	6.5	9	$d_0 > 覆土$
3	7	23	$d_0 + EnL > 覆土$	12	4	4	$d_0 > 覆土$
4	4	26	$1. EnL > d_0$ 2. $d_0 > EnL$	13	5	29	黒土 + $EnL > d_0$
5	9	33	$1. d_0 > EnL$ 2. $EnL > d_0$ 3. $EnL > d_0 + 覆土$	14	4	31	黒土 + $d_0 > EnL$
6	6	20	$EnL > d_0 + 覆土$	15	6	11	$d_0 > 覆土$
7	6.5	21	$1. d_0 > EnL$ 2. $EnL > d_0$ 3. $d_0 + 覆土$	16	5.6	10	1. 暗茶褐色($d_0 > 覆土$) 2. 炭化材(主に草木) + 黒土
8	5	13	$EnL > 覆土$	17	15	—	—
9	4	17	$d_0 + EnL + 覆土$				

H-9 (図Ⅲ-23~28、図版Ⅲ-11~13)

位 置 c-69-73・74・83・84 規 模 3.35×3.21/3.11×2.95/0.51m

- 土 層
- 1 黒褐色(Ⅱ黒 $\gg d_1 > d_2$)
 - 2 暗橙褐色($d_2 > d_1$)
 - 3 茶褐色(Ⅱ黒 $+ d_2$)
 - 4 暗茶褐色(Ⅱ黒 $+ d_2$)
 - 5 明橙褐色($d_1 + d_2$)
 - 6 黒褐色(Ⅱ黒 $+ d_1 \gg d_2$ 、遺物と炭化材を含む)
 - 7 暗橙褐色($EnL > d_1 + d_2 > EnP$)
 - 8 暗橙褐色($d_1 + d_2$ 、径20mmの d_2 バミスを多く含む)
 - 9 暗橙褐色($d_1 + d_2$ 、8層より d_1 の混入が多い)
 - 10 橙褐色(d_2)
 - 11 黄褐色(d_2 、 d_2 ルームに d_2 バミスが微量混じる。H-9の掘り上げ土。)

特 徴 遺構集中区の中央部、標高8.60mの緩斜面上に位置する。平面形は円形を呈し、大きさは径約3mである。H-9のすぐ西側には、中期の住居跡H-13がある。

H-13調査のために入れた東トレンチを延長した際にH-9を確認した。床面は、Ⅱ黒層上面から70cm下につくられているので、壁の立ち上がりは容易にみつづけることができた。トレンチによる壁の立ち上がりを確認した後、H-9の南側半分については、遺物の出方が少ないので、土層観察後床面まで掘り下げた。北側半分は覆土より上のⅡ黒層中でⅢ群a類の土器集中部分を実測し取り上げた(図Ⅲ-113-2)。その後1層と6層中では出土遺物が多く、とくにプラン中央の一番低い部分に土器が集中していて、そこからは3個体の土器が復元された(図Ⅲ-26-1~3)。これらの遺物を取り上げた後、その下の覆土8層を床面から5cm上ま

で残して掘り下げた。床上5cmまでの土壌については、微細遺物を採取する目的から取り上げているが、水洗処理やフローテーションはまだ実施していない。

住居跡全体の床面を出した後、柱穴・付属ピットの調査に移った。柱穴(31個)および付属ピット(3個)は全部で34個検出された。これらのうち付属ピットと壁際の柱穴のいくつかについては、EnLの床面上で柱穴および付属ピットのくぼみに住居跡の覆土8層が入った状態で確認された。なお床面を精査したところ、柱穴は壁際だけでなくそこから20~35cm程内側にもみつき最終的には34個となった。

これらの柱穴を、外側と内側のグループ別に比較してみる。外側の柱穴は全部で20個ある。径は4~10cm、深さが13~42cmである。柱穴のプランを結んでいくと径は2.8~2.9mの円形となる。内側の柱穴は12個で、径が3~6cm、深さが11~30cmである。柱穴のプランを結んでいくと、その大きさは、径2.2mの円形となる。2つのグループを比較すると、外側のグループの方が内側のそれに比べ柱穴の径が少し大きく、深さも深いようである。柱穴の入り方は、両方のグループとも床面に対してその先端が壁の外側へ向ってやや斜めに入るものが多い。

付属ピットはH-9の南壁際に3個ある(P-1~3)。平面形は隅丸長方形や楕円形と異なるが、大きさ(径または長軸)が30~40cmと類似している。付属ピットの底面は、平坦もしくは皿状で壁の立ち上がりはゆるい。ただしP-3の南側の壁はオーバー・ハングしている。覆土は住居跡の覆土8層と同じ土が入るが、P-2の2層はEnLとⅡ黒が同量混じり合った土である。P-2の覆土2層中およびP-3の覆土中位以下には、炭化材の薄片を少量含んでいた。付属ピットから遺物は出土していない。

住居跡の覆土の堆積状態は、一番上にⅡ黒層がすり鉢状にたまり、その下に覆土1層(すぐ南側のH-11の盛土がたまった後の土)、2~5層はH-11の掘り上げ土と思われる土、6層はH-11構築以前の土である。8層はH-9が廃棄されてからすぐに埋まった土である。覆土のなかで遺物を多く含むのは6層で、その次に1層である。8層は遺物をほとんど含まない。

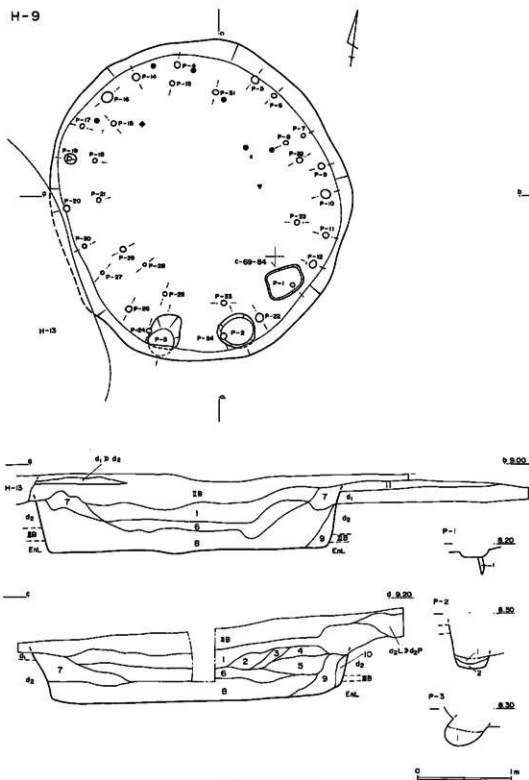
H-9の南~東側にかけて(盛土1)と、北西側(盛土2)の2ヵ所には、H-9の掘り上げ土と思われる土が堆積している(図Ⅲ-24の下)。

覆土の遺物出土状況は前述したように8層上面から多くの遺物が出土した。土器では、I群b-4類の深鉢が3個体復元された。土器はいずれも底部を欠き、図Ⅲ-26-2のように口縁部のみのものである。図Ⅲ-26-3の土器は、北西壁上部から住居跡の中央部にかけて流れ込んだ土器破片が接合したものである(図Ⅲ-25)。土器破片は、I群b-4類のほかにもI群b-1・2、I群b-3類土器がわずかであるが、壁面上部の覆土中から出土している。

石器類は図Ⅲ-25にもあるとおり、黒曜石製のつまみ付ナイフ、頁岩製のスクレイパー、花崗岩製のたたき石が出土した。

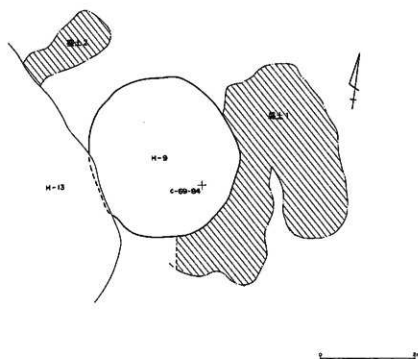
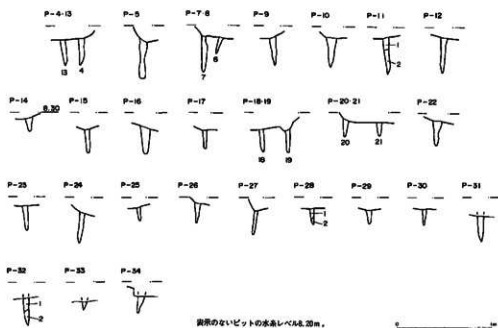
床面からの出土遺物は、I群b-4類の土器破片7点、I群b-2類1点、I群b-3類4点、黒曜石製のスクレイパーとフレイク、砂岩製の砥石が出土した。

H-9



図III-23 H-9

Ⅲ 第Ⅱ黒色土層の調査



図Ⅲ-24 H-9の柱穴と盛土の範囲

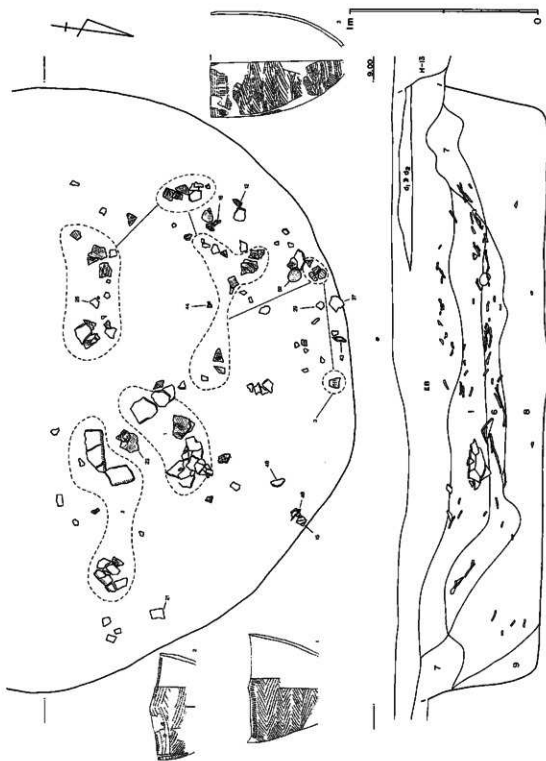
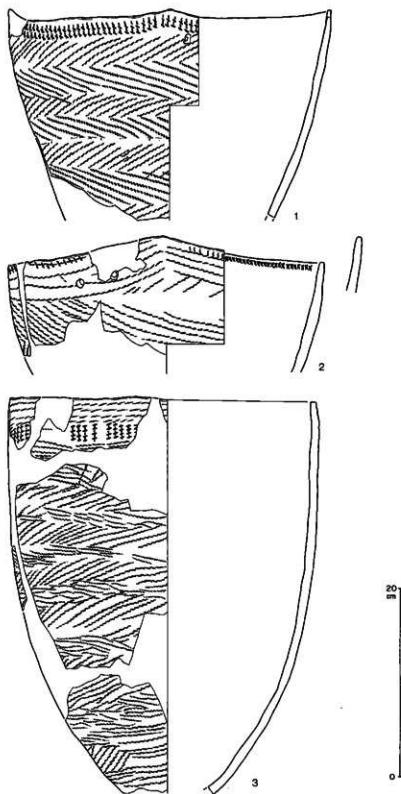
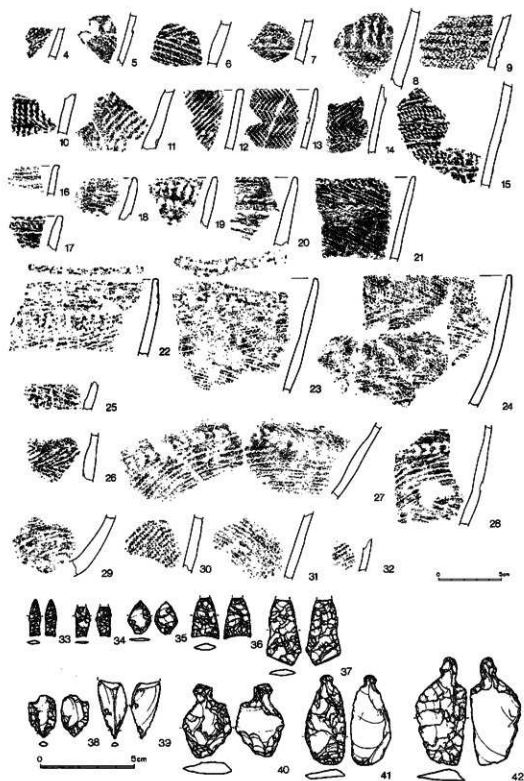


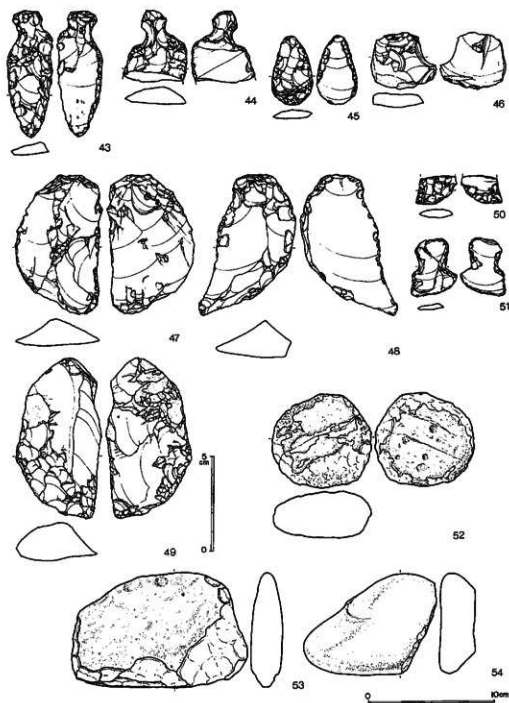
図 3-25 河床の土層 6-4-25 III



図Ⅲ-26 H-9出土の土器



図Ⅲ-27 H-9出土の遺物(1)



図Ⅲ-28 H-9出土の遺物2)

遺物 1～3はいずれもⅠ群b-4類の深鉢である。1は最大幅34cm、高さ22cmで口縁部に器面に施された原体圧痕がめぐり、器面には、自縄自巻の原体により羽状縄文が施されている。2は口径36cm、現存高14cmの大きさである。口縁部に4～5段の縄線文をつけ、1段目の縄線文の上と口縁裏側に器面に施した原体の縦の圧痕をつける。縄線文の下には、自縄自巻RRとLLの原体による羽状縄文が施されている。3は口径33cm、高さ42cmの大きさである。口縁部に縄線文を4段つけ、その下に器面に施した自縄自巻の原体の圧痕をつけている。器面には、自縄自巻LLとRRの原体による横走気味の縄文が施されている。口唇上には自縄自巻の原体による圧痕がつけられる。底部は欠損しているため、平底か丸底かは不明である。器形は、底部近くから急に立ち上がり胴部の下から刃ぐらゐまでゆるやかにふくらむ。それから上はほとんど直立気味に立ち上がり口縁部で若干内湾する。

4～7は床面から出土したもので、4～6がⅠ群b-4類、7がⅠ群b-3類土器である。4・5は薄手なのに対して、6は厚みがあり縞文が深く施されている。8～11はⅠ群b-1類土器である。8は短縄文および組紐圧痕文が施されたもの、10は短縄文の施されたものである。11はLRの斜行縄文が施され、下の方には短縄文がみられる。底部に近いところの破片である。12はⅠ群b-2類土器の口縁部破片である。口唇断面は角型をなし、器面にはLRの斜行縄文と縄端の圧痕が横位につけられる。13～15はⅠ群b-3類土器である。13は燃りの異なる2種類の原体を使用して羽状縄文のように施文している。

16～29はⅠ群b-4類土器である。口縁部に縄線文のあるもの(16・18・20)、縄線文と短縄文のあるもの(17・22)、縄端圧痕と短縄文のあるもの(19・23)がある。

21はH-9から約10m離れたc-69-91区の復元土器に接合した(図Ⅲ-102-2)。17・22は図Ⅲ-26-2・3の復元土器の口縁部の一部である。23の裏面には、口縁部と同じ文様が一段つけられている。27・28は、23と同一個体と思われる底部近くの破片である。30・31はⅣ群b-1類、32はⅣ群c類の土器破片である。

土器破片の出土位置は、4～7が床面出土のもの、8が盛土1の上面、13が盛土2の下から、そのほかはすべてH-9の覆土中からである。なお、10はH-9の柱穴P-9上部より出土した。

33～36は石鏃である。33は五角形鏃、34も先端と右側縁の一部を欠くが五角形鏃と思われる。35は簡単なつくりのもの。36は先端部を欠損した三角形鏃である。37は石槍またはナイフ片である。石材はいずれも黒曜石である。38・39はドリルである。石材は38が珪岩、39が黒曜石である。

40～44はつまみ付ナイフである。40は幅があるのにくらべ長さが短いものである。裏面の剝離は一次剝離面より新しいので、使用途中で短くなったものであろうか。42は盛土1の中から出土したものである。つまみ付ナイフの石材は、40・43・44が黒曜石、41と42が頁岩である。

45～49はスクレイパーである。47～49はいずれも同じような大ききで、銅線に刃部をもつものである。石材は45・47～49が頁岩で、46が黒曜石である。50・51は黒曜石製のRフレイク

Ⅲ 第Ⅱ黒色土層の調査

である。52は花崗岩製のたたき石で、大変もろいものである。53・54はすり石である。石材は53が片麻岩、54が緑色泥岩である。

石器の出土位置は、37・47・50が盛土1の上面、42が盛土1の中から出土しており、そのほかはH-9の覆土中である。46のスクレイパーは覆土中から出土しているが、レベルとしては比較的床面に近い。

時期 床面からI群b-4類の土器破片が出土していることと、壁際に小柱穴がめぐるという構造上の特徴からI群b-4類土器の時期と思われる。

またH-9は、柱穴が2重にめぐっており、柱穴の確認状況から内側の柱穴が古く、外側のものは新しいようである。H-9の覆土2～5層はH-11の掘り上げ土と思われることから、H-9の時期はH-11よりも古いと思われる。

(佐川俊一)

表Ⅲ-5 H-9 柱穴状小ピット一覧

P No.	径(m)	深さ(m)	備 考	P No.	径(m)	深さ(m)	備 考
P-1	37	40	石丸・黒色土、ボヤツとした色調	18	4	24	P-18に同じ
2	37	10	1.中層褐色土、2.中層褐色土、3.中層褐色土、4.中層褐色土、5.中層褐色土	19	10	30	P-18に同じ
3	37	15	中層褐色土、中層褐色土、中層褐色土、中層褐色土、中層褐色土、中層褐色土	20	6	18	石丸・中層褐色土、石丸・ボヤツ
4	6	30	石丸・中層褐色土、石丸・中層褐色土、石丸・中層褐色土、石丸・中層褐色土	21	5	15	中層褐色土、石丸・中層褐色土、石丸・中層褐色土
5	8	42	中層褐色土	22	10	26	石丸・中層褐色土、石丸・中層褐色土、石丸・中層褐色土
6	5	—	—	23	5	26	中層褐色土
7	4	37	中層褐色土	24	5	22	中層褐色土、石丸・中層褐色土
8	4	18	中層褐色土	25	3	11	中層褐色土、石丸・中層褐色土
9	6	30	中層褐色土	26	4	21	中層褐色土
10	10	30	中層褐色土	27	4	25	中層褐色土
11	6	39	1.中層褐色土、2.中層褐色土、3.中層褐色土	28	5	14	1.石丸・中層褐色土、2.中層褐色土、3.中層褐色土
12	8	37	中層褐色土	29	4	16	中層褐色土、石丸・中層褐色土
13	5	39	中層褐色土、石丸・中層褐色土の上・下までである。	30	4	16	中層褐色土、石丸・中層褐色土
14	7	12	石丸・中層褐色土	31	6	20	中層褐色土、石丸・中層褐色土、石丸・中層褐色土
15	4	29	中層褐色土、中層褐色土、中層褐色土、中層褐色土	32	6	20	中層褐色土、石丸・中層褐色土、石丸・中層褐色土
16	9	27	中層褐色土、中層褐色土	33	5	10	中層褐色土
17	4	30	石丸・中層褐色土、石丸・中層褐色土	34	7	18	中層褐色土

H-10 (図Ⅲ-29・30、図版Ⅲ-14・15)

位置 c-69-72・73・82・83

規模 2.76×2.70/2.49×2.46/0.48m

土層 1 暗褐色 (d_2)

2 暗褐色 ($d_2 > d_1$)

3 暗褐色 ($d_1 + d_2$)

4 暗褐色 (2層に同じ)

5 暗褐色 ($d_1 + d_2$)

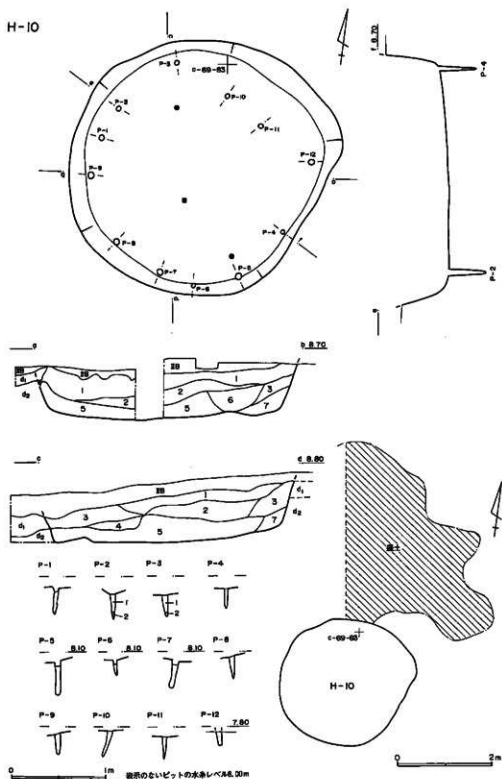
6 暗褐色 ($d_1 + d_2$ 、色調は1層より暗い)

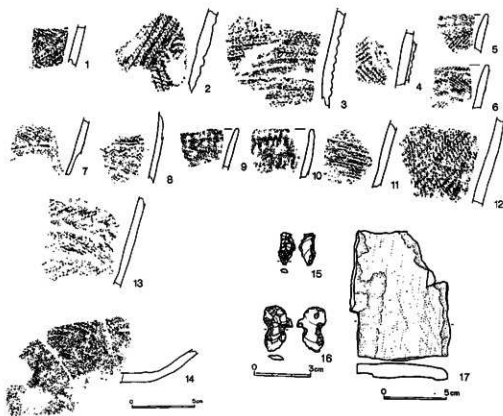
7 暗褐色 ($d_1 > d_2$)

特徴 遺構集中部の中央部、標高8.40mの平坦面に位置する。すぐ南側には、H-9がある。H-10の確認は、H-9調査のために入れた南トレンチの延長部分で、Ⅱ黒層の落ちこみがみられたことによる。

住居跡は、径2.7mの円形を呈する。床は、Ta-d₂下面につくられ平坦である。柱穴状小ピットは、住居跡の壁際から12個検出された。炉はない。

遺物は、覆土1層の上面でI群b-1類土器が3点、I群b-4類土器が1点、それと黒





図Ⅲ-30 H-10出土の遺物

曜石の原石が1点出土した。その後、覆土中からは、南東壁面近くで砂岩製の砥石(17)が、西壁の中段ぐらいのレベルからⅠ群b-4類土器が出土した。

床面からは、Ⅰ群b-4類土器が2点、黒曜石製のRフレイクが1点出土した。

柱穴状小ピットの確認は、住居跡の床面がTa-d₂下面につくられているため容易ではないが、それでも床面上で径5cm程の汚れた部分を検出することができた。その後、床面をⅢ黒層からEnL層上部まで掘り下げ柱穴の検出に努めた。

H-10の北から東側にかけて、H-10の掘り上げ土と思われる土を確認した。盛土は、広範囲に分布するが、その土層は褐色土(d₁>d₂)でH-9の盛土などに比べるとはっきりしない。

遺物 1は、床面から出土したⅠ群b-4類土器である。節のやや大きな燃糸文が羽状につけられる。2・3は、組紐瓦痕文のつけられたⅠ群b-1類土器である。5・6はⅠ群b-3類土器の口縁部である。結束羽状縄文と隆帯がつけられている。7・8はⅠ群b-3類の胴部破片である。9-14は、Ⅰ群b-4類土器である。9・10は口縁部に縄端の瓦痕がつけられている。11は2条一組の燃糸文が横位に施文されている。12は、節の大きな自縄自巻LRの斜行縄文がつけられている。14は丸底の底部で、底面まで自縄自巻の原体による縄文がつけられている。15は黒曜石製のドリルである。16は黒曜石製のRフレイクで、表面がかな

り風化している。17は砂岩製の砥石で、大きくは3つに割れている。使用面は一面のみである。

なお遺物の出土位置は1が床面、4と8がH-10北側のトレンチ下部から、12は盛土中から出土したもので、その他は住居跡の覆土中である。とくにI群b-1類土器は、II黒層下部から出土した。

時期 床から、I群b-4類土器が出土していることと、壁際に柱穴状小ピットがめぐるといふ構造上の特徴から、I群b-4類土器の時期と思われる。

住居跡の覆土の埋まり方がH-9にくらべ早かったようで、H-10の覆土上面には、II黒層がほぼ水平に堆積している。このことからH-9とH-10は同じI群b-4類土器の時期でも、H-10の方が古いようである。

(佐川俊一)

表Ⅲ-6 H-10 柱穴状小ピット一覽

P. No.	径(cm)	深さ(m)	層 土	P. No.	径(cm)	深さ(m)	層 土
P-1	5	22	Ⅱ黒+d ₁	7	5	29	Ⅱ黒+d ₁
2	5	28	1.Ⅱ黒+d ₁ 2.EnL>d ₁	8	5	25	Ⅱ黒>d ₁
3	5	24	1.Ⅱ黒+d ₁ 2.d ₁	9	6	19	Ⅱ黒>d ₁
4	4	22	Ⅱ黒+d ₁ EnL上層で確認	10	5	20	d ₁ >EnL
5	5	37	Ⅱ黒+d ₁	11	5	25	Ⅱ黒+d ₁ EnL上層で確認
6	4	17	Ⅱ黒+d ₁	12	6	14	Ⅱ黒+EnL>d ₁ 床面をかき下げた時点で確認

H-11 (図Ⅲ-31・32、図版Ⅲ-16・17)

位 置 c-69-74・75・84・85

規 模 3.33×2.99/2.54×2.32/0.48 m

土 層 1 褐色 (Ⅱ黒>d₁>d₂)

2 黒褐色 (Ⅱ黒>d₁)

3 明茶褐色 (d₂+d₁)

4 茶褐色 (d₂+Ⅲ黒)

5 赤褐色 (d₂+Ⅲ黒)

6 赤褐色 (d₂+Ⅲ黒)

7 赤褐色 (d₂+Ⅲ黒)

8 明褐色 (d₂+Ⅲ黒)

9 橙褐色 (d₂)

10 褐色 (Ⅲ黒+EnL)

11 暗黒褐色 (Ⅱ黒>d₂)

12 茶褐色 (d₂+Ⅲ黒+EnL)

13 暗黄褐色 (EnL>d₂)

14 黄褐色 (EnL)

15 暗褐色 (Ⅲ黒>EnL)

特 徴 H-6の北側に近接した住居跡である。H-6に設けた南北トレンチの北側に落ち込みが認められ、そのトレンチをさらに延長して調査したところ住居跡とわかった。

平面形はほぼ円形で、壁は崩落のためテラス状になってめぐっている。

床面は、Ⅲ黒層からEnLにかけて構築されている。炉跡とみなされる焼土は、H-6・H-7同様に検出されなかった。床面よりも上のレベルの埋没土中に炭化物のわずかに集中するのが認められた。

床面からは7個の付属ピットと22ヵ所の柱穴状の小ピットが検出された。

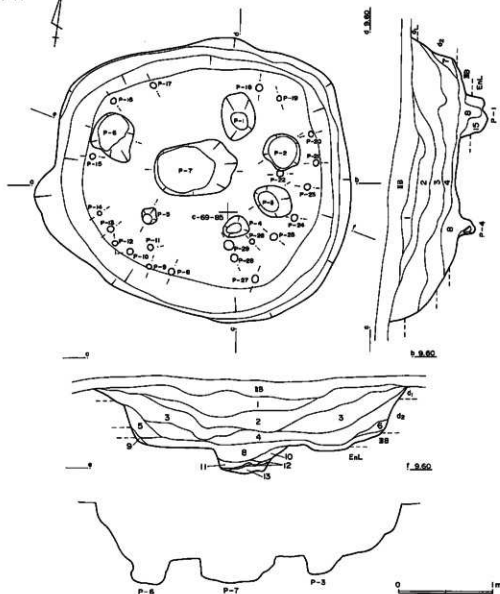
付属ピット(P 1~7)は、床の中央に位置するP-7を取り巻くように他の6個が設けられている。いずれもH-6・7のように埋め戻されてはいない。P-1・4・5は、主柱穴と考えられる。P-1・4からは、I群b-4類の古い段階の土器片が出土している。P

III 第II黒色土層の調査

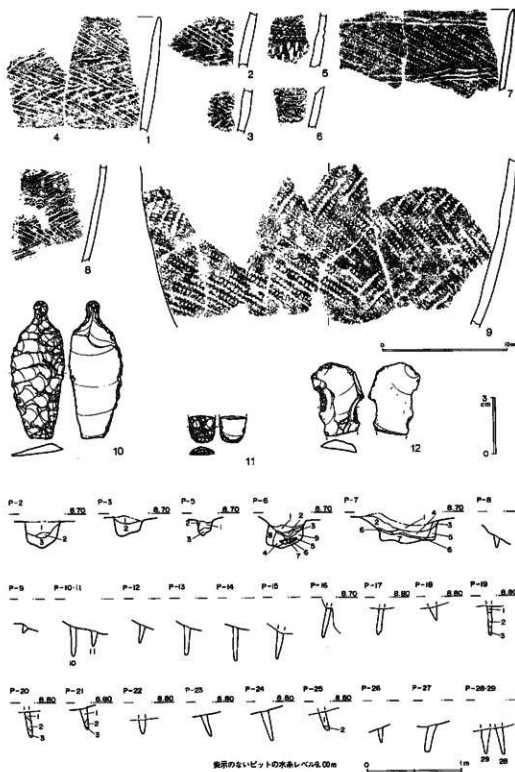
ー1のものは焼けている。P-6の覆土中には、焼土層(2層)と炭化粒の層(3層)が認められ、それらとともに焼成をうけたI群b-4類の古い段階の土器片と黒曜石製のスクレイパーが出土している。P-4・6出土のI群b-4類は、同一個体である。P-7の覆土中にも炭化粒の層(4層)が検出されている。また頁岩製のつまみ付ナイフとスクレイパーが出土している。

P-1・7に関しては、覆土の各層位ごとに水洗を行った。その結果、多数の土器片と大量のチップが出土している。

H-11



図III-31 H-11



図Ⅲ-32 H-11出土の遺物と付属ピット・柱穴

Ⅱ 第Ⅱ黒色土層の調査

柱穴状の小ビット（P-8～29）は、主に壁面に設けられてはいるが等間隔に廻らされてはおらず何本かは付属ビットに近接して設けられている。垂直に埋め込まれているものが9本、傾斜して埋め込まれているものが13本である。

Ta-dによる埋没後からⅡ黒層が形成されはじめた頃の覆土中からは、Ⅰ群b-4類の新しい段階の土器片が出土している。

覆土4層は他の遺構の盛土の流れ込み、5層は本遺構の周りに積んであった盛土の流れ込みである。

遺物 土器1～3は、付属ビット出土、4～9は覆土出土である。Ⅰ群b-2類の5以外はⅠ群b-4類で、1～4・6・7は古い段階のものである。1の口縁はP-4出土で、P-6出土の2や床面直上の覆土8層出土の4と接合した。口唇断面は尖りぎみで、その直下には綾格文、胴部には自縄自巻の原体による縄文が施されている。6は、魚骨回転文の施された胴部である。7は、口唇断面が尖っている。その直下には、横走する自縄自巻LRとRLの原体による縄文が施されている。H-7盛土中から出土した9（図Ⅲ-20）と接合した。4層から出土した。8は、綾格文と自縄自巻の原体による縄文が施されている。H-6の盛土直上から出土した3（図Ⅲ-16）と同一個体である。4層から出土した。9は、太い自縄自巻LRとRLの原体で羽状縄文が施されている。3層から出土した。

石器12は、P-6から出土した黒曜石製スクレイパーである。10・11は、頁岩製でともにP-7から出土した。

時期 期 付属ビット出土の土器からⅠ群b-4類期の住居跡と考えられる。（皆川洋一）

表Ⅲ-7 H-11 柱穴状小ビット一覧

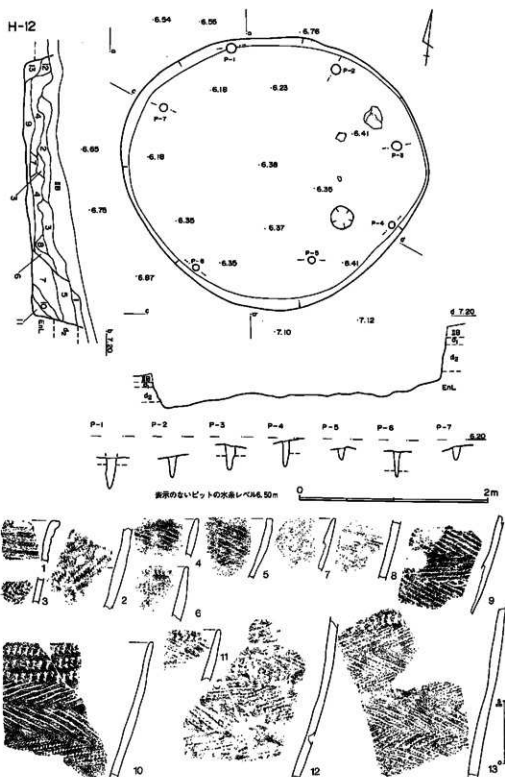
P No.	径(mm)	深さ(m)	覆土	P No.	径(mm)	深さ(m)	覆土
P-1	52X48	20	6.暗褐色、15.暗褐色	14	5	37	2.白土+赤土+白土
2	52X39	20	1.暗赤褐色(白土+赤土) 2.暗赤褐色(白土+赤土) 3.暗赤褐色(白土+赤土)	15	6	29	2.白土+赤土
3	40X35	25	1.白土+赤土	16	5	33	2.白土+赤土+白土
4	52X25	18	6.暗褐色(白土+赤土) 14.暗褐色(白土+赤土) 15.暗褐色(白土+赤土)	17	5	27	2.白土+赤土+白土
5	52X17	16	1.暗褐色(白土+赤土) 2.暗褐色(白土+赤土) 3.暗褐色(白土+赤土)	18	8	14	2.白土+赤土
6	40X42	36	1.暗褐色(白土+赤土) 2.暗褐色(白土+赤土) 3.暗褐色(白土+赤土) 4.暗褐色(白土+赤土)	19	5	30	1.白土+赤土 2.白土+赤土 3.白土+赤土
			5.暗褐色(白土+赤土) 6.暗褐色(白土+赤土) 7.暗褐色(白土+赤土) 8.暗褐色(白土+赤土)	20	5	28	1.白土+赤土+白土 2.白土+赤土+白土 3.白土+赤土+白土
			9.暗褐色(白土+赤土) 10.暗褐色(白土+赤土) 11.暗褐色(白土+赤土) 12.暗褐色(白土+赤土)	21	7	25	1.白土+赤土 2.白土 3.白土+赤土
7	87X35	24	1.暗褐色(白土+赤土) 2.暗褐色(白土+赤土) 3.暗褐色(白土+赤土) 4.暗褐色(白土+赤土)	22	7	15	2.白土+赤土
			5.暗褐色(白土+赤土) 6.暗褐色(白土+赤土) 7.暗褐色(白土+赤土) 8.暗褐色(白土+赤土)	23	6	24	2.白土+赤土
			9.暗褐色(白土+赤土) 10.暗褐色(白土+赤土) 11.暗褐色(白土+赤土) 12.暗褐色(白土+赤土)	24	7	33	2.白土+赤土
8	5	12	1.白土+赤土 2.白土 3.白土+赤土	25	7	21	1.白土+赤土 2.白土+赤土 3.白土+赤土
9	5	8		26	5	16	2.白土+赤土
10	7	31	P-24に同じ	27	8	29	2.白土+赤土+白土
11	6	16		28	8	32	P-24に同じ
12	5	38	2.白土+赤土	29	10	27	2.白土+赤土+白土
13	6	29	P-10に同じ、2.白土+赤土				

H-12（図Ⅲ-33・34、図版Ⅲ-18・19）

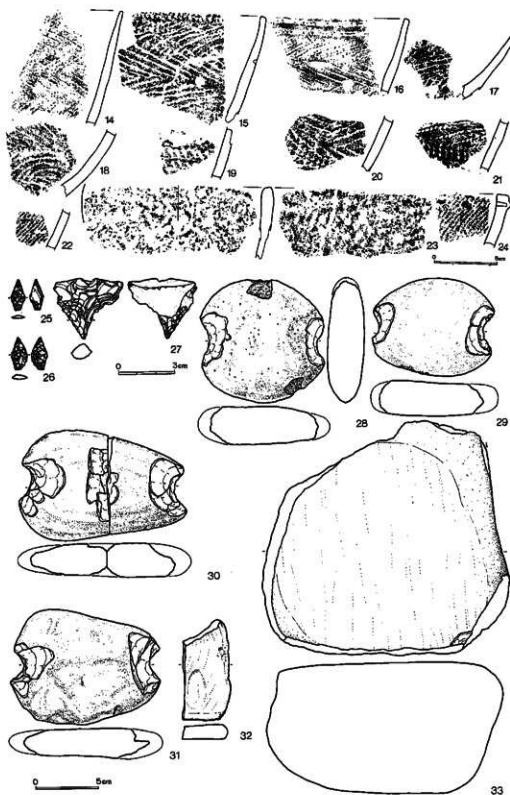
位置 c-68-89・99

規模 3.02×2.83/2.82×2.81/0.26m

土層 1 茶褐色（Ⅱ黒+d₂炭化物が混入）



図III-33 H-12と出土の土器 (1)



図面-34 H-12出土の遺物

- | | |
|--|----------------------------------|
| 2 茶褐色 (Ⅱ黒 $\gg$ d ₂) | 3 橙褐色 (d ₂ $\gg$ Ⅱ黒) |
| 4 橙褐色 (d ₂) | 5 暗黄褐色 (d ₂ + EnL) |
| 6 暗黄褐色 (EnL $\gg$ d ₂) | 7 暗黄褐色 (EnL > d ₂) |
| 8 暗褐色 (Ⅲ黒 + EnL) | 9 暗褐色 (EnL + d ₂ 硬い) |
| 10 暗黄褐色 (EnL $\gg$ d ₂ 非常に硬い) | |
| 11 橙褐色 (EnL > d ₂ 硬い) | 12 橙褐色 (d ₂ $\gg$ Ⅱ黒) |
| 13 暗黄褐色 (EnL + d ₂) | |

特 徴 調査区北西美沢川の川岸に続く標高6.50m～7mの低い緩斜面に位置する。

Ⅱ黒層を調査中に10数個の石鍾、石鍾と同じ位の大きさの扁平礫、土器片がまとまった状態で検出された。遺構の存在を予想しさらに10cm掘り下げ、東西・南北方向にトレンチを掘って調査した結果、円形の黒色土の落ち込みと壁の立ち上がりが確認でき、竪穴住居跡であることがわかった。遺物は住居廃棄後の凹みに落ち込んだ状態であった。

平面形は不整な楕円形。床面はEn-aローム層中を約10～20cm掘り込んで作られており、竪穴の中央部は平坦であるが、全体的に凹凸が著しく、堅い面、軟らかい面がある。南東部に浅い窪みがあった。壁は全周で急角度で立ち上がる。壁際にはEn-aローム層を主とする非常に硬い土(覆土10～13層)が堆積していた。意識的に壁際に貼り付けた土かもしれない。

柱穴はP-1を除き床面下のEn-aローム層を5～10cm掘り下げた段階で橙褐色土(主としてTa-d₂)の小さな円形の落ち込みとして検出された。P-1は壁面に断面が表われていた。P-5を除き壁から10～20cm内側に位置し、床面に対してほぼ垂直である。

遺物は覆土2・3層から比較的にまとまって出土している。

遺 物 床面から細かく砕けたⅠ群b-4類土器、b-2類土器、石鉢、台石(33)と多量の黒曜石のフレイク、チップが出土した。

覆土からⅠ群b-2類(1・2)、b-3類(3)、b-4類(4～21)、Ⅲ群a類(22)、Ⅳ群a類(23)、Ⅳ群b類(24)、Ⅳ群c類土器と石鉢(25・26)、石鍾(27)、スクレイパー、たたき石、砥石片(32)、石鍾(28～31)等が出土した。

1には組紐の圧痕が施されている。2・3には結束羽状縄文が施されている。4・5は同一個体の破片。細い自縄自巻の原体による縄文が施されている。6の口唇は丸味を帯びた角形で、口縁には、縄端圧痕文が施されている。8には緩絡文が施されている。7・9は比較的細い自縄自巻の原体による縄文が施されている。10は覆土から出土した。口唇断面はやや丸味を帯びた角形で器面には自縄自巻RLとLRの原体による羽状縄文が施されている。口縁にはその原体の縄端を押捺したと思われる圧痕がつけられている。11の器面にも自縄自巻の原体による羽状縄文が施されている。12・13は同一個体の破片。器面には比較的太い自縄自巻LRとRLの原体による羽状縄文とその原体の縄端圧痕が施されている。14は覆土2層から出土したもので、包含層で出土した土器(図Ⅲ-107-38)と接合はしないが同一個体である。15は口唇断面は角形で縄の圧痕が施されている。口縁部には縄端圧痕が巡っている。器面には自縄自巻

II 黒色土層の調査

LR と RL の原体による縄文が羽状に施されている。16は覆土最下部から出土した。焼成が非常によい土器である。口唇断面は角形で、口縁には2条1組の縄線が2列通っている。器面には比較的太い自縄自巻の原体による縄文が羽状に施されている。17・18は底部付近の破片。20・21は自縄自巻の原体による縄文が施されている。23は器内外面が非常に磨減している。内面にはかすかに縄文が施されているのがわかる。器形は円筒形を呈すると思われ器壁は厚い。胎土などから判断し、一応IV群a類とする。24は口唇断面は角形で磨かれている。器面に突縮文が施されている。

25・26は五角形鉄。27は機能部だけを作出したもの。裏面に原石面が残る。いずれも黒曜石製。28～31は長軸方向に打ち欠きのある石鏝。28・29はたたき石として使用した痕跡もある。28が珪岩製、29・30は泥岩、31は緑色泥岩製。32は覆土最下部から出土した。砂岩製。33は砂岩製の床面から出土した台石。火を受けて赤変している。使用面に白色の物質が付着している。

時期 縄文時代早期後葉I群b-4類(東剱路IV式)土器の時期と考えられる。(遠藤香澄)

表Ⅱ-8 H-12 柱穴状小ピット一覽

P. No.	径(m)	深さ(m)	土	P. No.	径(m)	深さ(m)	土
P-1	10	31	1.暗褐色 ($d_2 + d_3 + d_4 > d_1$)	5	8	14	
2	9	22	1.暗褐色 ($d_2 + d_3 + d_4$)	6	7	23	1.茶褐色 ($d_2 > d_1$)
3	9	26	1.暗褐色 ($d_2 > d_1$)	7	7	15	1.暗褐色 (d_2)
4	7	28	1.灰褐色 ($d_2 > d_1$)				

H-14 (図Ⅲ-35～38, 図版Ⅲ-20・21)

位置 c-69-44

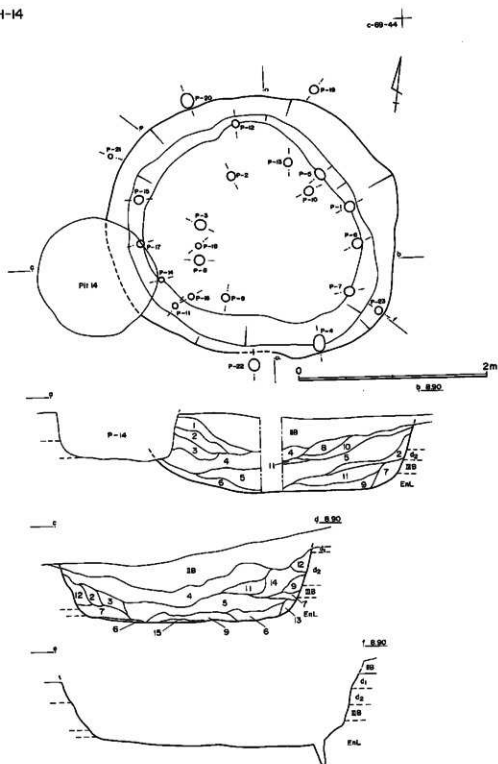
規模 3.07×2.70/2.30×2.05/0.70m

- 土層
- 1 黒褐色 (Ⅱ黒 $\gg d_1 + d_2$ 軟らかい)
 - 2 暗褐色 ($d_2 \gg d_1 + \text{Ⅱ黒}$ 硬い)
 - 3 暗褐色 ($d_2 \gg d_1$ 炭化物が混入する)
 - 4 暗黄褐色 (Ⅱ黒 + $d_2 + \text{EnP}$ 炭化物が混入する 硬い)
 - 5 暗黄褐色 (Ⅲ黒 + $d_2 > \text{EnP}$ 炭化物が混入する)
 - 6 暗黄褐色 ($\text{EnL} \gg d_2 + d_1$)
 - 7 暗褐色 (Ⅲ黒 $\gg \text{EnP}$)
 - 8 暗褐色 (Ⅱ黒 $\gg d_2 \gg \text{EnL}$)
 - 9 黒褐色 ($d_2 + \text{Ⅲ黒} \gg \text{Ⅱ黒}$)
 - 10 黒褐色 (Ⅱ黒 $\gg d_1 + d_2$)
 - 11 暗褐色 (Ⅲ黒 $\gg d_2 > \text{Ⅱ黒}$)
 - 12 暗黄褐色 (EnL)
 - 13 暗褐色 (Ⅲ黒 $\gg d_2 + \text{EnL}$)
 - 14 黒褐色 (Ⅱ黒 炭化物が多量に混入する)

特徴 標高8.50mの緩やかな斜面に位置する。

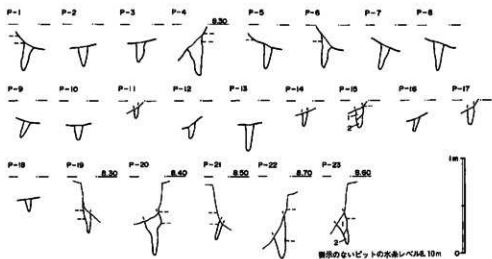
Ta-d₁上面で東剱路IV式土器が多量に出土し同時に黒色土の落ち込みが検出された。遺構の存在を予想しトレンチを掘り調査した結果、壁穴住居跡であること、西側に重複して遺構(P-14)があることがわかった。西側壁の一部を掘り込んでP-14が作られており本遺構のほうが古い。平面形は不整な楕円形である。壁は北側、南側でほぼ垂直に立ち上がるが、西側で

H-14

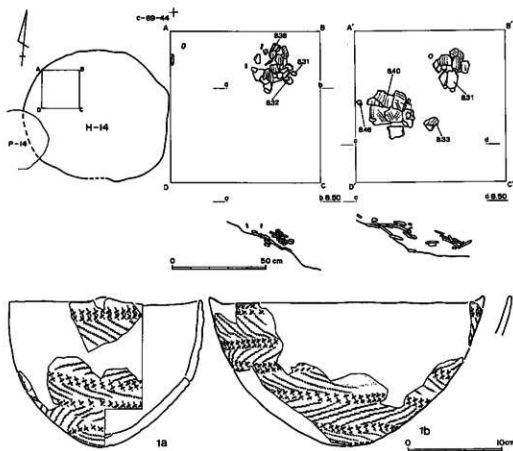


図Ⅲ-35 H-14

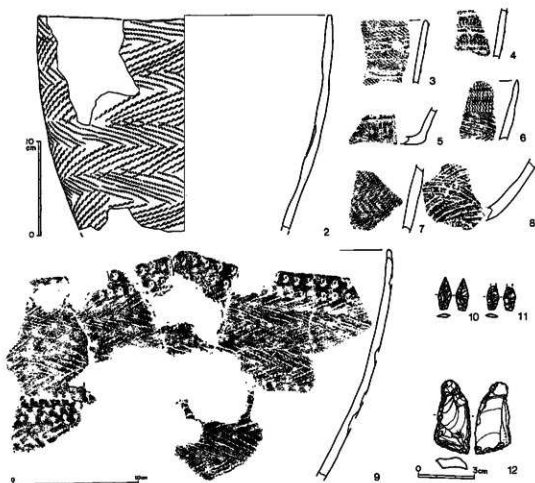
III 第II黒色土層の調査



図Ⅲ-36 H-14の小ピット



図Ⅲ-37 H-14層I 層土器出土状況と出土の土器



図版-38 H-14出土の遺物

は床面が平坦でなく斜めに立ち上がる。床はEn-aローム層を掘り込んで作られ、中央部から東側部分は平坦であるが西側部分は斜めになっている。

柱穴状のピットは23個検出された。床面、壁面を精査し約5cm掘り下げた段階で検出されたもの(P-1~9)、10~15cm以上掘り下げて検出されたものがあり、P-19~23は壁面を20cm以上外側に掘り進んだ段階で検出されたものである。これらの柱穴の覆土にはⅢ黒とEn-aローム層を主とする土が混じっていた。

柱穴はその位置から①~③の3つのグループに分けられそうである。①は壁穴の内側をめぐる一群(P-2・3・18・8・9・10・13)、②は壁隙をめぐる一群(P-1・6・7・11・14・17・15・12・5)、③は外側をめぐる一群(P-19・20・21・22・4・23)である。

①の柱穴は径が10cm、深さはP-8、13が約30cmと比較的深いほかは10~20cmを測るものである。大部分のものは床面に対してほぼ垂直である。P-9は先端がわずかに壁穴の内側に傾斜している。

②の柱穴は壁隙をめぐるもので東壁側にあるP-5、1、6、7は30~40cmの間隔でめぐっ

ている。これらの柱穴の断面は非常にしっかりとしている。①の柱穴よりも深いものが多く床面に対してほぼ垂直の角度のものと、P-1・7のように先端を竪穴の内側に向けたものがある。P-11・16は柱穴とするにはやや疑問が残るものである。

③の柱穴はP-21がやや細いがほかの柱穴はしっかりとして太い。P-19・20は床面に対してほぼ垂直にP-21・22は先端を竪穴の内側に傾けている。

①～③の3つの柱穴群の配置とH-14の平面形が東側で歪な形をしているところから推測し、竪穴の重複が考えられる。竪穴の内側をめぐる①の柱穴群と②の柱穴のうち東側の壁際をめぐるP-5・1・6・7の柱穴を結んでできる円形のプランの住居がH-14より古い時期にあった可能性がある。この古い住居を「建替え」あるいは「建て直し」した際これらの柱穴を埋め新たに壁際と壁の外側に柱穴をめぐらしたと思われる。

住居跡の南西側、住居の廃棄後の窪みに堆積していたⅡ黒の下層と覆土4層上面からI群b-4類土器(図Ⅲ-37-1)が盛みに流れ込む様な状態で出土した(図Ⅲ-37)。床面からの出土遺物は少ない。

遺物 床面からI群b-4類土器と黒曜石のフレイク・チップが出土した。覆土からI群b-3類(3-5)、b-4類(1・2・6-9)、Ⅲ群a類、Ⅳ群b類土器と石鏃(10・11)、つまみ付ナイフ、スクレイパー(12)が出土した。

1は船形を呈するもの。器壁は薄味で口唇断面は角形である。底面は小さく楕円形に近い形の平底である。器面には比較的太い自縄自巻RLとRRの原体による縄文が羽状に施され、その間に自縄自巻RLの原体の縄端圧痕を施している。縄文施文後、器面は整形されている。焼成は良く内面に炭化物が付着する。口縁部付近は茶褐色、胴部から底部にかけては橙褐色である。2は大形の深鉢形土器の口縁部の破片。口唇は薄味で角形である。器壁の内・外面は凹凸が著しい。器面には比較的太い自縄自巻RLとLRの原体による羽状縄文が施されている。胴上半から口縁部は茶褐色を呈する。焼成は良く、胎土に砂粒を含む。3は微隆起縁がつけられており、その上とその間には細いRL原体による斜行縄文と綾格文が施されている。6は口唇断面は尖り気味で、口縁部には短縄文、器面には自縄自巻の原体による縄文が施されている。7は自縄自巻RLとRRの原体により羽状縄文が施されている。8は底部付近の破片。自縄自巻RLとRRの原体で羽状縄文が施されている。9は波状口縁のもの。器内外面は凹凸があり、内面には炭化物が付着している。口唇断面は薄く、丸味を帯びている。口縁部には縄端圧痕文が2条施されている。器面には自縄自巻の原体により羽状縄文が施され、文様の間に縄端圧痕文が施されている。

10・11は黒曜石製の五角形鏃。12は黒曜石製。

床面の土壌を採取しフローテーションした結果、炭化した果実が検出された。北海道開拓記念館の矢野牧夫氏に鑑定を依頼した結果、ヒロハノキハダの果実・種子であることがわかり以下のコメントをいただいた。

ヒロハノキハダについては果実が焼けた状態であり、床面からの出土であれば生活に

利用された可能性がきわめて強い。このような試料は今後、炉などを中心とする位置で多数発見されると思われる。

時期 縄文時代早期後葉、I群b-4類(東剣路IV式)期のものと思われる。(遠藤香澄)

表Ⅲ-9 H-14 柱穴状小ピット一覧

P No.	径(m)	深さ(m)	土 質	P No.	径(m)	深さ(m)	土 質
P-1	11	28	1.暗褐色(黒色>d ₂) 2.暗黄褐色(d ₂) 3.暗褐色(黒色>d ₂)	13	9	28	1.暗黄褐色(黒色>d ₂ +d ₁)
2	9	21	1.暗黄褐色(EnL)	14	5	15	1.暗黄褐色(EnL)
3	11	21	1.暗黄褐色(EnL>黒色+d ₂)	15	8	20	1.暗黄褐色(黒色>d ₂)
4	17	36	1.暗褐色(黒色>d ₂ +EnL)	16	5	14	1.暗褐色(黒色>d ₂)
5	8	24	1.暗褐色(黒色>d ₂ +EnL)	17	7	18	1.暗褐色(黒色>d ₂)
6	11	29	1.暗褐色(黒色>d ₂ +EnL 軟らかい)	18	6	14	
7	9	25	1.暗褐色(黒色>d ₂ +EnL)	19	7	21	1.暗褐色(d ₂ >黒色)
8	11	29	1.暗黄褐色(EnL>黒色)	20	15	40	1.暗黄褐色(d ₂ +黒色)
9	7	18	1.暗褐色(黒色>d ₂)	21	3	18	1.暗褐色(黒色)
10	8	15	1.暗黄褐色(黒色>d ₂)	22	12	32	
11	4	6	1.暗褐色(黒色)	23	9	27	1.暗褐色(d ₂ >黒色) 2.暗褐色(黒色>d ₂)
12	6	147	1.暗褐色(黒色)				

H-15 (図Ⅲ-39~43、図版Ⅲ-22・23)

位置 c-69-61・71

規模 2.76×2.40/2.05×1.59/0.70m

土 層 1 暗褐色(Ⅱ黒>d₁>d₂)

2 黒褐色(Ⅱ黒>d₂+d₁ 下部に炭化物が混入)

3 暗褐色(d₁>d₂>Ⅱ黒 軟らかい)

4 橙褐色(d₂+d₁>EnL) 5 橙褐色(d₂>Ⅲ黒)

6 暗黄褐色(d₂+EnL) 7 橙褐色(d₂>EnL+d₁)

8 黒褐色(Ⅱ黒>d₂+EnL) 9 暗黄褐色(EnL>d₂>d₁)

10 褐色(d₁>Ⅱ黒+d₂ 軟らかい)

11 橙褐色(d₂+d₁) 12 黒褐色(Ⅱ黒>d₁+d₂)

13 暗褐色(Ⅲ黒) 14 橙褐色(d₂>Ⅲ黒 ボロボロする)

15 暗黄褐色(Ⅱ黒+d₂+d₁ 炭化物が非常に多く層をなす。この面に窪みを利用した生活面があったのかもしれない)

16 褐色(d₁>d₂+Ⅱ黒) 17 橙褐色(d₂>EnL)

18 暗褐色(d₂>d₁) 19 黒褐色(Ⅱ黒>d₁ 炭化物が薄く堆積する)

20 茶褐色(Ⅱ黒>d₁>d₂) 21 橙褐色(d₂>d₁+Ⅱ黒)

特 徴 調査区北西側の標高約8.00mの平坦面に位置する。

Ta-c 火山灰を除去後東西に細長い長さ2m程の溝状の落ち込みが検出された。トレンチを掘り調査した結果、平面形が楕円形の竪穴住居跡であった。床面はEn-a ローム層を10cm程掘り込んでつくられている。床面は凹凸があり比較的軟らかい。壁は北西側と南東側で急角度に立ち上がるほかは、開口部に向かってだらだらと立ちあがる。

北東側の床面から本竪穴に伴うと思われる円形のピットが2個、また南西側には深さ5cm程の浅い窪みがあった。P-1は北側でオーバーハングしている。P-2は浅い皿状。床面と

壁を10~20cm掘り下げ、柱穴の確認を行なったが検出されなかった。

覆土15層を中心に炭化物の薄い層が検出された。凹みを利用した生活面があったものと思われる。

Ⅱ群a類土器(図Ⅲ-39、41-1、図Ⅲ-39の網の部分がⅡ-15から出土した)が覆土2層の上面と竪穴廃棄後に堆積したⅡ黒層とに流れ込むような状態で検出された。この土器の破片は周辺の包含層からも多数出土した。

掘り上げ土は、北西側と南側から検出された。掘り上げ土中からはⅠ群土器、上面からはⅡ群a類土器が検出された。

遺物 覆土からⅠ群b-1・2類(2)、b-4類(5-11、14-21、24、26-28)、Ⅱ群a類(1)、Ⅳ群b類土器と石鉄(32)、石錐(33)、つまみ付きナイフ(34、36、37)、スクレイパー、石皿の破片が出土した。

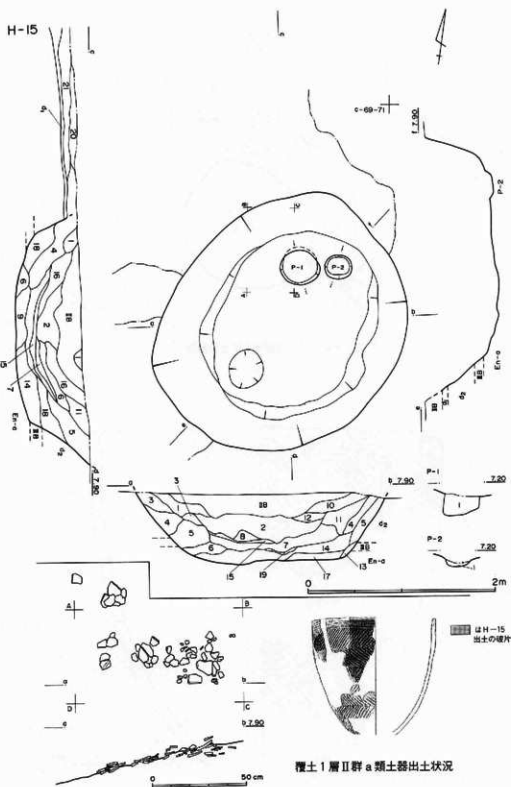
盛土中からはⅠ群b-1・2類(3)、b-3類(4)、b-4類(12、13、22、23、25、29)、Ⅱ群a類土器と石鉄(30、31)、つまみ付きナイフ(35)、スクレイパー(38)が出土した。

1は大形の深鉢形土器。覆土2層上面と周辺の包含層から出土したもので、同一個体と思われる破片が多数あるが接合できなかった。口縁部と底部を図上復元したものである。口縁部には太い縄による横走縄文が4条めぐっている。器面には同じ原体で結束のない羽状縄文が施されている。条の中の間は部分的に磨り消されている。又器面の剥落した部分の下にも縄文がつけられていることから、粘土を重ねて整形していることがわかる。胎土には植物繊維と小砂利が混じる。

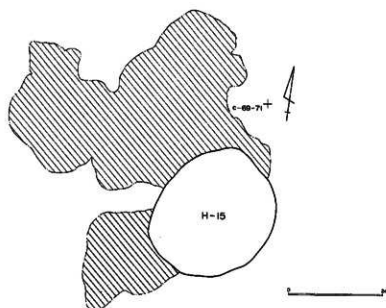
2は口唇断面が角形で外にやや張り出す。口唇には縄の圧痕が施されている。器面には、輪が角形と思われる絡条体圧痕文が施されている。3にも同様な絡条体圧痕文が施されている。

4は隆起帯上とその間に斜行縄文が施されている。5、6は同一個体の破片。薄手で口唇は丸味を帯びている。器面には比較的細い自縄自巻の原体による縄文が羽状に施されている。

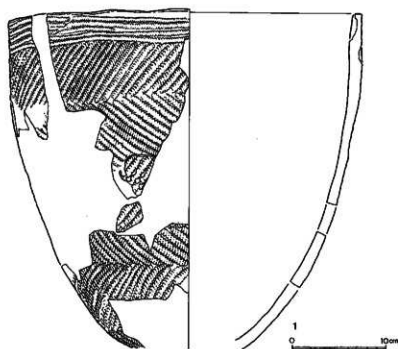
7はやや丸味を帯びた角形の口縁のもの。8、9は底部付近の破片。9-11は自縄自巻の原体による縄文が施されている。12・13は同一個体の破片。口唇はやや丸味を帯びた角形で口縁部には縄端圧痕が施されている。器面には自縄自巻の原体による縄文が施されている。14は波状口縁のもの。縄の圧痕がつけられているが、その際に爪の跡が残されている。15・16は比較的太い自縄自巻の原体による縄文が施されている。17-19はⅠ群b-4類の比較的新しい段階のものと思われる。口唇断面が角形のものが多く、17は口唇に縄の圧痕がつけられている。口縁部には縄端圧痕とRL原体による縄線が3条施されている。器面には自縄自巻の原体による縄文が施されている。18の口縁にも細い2段のRL原体による縄線が施されている。19は口縁部の比較的幅の広い部分に、縄端圧痕が3列施されている。器面に施した自縄自巻RLの原体の圧痕とみられる。20・21・25・26にも縄端の圧痕が施されている。22・23は同一個体の破片。器面は磨減して文様ははっきりとはしないが、口唇には縄の圧痕が施されている。口縁部には縄端圧痕が4・5列施されている。器面には比較的太い原体による縄文が施されてい



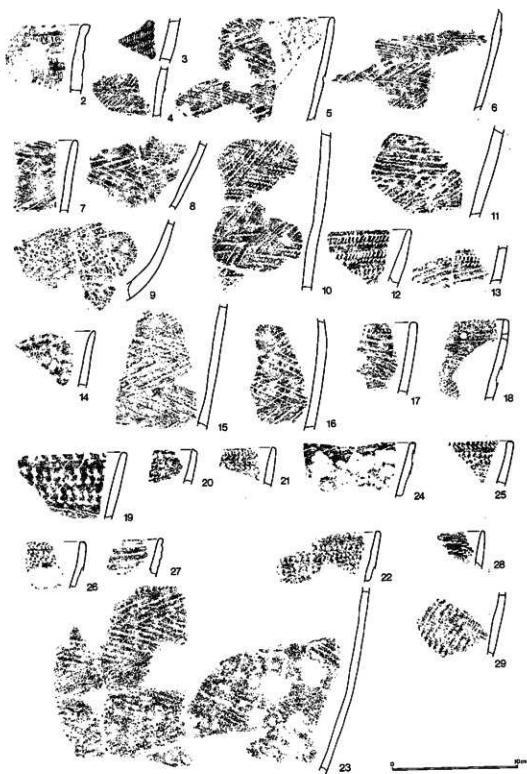
図Ⅲ-39 H-15



図Ⅲ-40 H-15掘り上げ土の範囲

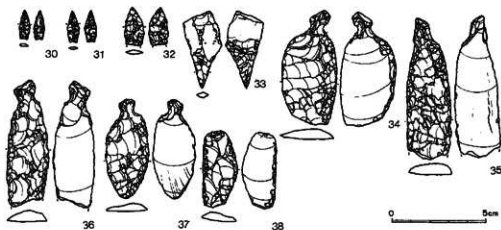


図Ⅲ-41 H-15出土の土層(1)



図三-42 H-15出土の土器(2)

Ⅱ 第Ⅱ黒色土層の調査



図Ⅳ-43 H-15出土の石器

とみられる。24は角形の口唇上に縄端による刺突文が施されている。27には1段のL原体による縄線が施されている。29は比較的大い原体により縄文が施されている。羽状縄文をなすものと思われる。

30・31は五角形鎌。32は木葉形のもの。いずれも黒曜石製。33は機能部のみを作り出している。34は裏面の一側縁に調整痕がある。35～37は片面全面加工のもの。35はつまみ部の作り出しがあまり明瞭でない。いずれも頁岩製。

時 期 縄文時代早期後葉 I群b-4類(東割路Ⅳ式)土器の時期と考えられる。

(遠藤香澄)

H-17 (図-Ⅲ-44・45、図版Ⅲ-24)

位 置 c-69-24

規 模 3.13×2.82/2.46×2.11/0.48m

土 層 1 暗褐色 ($d_2 > \text{II黒}$ ポロポロする)

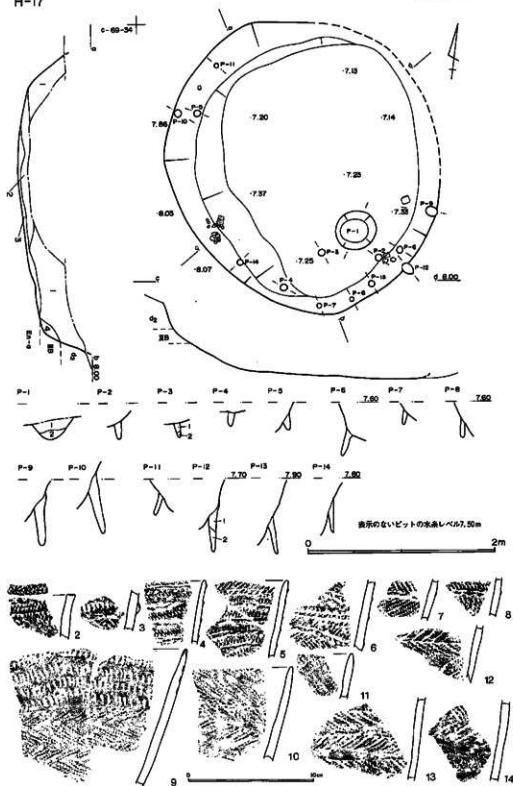
2 暗黄褐色 (Ⅲ黒 + EnL) 3 暗黄褐色 (Ⅲ黒 > EnL)

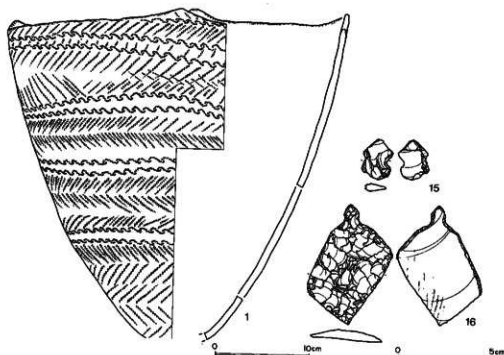
特 徴 調査区北東側の美沢川に臨む標高7.80～8.20mの斜面に位置する。

Ⅱ黒層下部からI群b-4類土器がまとまって斜面に崩れ落ちるような状態で出土した。この時点では遺構の確認はできなかったが、Ta-d₁上面まで掘り下げた段階で円形の落ち込みのあることがわかった。土器は住居廃棄後の窪みに流れ込んだものであった。北東側の斜面下部では風倒木痕により攪乱をうけているため、一部は確認できなかったが、平面形は円形に近い形をしているものと思われる。壁は斜面上側では床面からグラグラと立ち上がっている。下側では風倒木痕による攪乱もあって明瞭にはとらえられなかった。床面は凹凸があり比較的軟かい。

住居跡に伴うと思われるピットは14個でこのうち柱穴は13個(P-2～14)あった。

P-1は南東側壁から約20cm離れた位置にある。平面形は円形で断面形はすり鉢形をしている。





図Ⅱ-45 H-17出土の遺物

柱穴はP-3を除き北西から南東側の斜面上の壁際をめぐるものである。いずれも壁面、床面を精査し約10cm掘り下げた段階で検出された。覆土にはⅡ黒を主とする土が堆積していた。P-9、10、12は径が約10cm、深さ40cm以上を測るしっかりとした柱穴である。P-2-5、7、8、11は径が小さく、深さが15cm内外のものである。床面に対して垂直に近い角度のもの(P-12、14)もあるが、大部分は先端を竪穴の内側に向けている。

遺物は覆土1層中と南西側の壁面に流れ込むような状態でⅠ群b-4類土器が検出された。遺物 床面からフレイク・チップが出土した。覆土からⅠ群b-2類(2~4)、b-3類(5~7)、b-4類(1、8~14)土器、つまみ付ナイフ(16)、加工痕のあるフレイク(15)が出土した。

1は住居跡の窪みに堆積していたⅡ黒層中と覆土1層上面からまとまって出土したものの。四ヶ所に山形隆起部をもつ大形の深鉢形土器。底部は欠損しているが小さな平底と思われる。口唇は薄味で丸味を帯びた角形で、口唇上には細い棒状工具による刻み目が不規則に施されている。口縁部から底部にかけて自縄自巻RLとLRの原体による羽状縄文が施され、その間には2条並列させる綾格文が4段施されている。器面には凹凸があり体上半部は茶褐色、下半部は赤褐色を呈する。内面にも凹凸があり、上半部は黒褐色、下半部は赤褐色で底部付近は再び黒褐色になっている。2の口唇断面はやや外側に張り出す。口唇上には縄の圧痕がつけられている。口縁部には縄端圧痕が施されている。3には断面が三角形の貼付帯がつけられている。

貼付帯上には縄の圧痕が施されている。4は器面に細い原体により結束のない羽状縄文が施されている。この縄文を地文にして貼付帯がつけれ、貼付帯上にも棒状工具で刻み目がつけられている。5は貼付帯に短縄文が施されている。6は口縁部に縄文が、隆起線上からその間には短縄文が施されている。7は微隆起線上からその間に羽状縄文が施されている。8は短縄文が施されている。9の口唇断面は薄味で尖り気味である。口縁部には縄の圧痕を4条めぐらし、裏面にも1条施されている。器面には自縄自巻の原体により羽状縄文が施されている。焼成は良く内面に炭化物が付着している。10、13、14は同一個体の破片。口唇断面はやや丸味を帯びた角形。器面には自縄自巻の原体による羽状縄文と綾格文が施されている。11の口唇は丸味を帯びている。自縄自巻の原体による羽状縄文が施されている。

15は黒曜石。16は折れたつまみ付きナイフの先端部に二次加工を施し小形の石器にしたものであろう。頁岩製。

時 期 縄文時代早期後葉 I 群b-4類(東剣路IV式)土器の時期とみられる。

(遠藤香澄)

表Ⅲ-10 H-17 柱穴状小ビットー寛

P. No.	径(m)	深さ(m)	層 土
P-1	43	39	1.暗褐色 ($d_2 > d_1$) 2.黄褐色
2	7	17	1.暗褐色 ($d_2 > d_1$) 2.黄褐色
3	7	12	1.暗黄褐色 (EnL + EnL)
4	7	14	1.黄褐色 (EnL + d_2)
5	7	14	1.暗褐色 (EnL + d_2)
6	8	25	1.暗褐色 (EnL + d_2)
7	4	15	1.暗褐色 (EnL)
8	5	17	1.暗褐色 (EnL)
9	11	42	1.暗褐色 (EnL)
10	9	35	1.暗褐色 (EnL + d_2)
11	5	22	
12	12	40	1.暗褐色 ($d_2 > d_1$) 2.暗褐色 (EnL + d_2)
13	6	25	1.暗褐色 ($d_2 > d_1$)
14	7	27	

(b) 土壌

P-16 (図Ⅲ-46・47、図版Ⅲ-41)

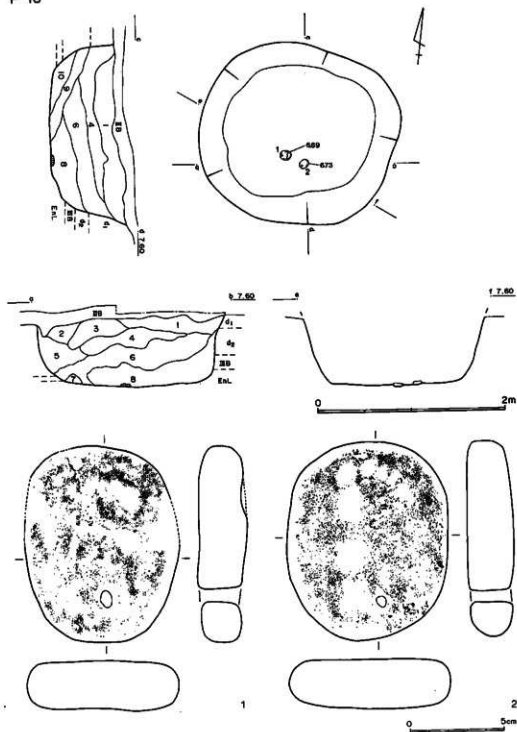
位 置 c-69-22・32

規 模 2.06×1.86/1.57×1.40/0.87m

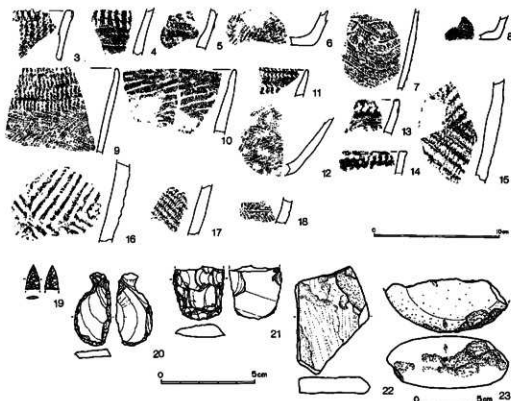
- | | | |
|-----|--|---------------------------------------|
| 土 層 | 1 暗褐色 ($d_2 > d_1$ 軟らかい) | 2 暗褐色 ($d_2 > \text{II黒} > d_1$) |
| | 3 暗黄褐色 ($d_2 > \text{EnL} + \text{II黒}$) | 4 暗褐色 ($d_2 + \text{EnL}$ 硬い) |
| | 5 暗黄褐色 ($\text{EnL} > d_2$ 硬い) | 6 暗黄褐色 ($\text{EnL} + d_2 + d_1$ 硬い) |
| | 7 黄褐色 ($\text{EnL} + d_2$ 硬い) | 8 暗褐色 ($\text{II黒} > d_2$ 硬い) |
| | 9 暗黄褐色 ($\text{EnL} > d_1 + d_2$ 硬い) | |
| | 10 灰褐色 ($d_2 \text{EnL} > \text{II黒}$ 硬い) | |

特 徴 Ta - d_1 上面を調査中に黒色土の円形の小さな落ち込みを確認した。当初は竪穴住居跡を予想し調査していたが、周辺の住居跡の覆土とは堆積状態が異なることがわかった。覆土は埋め戻しの様相を呈しており、覆土1～3層は比較的軟らかく Ta - d_2 を主とする土、4層～10層は En - a ロームを主とする硬い暗黄褐色土が堆積していた。平面形は不整な円形である。底面は En - a ローム層を20cm程掘ってつくられており平坦である。壁は全周ではほぼ垂直に立ち上がる。底面中央、やや南側の位置から幼児の足形のつけられた土版が2個出土した。いずれも足形のついた方を下側にした状態であった。

P-16



図Ⅲ-46 P-16と床面出土の足形付き土版



図Ⅲ-47 H-16出土の遺物

覆土の堆積状態、足形の付いた土版を埋納しているということから判断し墓であると考えられる。

土壌に残存する脂肪酸の分析をするため、土壌内と壁の外側の土壌を10ヵ所採取して分析を依頼した(Ⅲ-5 まとめの項参照)。

遺物 底面から足形付き土版(1・2)、Ⅰ群b-4類土器、フレイク・チップが出土した。覆土からはⅠ群b-2類(3~5)、b-3類(6~8)、b-4類(9~14)土器、覆土の上のⅡ黒曜からⅡ群a類(15・16)、Ⅲ群a類(17)、Ⅳ群b類(18)土器、石鏃(19)、つまみ付ナイフ(20)、スクレイパー(21)、砥石(22)、たたき石(23)が出土した。

1・2は長さ約10cm、幅8.5cm、厚さ2.5cmの楕円形で2のほうが僅かに大きい。1は中央部で割れた状態であった。1には左足、2には右足の足形がつけられている。左足の方がやや圧痕は強いが全体として浅く、拓本をとって初めて小さな5本の指の形がわかった。踵にあたる部分は径8mm程の小さな穴があげられている。足形の大きさから推定して、生まれて一年にも満たない位の幼児のものであろう。

3は口唇断面が角形で、外側角に縄による刻み目がつけられている。口縁部には短縄文がつけられている。4は覆土最下部から出土した。組紐圧痕と短縄文がつけられている。5は扁平な貼付帯がつけられ、その上に縄文が施されている。6は細い縄文が施されている。底部の新

面はやや丸味を帯びる。7は細い貼付帯で曲線的な文様が描かれている。貼付帯は微隆起線となっている。その間には短縄文が施されている。9の口唇断面は尖り気味である。器面には、自縄自巻LRとLLの原体による縄文を羽状に施している。口縁部には2段燃りのRL原体の短縄文を4段施している。I群b-4類の中でも比較的古い段階とみられる。10は比較的器壁が厚い。自縄自巻RRの原体による縄文が施されている。11は口唇が尖り気味で口縁部に自縄自巻の原体とみられる縄端の圧痕がつけられている。12は覆土6層出土のもの。細い自縄自巻の縄文が羽状に施されている。13の口唇断面は角形で口唇上には縄端による刺突文がつけられている。14は口唇が角形で外側に張り出している。口縁部には縄端圧痕がつけられている。15~18は覆土1層の上部から出土した。15は0段多条の太い原体により羽状縄文が施されている。条の中の節は磨り消されている部分がある。16は太い燃りの異なる2本の原体を交互に回転施文することにより、菱形を構成する羽状縄文が施されている。

19は黒曜石製。20は片面周辺加工のもの。メノウ製。23は扁平礫の側縁に使用痕がある。片麻岩製。

時期 覆土から出土した遺物から判断し、縄文時代早期後葉 I群b-4類（東銅路Ⅳ式）土器の時期と考えられる。（遠藤香澄）

(c) その他のピット

P-6（図Ⅲ-48）

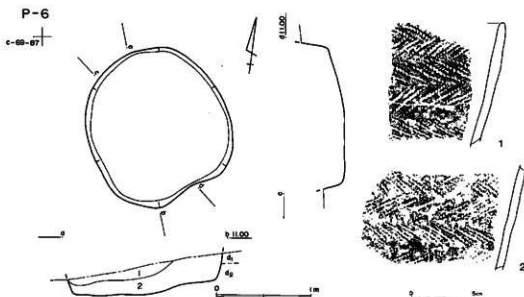
位置 c-69-77

規模 1.55×1.49/1.48×1.40/0.31m

土層 1 褐色（Ⅱ黒>d₁）

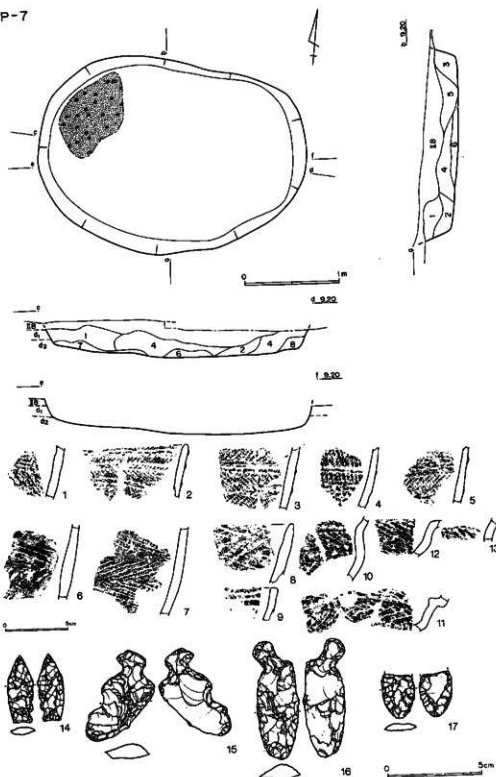
2 暗黄褐色（d₁>d₂）

特徴 遺構集中区の北側、標高10~11mの緩斜面上に位置する。c-69-77区のTa-d₁



図Ⅲ-48 P-6と出土遺物

P-7



図Ⅲ-49 P-7と出土遺物

上面で、径1.5mほどの範囲で Ta-d₁の汚れた部分を確認した。平面形は円形を呈し、底面は Ta-d₂中につくられている。覆土は、Ta-d₁混じりの Ta-d₂で、壁の立ち上がりは明瞭ではない。遺物は、おもに南壁側の覆土上部よりⅠ群 b-4 類の土器破片が出土した。底面から遺物は出土していないが、炭化物の小片がみられた。

遺物 1・2とも覆土2層から出土し、同一個体と思われるⅠ群 b-4 類の土器破片である。自縄自巻の原体による縄文が口唇直下から施文されている。

時期 覆土が早期の遺構にみられる Ta-d₁混じりの Ta-d₂であることと、覆土中から出土した土器が、すべてⅠ群 b-4 類であることから、この時期と思われる。(佐川俊一) P-7 (図Ⅲ-49、図版Ⅲ-44-1)

位置 c-69-64

規模 2.83×2.03/2.61×1.78/0.38m

- | | |
|---|---|
| 土層 1 黒褐色 (d ₁ >>Ⅱ黒) | 2 橙褐色 (d ₁ +d ₂ >>Ⅱ黒) |
| 3 暗褐色 (d ₁ +d ₂ >Ⅲ黒) | 4 橙褐色 (d ₂ >>d ₁ +Ⅱ黒) |
| 5 橙褐色 (d ₂ >>d ₁ >Ⅱ黒) | 6 暗褐色 (Ⅱ黒+d ₁ +d ₂) |
| 7 橙褐色 (d ₂ >>Ⅱ黒) | 8 橙褐色 (d ₁ +d ₂) |

特徴 Ta-d₁上面を調査中に、黒色土の落ち込みを確認した。平面形は楕円形、底面は Ta-d₂を5~10cm掘り込んで作られている。北西から東側にかけての底面は平坦であるが、西側部分は凹凸があり周辺の底面よりも10cm程高くなっているところもある(図の網の部分)。壁は全局でやや急角度で立ち上がる。覆土は非常に硬い。遺物は覆土上部からⅠ群 b-4 類土器が比較的多く出土しているが、細かく砕けたものが多い。

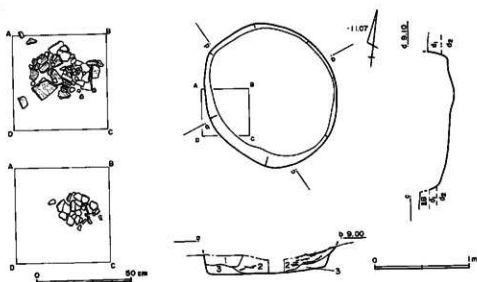
遺物 覆土上部からⅠ群 b-1・2類(1)、b-3類(2~5)、b-4類(7~13)土器と石鏃(14)、つまみ付きナイフ(15・16)、スクレイパー(17)、石斧の細片、砥石片、黒曜石・頁岩のフレイク・チップ、礫が出土している。

1は組紐の圧痕文と短縄文が施されている。2~6は隆起線間と隆起線上に文様が施されている。2には短縄文とその原体を回転施文したと思われる羽状縄文が施されている。3には羽状縄文が施されている。内面に炭化物が付着する。4は短縄文が施されている。5は隆起線が比較的太いもので、その間に縄文が施されている。6・7には細い自縄自巻の原体による縄文が施されている。8には6・7よりも太い自縄自巻の原体で羽状縄文が施されている。口唇の断面はやや丸味を帯びた角形である。9の口唇断面は角形で口縁部には縄線文が施されている。Ⅰ群 b-4 類の比較的新しいものと思われる。10~13は同一個体の破片である。胴部下半から底部にかけての破片と思われるが器形ははっきりと分らない。特殊な器形のものであろう。器面には比較的細い自縄自巻の原体による縄文が施されている。

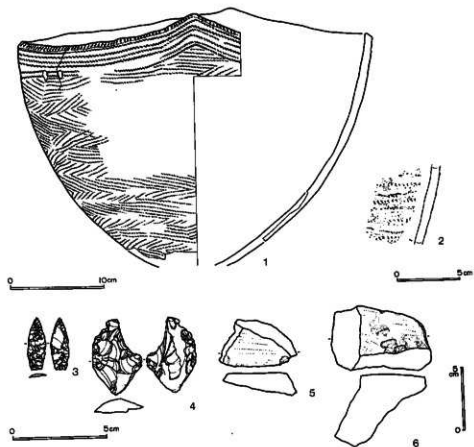
14は黒曜石製の大型の五角形石鏃。15・16は珪岩製。15は片面加工、16は両面加工のもの。いずれも厚味でつまみ部が比較的大きい。17は黒曜石製。

時期 覆土の堆積状態、出土遺物等から判断して縄文時代早期後葉 Ⅰ群 b-4 類(東路Ⅳ式)土器の時期とみられる。(遠藤香澄)

P-9



覆土遺物 (I 群 b-4 類) 出土状況



図Ⅲ-50 P-9と出土遺物

P-9 (図Ⅲ-50、図版Ⅲ-42-4-6)

位置 c-69-54

規模 1.52×1.40/1.40×1.24/0.36m

土層 1 茶褐色 (Ⅱ黒>>d₁+d₂) 2 黒褐色 (Ⅱ黒>>d₁+d₂)

3 橙褐色 (d₂>>Ⅱ黒)

特徴 Ⅱ黒層下部を調査中にⅠ群b-4類土器片が凹みに落ち込む様な状態で検出された。土器の出土状況を観察するためトレンチを掘り調査した結果、楕円形の土坑であることがわかり、土器はその中に落ち込んでいる状態であった。底面は凹凸があり、壁は全局でほぼ垂直に立ち上がる。

遺物：覆土からⅠ群b-3類(2)・b-4類(1)土器、石鏃(3)、加工痕のあるフレイク(4)、砥石(5・6)が出土した。

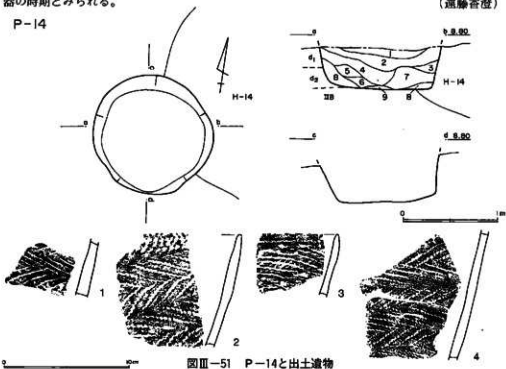
1は覆土1層からまとまって出土した。1層上面の破片が表側、その下位の破片が裏側をむけた状態で検出されたことから、この凹みに流れ込んだものかあるいは棄てられた状態であったものと考えられる。大形の鉢形土器。口縁部に山形隆起部が2ヵ所あるとみられる。口唇断面は切り出し形で器壁は比較的薄い。器面には自縄自巻RLとRRの原体により羽状縄文を施している。口縁部にはRLの原体の縄端圧痕を3段めぐらしている。Ⅰ群b-4類の中でも比較的新しい段階のものとみられる。2は細い貼付帯の間に短縄文が施されている。

3は黒曜石製の五角形鏃。5・6は砂岩製の。

時期 遺物の出土状態から判断して、縄文時代早期後葉 Ⅰ群b-4類(東銅路Ⅳ式)土器の時期とみられる。

(遠藤香澄)

P-14



図Ⅲ-51 P-14と出土遺物

P-14 (図Ⅲ-51、図版Ⅲ-43-1)

位置 c-69-44

規模 1.29×1.25/1.10×1.07/0.43m

- 土層 1 黒色 (Ⅱ黒> d_2 粘性がある) 2 黒褐色 (Ⅱ黒> d_2)
 3 暗褐色 (Ⅱ黒+ d_2) 4 暗褐色 (Ⅱ黒> d_2 +EnL)
 5 茶褐色 (d_1+d_2 >Ⅱ黒) 6 橙褐色 (d_2 >Ⅱ黒)
 7 黄褐色 (d_2 >FnL) 8 橙褐色 (d_2)
 9 暗黄褐色 (EnL> d_2)

特徴 Ta-d₁上面でH-14の黒色土の落ち込みを確認した際、その北西側に隣接して小さな楕円形の黒色土の落ち込みのあることがわかった。H-14よりも新しい遺構であると予想し調査した結果、平面形が円形の土壇であった。底面はⅡ黒上面に掘り込まれており凹凸がある。東側はH-14の壁を掘り込んで作られている。壁の立ち上がりは北側でやや急角度で立ち上がるが、その他ではほぼ垂直である。遺物は覆土1-3層から比較的多く出土した。またH-14の覆土から出土したⅠ群b-4類土器片と接合する破片が何片もあったことから、H-14と構築時期のあまり時間差はないものと思われる。

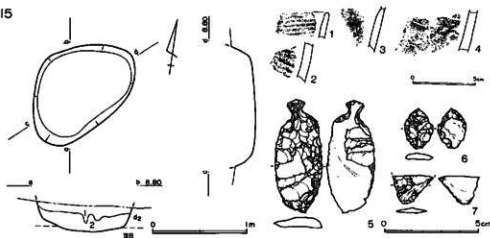
遺物 床面からⅠ群b-4類(1)土器、覆土からⅠ群b-3類、b-4類(2-4)土器と加工痕のあるフレイクが出土している。本遺構から出土したⅠ群b-4類土器片のうち何点かはH-14出土のものと接合した(図Ⅲ-38-2)。H-14の項に記載してある。

1は細い自縄自巻の原体により羽状縄文が施されている。2の口唇断面は丸味を帯びている。器面には太い原体による自縄自巻の縄文が施されている。口縁部には同様の原体を押したと思われる縄端圧痕が施されている。内面には炭化物が付着する。3の口唇断面は薄味で器面には自縄自巻の原体による縄文が施されている。

時期 縄文時代早期後葉 Ⅰ群b-4類(東訓路Ⅳ式)土器の時期と考えられる。

(遠藤香澄)

P-15



図Ⅲ-52 P-15と出土遺物

Ⅲ 第Ⅱ黒色土層の調査

P-15 (図Ⅲ-52、図版Ⅲ-43-2)

位置 c-69-84・94

規模 $1.31 \times 0.90 / 1.11 \times 0.76 / 0.26 \text{m}$

土層 1 黒褐色 (Ⅱ黒 $> d_1 > d_2$) 2 暗茶褐色 (Ⅲ黒 + EnL $> d_2 + d_1$)

特徴 H-13の床面中央に掘りこまれたP-11のすぐ南側に位置する。1.3×0.9mの楕円形を呈し、深さは確認面から26cmである。底面はⅢ黒層中につくられる。壁の立ち上がりはゆるやかである。

H-13調査中、南側に入れたトレンチの断面中に黒色土の落ちこみが認められた。当初はH-13の炉もしくは柱穴があるのでないかと想定したが、調査の結果、覆土の特徴および覆土中よりⅠ群b-4類の土器片が多く出土しているので、H-13とは別の遺構と思われる。

遺物 1はニシンタイプの魚骨回転文が施されたⅠ群b-4類の口縁部である。2はⅠ群b-2類の胴部破片である。3・4は同一個体と思われるⅠ群b-4類の胴部破片である。土器の表面に綾格文がみられる。5は頁岩製のつまみ付ナイフである。6・7は加工痕のあるフレイクで、石材は黒曜石である。

時期 土壌はⅢ群a類の住居跡H-13の下にあり、覆土中から出土した土器はⅠ群b-2類の1点をのぞき、すべてⅠ群b-4類であることから、この時期のものと思われる。

(佐川俊一)

P-19 (図Ⅲ-53、図版Ⅲ-43-3・4)

位置 c-69-50・60

規模 $1.28 \times 1.16 / 1.01 \times 0.90 / 0.19 \text{m}$

土層 1 黒色 (Ⅱ黒)

2 黒褐色 (Ⅱ黒 $> d_1$)

3 暗茶褐色 (Ⅱ黒 + $d_1 + d_2$)

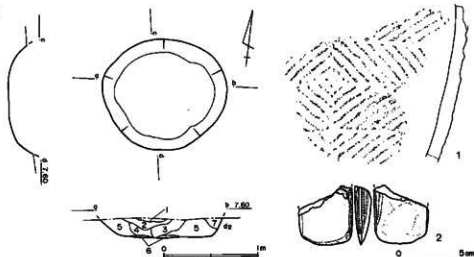
4 黒褐色 (Ⅱ黒 $> d_2$)

5 橙褐色 ($d_2 > d_1$)

6 橙褐色 ($d_2 > \text{Ⅱ黒} + d_1$)

7 橙褐色 ($d_2 > \text{Ⅱ黒} > d_1$)

P-19



図Ⅲ-53 P-19と出土遺物

特 徴 Ta-d₂上面で確認できた。平面形は楕円形である。床面は凹凸があり、断面形は浅い皿状を呈する。遺物は南西側の覆土1・2層からまとまって出土した。

遺 物 覆土1・2層からⅡ群土器(1)、と石斧(2)、頁岩のフレイクが出土した。

1は周辺の包含層からも出土して復元できた(図Ⅲ-112-2)ものと接合はできなかったが、同一個体の破片である。太い縄により菱形を構成する羽状縄文が施されている。条の中の節は部分的に磨り消されている。2は泥岩製の石斧の刃部のみの破片。

時 期 縄文時代早期後葉 Ⅰ群b-4類(東銅路Ⅳ式)土器の時期と思われる。

(遠藤香澄)

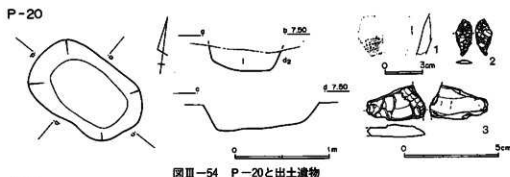
P-20 (図Ⅲ-54)

位 置 c-69-41

規 模 1.23×0.77/0.86×0.52/0.21m

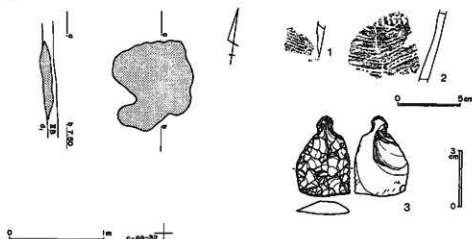
土 層 1 暗褐色(d₁+d₂)

特 徴 Ta-d₂上面を精査中楕円形の落ち込みを確認した。平面形は隅丸の四角形。底面は平坦で軟らかい。壁の立ちあがりはやや急角度で墳口部にむかって広がっている。覆土は硬い。



図Ⅲ-54 P-20と出土遺物

F-1



図Ⅲ-55 F-1と出土遺物

Ⅲ 第Ⅱ黒色土層の調査

遺物 覆土からⅠ群b-4類土器(1)と、石鐮(2)、加工痕のあるフレイク(3)が出土している。1は表面が剝落しているが、縄文が施されていると思われる。2・3は黒曜石製。

時期 縄文時代早期、中茶路式～東鋼路Ⅳ式土器の時期と思われる。(遠藤香澄)

焼土(図Ⅲ-55、図版Ⅲ-45-2～4)

3ヵ所で検出された。いずれも調査区北側の低い平坦面の縄文時代早期後葉の遺構・遺物が集中する地区にある。検出面はⅡ黒層下部からTa-d₁上面である。

F-1はc-69-21・22区にあり、径100cm×80cm程の広がりがあり、赤褐色の焼土が10cm程堆積していた。

F-2(c-69-71区)、F-3(c-69-31区)は規模が小さくいずれも約50×25cmの広がりのもので焼土の堆積も薄い。

遺物はF-1の焼土中からⅠ群b-4類(2)、焼土の上面からⅣ群b類(1)土器とつまみ付ナイフ(3)、黒曜石のフレイク・チップ、F-2、F-3からは黒曜石のフレイクチップが出土している。

1は細い原体による縄文が施されている。2はRの縄を2条並列させて軸にまいた原体による撚糸文と縄端圧痕文が施されている。3は頁岩製の片面全面加工のつまみ付ナイフ。

時期 F-1～3の検出面のレベルから判断し、いずれも縄文時代早期後葉のものと考えられる。(遠藤香澄)

3 縄文時代中期・後期の遺構

中期・後期の遺構には、住居跡とTピット、その他性格不明のピットが存在する。

Tピットについてはb・c-69区からc・d-70区を経て、e-71・72区と連続する様子が観察されているが、住居跡とピットについてはd-70区に性格不明のピット(P-3)が検出されたほか、b・c-69区に集中している。集の部分のb・c-69・70区の遺構についてはII黒層上面の等高線図にその位置を示している。

住居跡については中期前葉のⅢ群a類土器の時期に属するものがH-1・13、後期のⅣ群a類土器の時期とみなされるものがH-16、後期中葉のⅣ群b類土器の時期とみなされるものがH-2・3である。ピットについてはH-13の埋没後に形成されたP-11がⅣ群c類に近い時期のものかとみられる他、明瞭に特定することはできなかった。この時期の遺物量はさほど多くなく、住居跡の部分を中心に分布する傾向がみられる。(大沼忠春)

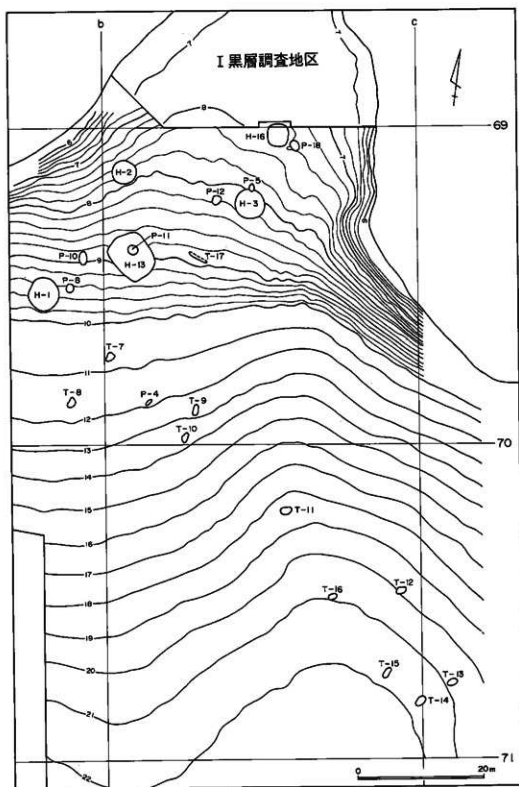
(1) Ⅲ群a類土器の時期の住居跡

H-1 (図Ⅲ-57-61、図版Ⅲ-25-27)

位置	b-69-14・15・24・25	規模	5.13×4.73/4.83×4.44/0.24m
土層	1 黒色(Ⅱ黒 壁の崩落土か)	2 黒褐色(Ⅱ黒>d ₂)	
	3 暗橙褐色(d ₂ >Ⅱ黒)	4 黒褐色(Ⅱ黒>d ₁ +d ₂)	
	5 暗褐色(d ₂ +d ₁ >Ⅱ黒)		
	6 黒褐色(Ⅱ黒>d ₁ +d ₂ この層を中心として7層、8層に平面的に炭化物が広がっている。窪みを利用した生活面があったと思われる)		
	7 茶褐色(Ⅱ黒+d ₁ +d ₂)	8 橙褐色(d ₂ >d ₁ >Ⅱ黒 粘性がある)	
	9 明橙褐色(d ₂ >Ⅱ黒>d ₁)	10 橙褐色(d ₂ d ₁ >Ⅱ黒)	
	11 黒褐色(Ⅱ黒+d ₁ >d ₂)	12 橙褐色(d ₂ >d ₁ +Ⅱ黒)	
	13 明橙褐色(d ₂ >d ₁)	14 暗褐色(Ⅱ黒>d ₁ +d ₂)	
	15 黒褐色(Ⅱ黒>d ₁ 炭化物が平面的に広がっている)		
	16 赤褐色(焼土)	17 茶褐色(Ⅱ黒>d ₁)	
	18 茶褐色(Ⅱ黒>d ₁)	19 暗橙褐色(d ₂ >Ⅱ黒)	

特徴 調査区北西側の標高9.30-10mの緩やかな斜面に位置する。

Ta-c火山灰を除去した段階で円形の黒色土の落ち込みとそれを取り囲むように黄褐色の火山灰が広がっているのが確認できた。トレンチを掘り調査した結果竪穴住居跡であることがわかった。黒色土の窪みの状態や覆土6、7、8層に炭化物が混じる黒色土が層をなして堆積していたことなどから、当初は覆土6、7、8層を床面とする上位の住居跡とそれよりも古い下位の住居跡の重複遺構であると考え調査を行っていたが、上位の住居跡と判断した遺構では斜面下位(南側)の壁の立ち立りが明瞭でないことから積極的に住居跡とすることは避け、住居跡(H-1)の凹みを利用した生活面があったと判断した。また覆土下部から床面にかけて炭化材が検出された。焼失住居跡であろう。



図Ⅲ-56 縄文中・後期の遺構位置図（等高線はⅡ黒上面である）

平面形は不整な楕円形。壁の立ち上がりは南側の斜面上側ではしっかりと立ち上がるが、北側の斜面下部では崩れやすくなっている。床面はTa-d₂層中に掘り込まれ凹凸があり比較的に軟らかい。

住居に伴うと思われる小ピットは7個検出された。このうち柱穴と考えられるものは、5個(P-2・3・4・5・6)である。規模はいずれも径15~20cm、深さは約30cmである。P-2・3・4・5の4個は壁から1.5~2m内側に、互にはほぼ等間隔で四角形を描く位置にある。P-6はP-3とP-5の中間よりやや西側、住居の中央より東側に位置する。P-5とP-6は床面に対してはほぼ垂直、P-2・3・4は先端が住居の外側に傾斜している。P-7、P-8は深さ8cm、15cmの浅いピットで柱穴であるかどうかははっきりしない。

P-1は4本の柱穴(P-2・3・4・5)に囲まれたほぼ中央にある。台石あるいは石皿を置いた跡かと思われるような浅い楕円形のピットである。

炉は住居跡の中央からやや南より、P-1に隣接する位置から検出された。明瞭な掘り込みは認められなかったが、細かい炭化物が混じる赤褐色の焼土が20cmほど堆積していた。焼土中には細かい黒曜石のフレイク・チップが多量に混じっていた。

覆土9層から床面にかけて炭化材が検出された。覆土9層中の炭化材(No.1)は竪穴の中央にむかって斜めに倒れこむような状態であった。南西側の床面から壁際にかけてとP-3周辺には比較的残存状態の良い炭化材が検出されている。径約5cmの丸い材(図Ⅲ-57No.2・3)や細かい小枝状のもの(No.4)ツル状のもの(No.5・6)などがある。住居跡の北側ではあまり検出されなかった。

住居の掘り上げ土は斜面上側部分を除いて、比較的広範囲に住居を取り囲む状態で検出された。掘り上げ土が崩れ落ちて住居跡内に流れ込んだ状況も確認できた。掘り上げ土中からはI群b-4類、Ⅲ群a類土器、石器、掘り上げ土の上位からはⅣ群a類土器、石器が出土した。

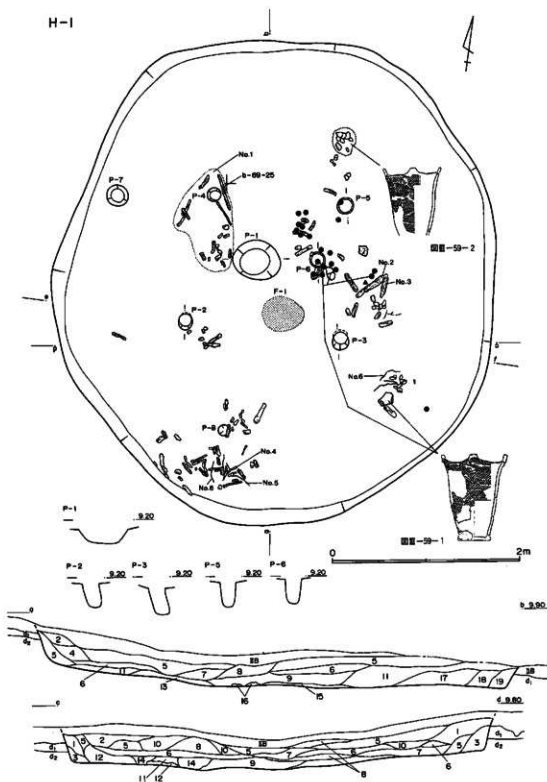
床面からはⅢ群a類土器と石器が出土した。これらの土器片は炉とP-1の周辺にまもっていた。P-3周辺の床面から黒曜石のフレイク・チップが多量に検出された。

遺物 床面からⅢ群a類(1~8)、I群b-3類、b-4類土器、石鏃(34)、たたき石(51)が出土した。覆土からⅢ群a類(9~11・13・14・16・17・19・20・22)、I群b-4類土器(24・25)、石鏃(29・31~33・35~37)、槍先またはナイフ(40)、つまみ付きナイフ(41~43)、スクレイパー(44~48)、石斧片、砥石(52)、加工痕のあるフレイク(49)、土製品(50)、掘り上げ土中からはⅢ群a類(12・15・18・21)、I群b-3類(23)、I群b-4類(26)土器と石鏃(30・38)、砥石(53・54)が、掘り上げ土上面からはⅣ群b類土器(27・28)が出土した。

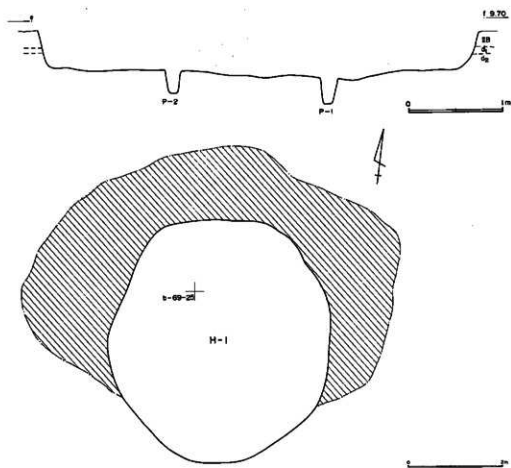
1は口縁部の破片が床面に、底部付近の破片が周辺の掘り上げ土中に広がっていた。底部がやや張り出し、胴部が極わずかに膨らむばかりは口縁部まで直線的に開く器形のもの。四個の弁状突起がつけられている。口縁部に貼付帯をつけ肥厚させている。口唇部には細い棒状工具で不規則に刻み目を施している。器面には0段と1段を繋り合せた結束第一種の“具節”羽状縄

Ⅲ 第Ⅱ黒色土層の調査

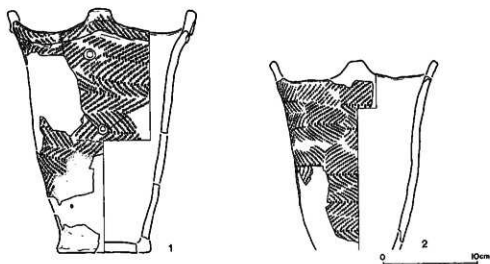
H-1



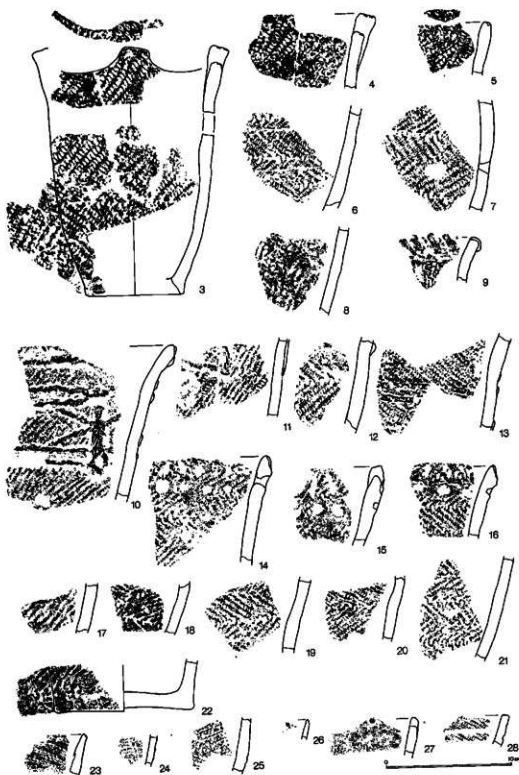
図Ⅲ-57 H-1



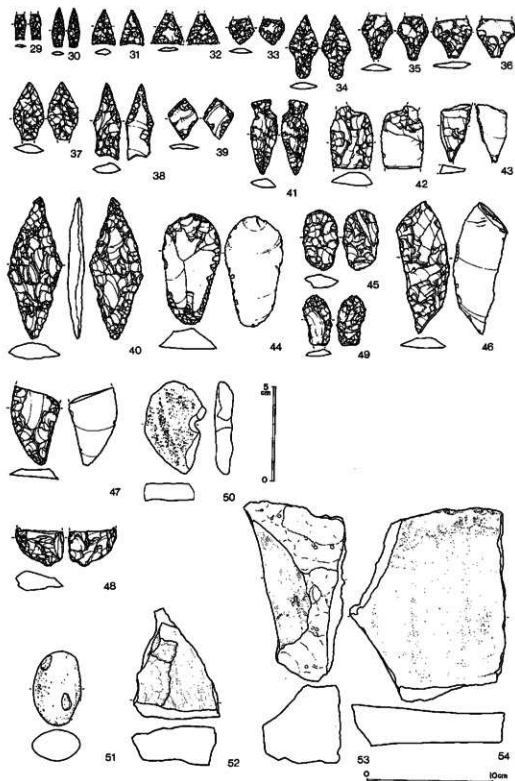
図Ⅲ-58 H-1 エレベーションと掘り上げ土の輪図



図Ⅲ-59 H-1 出土の土層(1)



図Ⅲ-60 H-1 出土の土器(2)



図Ⅲ-61 H-1 出土の石器等

文が施されている $\left\{ \begin{array}{l} \text{結束1} \left\{ \begin{array}{l} \text{L} \left\{ \begin{array}{l} \text{R} \left\{ \begin{array}{l} \text{r} \left\{ \begin{array}{l} \text{r} \end{array} \right\} \end{array} \right\} \end{array} \right\} \end{array} \right\} \end{array} \right\}$ 。底部付近は、縄文施文後に磨かれている。

2は床面と覆土中から破片が出土したもの。四個の弁状突起があると思われる。1と同様胴部がわずかに膨らむ器形のもの器壁は薄い。器面は凹凸があり、結束第一種羽状縄文が施されている。内面には底部付近まで炭化物が付着している。

3・4・5は同一個体の破片。床面と周辺の掘り上げ土中から破片が出土した。底部がやや張り出し胴部がやや膨らむ器形のもの。器壁は厚味があり器面には凹凸がある。四個の弁状突起がつけられている。口唇と突起上には縄端によると思われる刻み目がつけられている。器面には太い原体による結束第1種羽状縄文が施されている。6～7は結束第1種羽状縄文が施されている。7は0段多条の原体である。9～13は貼付帯で文様がつけられている。10は0段多条LRの原体による縄文地に、貼付帯で文様が描かれている。口唇上には貼付帯で波状の文様がつけられていると思われる。貼付帯上には細い縄による刻み目がつけられている。12には結束第一種羽状縄文がつけられている。14～16は同一個体の破片。4個の山形突起があると思われる。器面には太い原体による結束第1種羽状縄文が施されている。厚みのある口唇には太い縄により「ハ」の字状に刻み目を入れその下位に円形の刺突文を横環させている。17～21は胴部の破片。17は0段多条の原体によると思われる縄文が施されている。18～22には結束第1種羽状縄文が施されている。22は太さの異なる縄を結束している。25は自縄自巻の原体による縄文が施されている。

29・30・38は五角形鉢。29・38は基部が挟り込まれている。31は無茎凹基。32は無茎平基のもの。34～37は有茎のもの。38はメノウ製、ほかは黒曜石製である。39は比較的厚味のあるひし形のもの。41は両面加工のもの。先端が磨滅していることから、ドリルとして転用したものと考えられる。42は片面加工のもの。41は頁岩、42は黒曜石製。44はエンドスクレイパー。45～48は剥片の形状をあまり変えることなく刃部を作り出している。49は加工痕のあるフレイク。44・45・48・49は黒曜石、46は流紋岩製。50はⅠ群b～2類土器を利用した円盤形土製品の破片。51は玄武岩製のもの。円礫のところどころに敲打痕がある。

時期 床面の遺物出土状態から判断して、縄文時代中期前葉 Ⅲ群a類(サイベ沢Ⅲ式相当)土器の時期と考えられる。(遠藤香澄)

H-13 (図Ⅲ-62～65、図版Ⅲ-28～31)

位置 c-69-83・84・93・94

規模 5.02×4.13/4.90×4.05/0.30m

土層 1 黒色(Ⅱ黒)

2 暗黄褐色 ($d_1 \gg d_2$) P-11の掘り上げ土上面に炭化物あり)

3 暗黄褐色 ($d_1 > d_2$) 4 暗黄褐色 ($d_1 \gg d_2$)

5 褐色 ($d_1 > \text{Ⅱ黒}$) 6 褐色 ($d_1 \gg \text{Ⅱ黒}$)

- 7 黒褐色 ($\text{II黒} + d_1 > d_2$)
- 8 暗褐色 ($\text{II黒} + d_1 > d_2$ 7層より d_1 少ない)
- 9 橙褐色 (d_2)

特 徴 遺構集中区の中央部よりやや西寄りの標高9 m前後のところに位置する。住居跡の長軸方向は北西-南東で、平面形は隅丸長方形を呈する。住居跡の大きさは 5×4 mと大型である。

Ta-c除去後のII黒層上面で、c-69-94区を中心に径5~6 mのゆるやかな浅い落ち込みがあり、その周囲にはこの住居跡の掘り上げ土と思われる土がみられた。調査は、この落ち込みを中心にトレンチを入れた。この結果落ち込みの中央部は、IV群b-c類期の土壌(P-11)であることがわかり、住居跡よりも先にこの土壌の調査を終了した。その後、トレンチにより住居跡の壁の立ち上がりを見つるべく土層を観察した。南側と西側のセクション面において、II黒層上面でみられた住居跡の掘り上げ土層が存在した。これらの土は、暗黄褐色土でTa-d₁にTa-d₂が少量混じった土である。調査はこれら盛土の手前を壁の立ち上がりとして想定し、浅い落ち込みの中央部からプランを広げていった。しかし調査を進めていくうちに盛土の下からもIII群a類の土器破片が出始めたので、盛土も住居跡のプランの内側に入ることとなり壁の立ち上がりは、この盛土範囲の外周であることがわかった。

住居跡の床は、Ta-d₂上面につくられしきではない。壁の立ち上がりは全周とも急角度であるが、深さは確認面から30cmと浅い。炉はない。柱穴は5個確認した。住居跡の長軸線上にP-1・5、長軸線上から南西側にP-2~4がある。このほかにも床面上で柱穴の疑いのある黒色土の落ち込みを検出し半載して調査した。しかしこれらの覆土の状態は、柱穴と認めたものに比べると不明瞭であるためこれらを除外した。

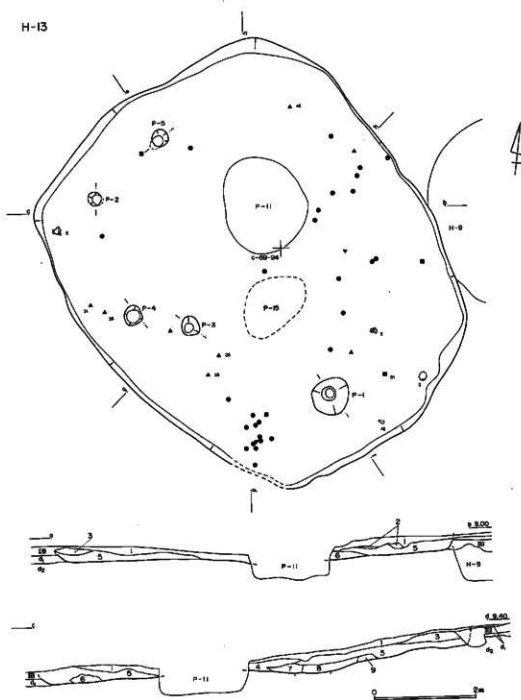
覆土の堆積状態は、床の上部にTa-d₁混じりのII黒層が、その上にII黒層がある。覆土2・3層(盛土)は、H-13の掘り上げ土がH-13廃棄後の凹みに流れこんだものであろうか。

住居跡の覆土中からは、土器が333点、石器等が6,654点(うちフレイク・チップ6,576点)出土した。土器は、I群b-4類が155点、III群a類が124点、ほかにI群b-1・2類、I群b-3類、IV群b類が少量出土している。これら遺物の出土状況の特徴としては、IV群b類土器がP-11の南西部のII黒層中から、III群a類土器はP-11の東側に集中する傾向がみられた。図III-63-1のIII群a類の復元土器はここから出土したものである。石器等では、P-11の北東部からフレイク・チップが集中して出土した。

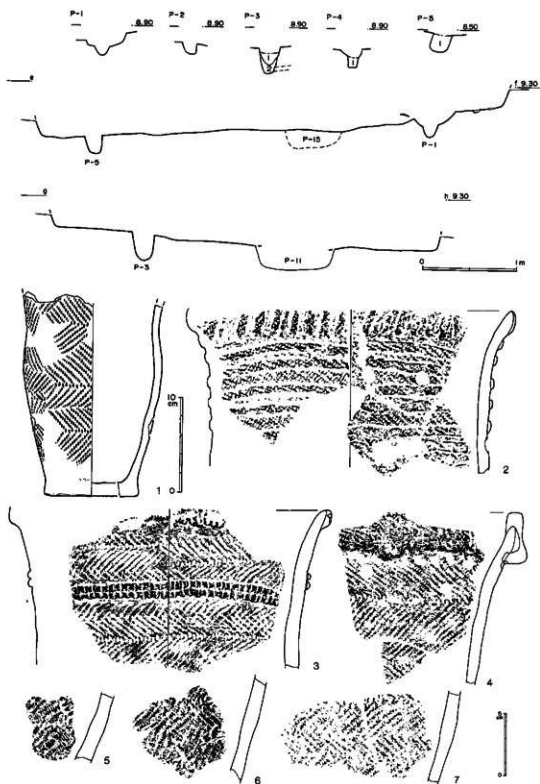
床面からは、土器が96点(III群a類61点、I群b-4類35点)、石器等が24,759点(うちフレイク・チップが24,729点)出土した。床面からはIII群a類の口縁部の破片(図III-63-2~4)が図III-62に示した位置より出土した。ほかにIII群a類の胴部の破片が住居跡の南側で集中して出土した。

石器等では、有茎の石鏃が床面南西部に、ほかに石斧と石鋸が出土している。また、床面の南部では、フレイク・チップが集中して出土した箇所がある。

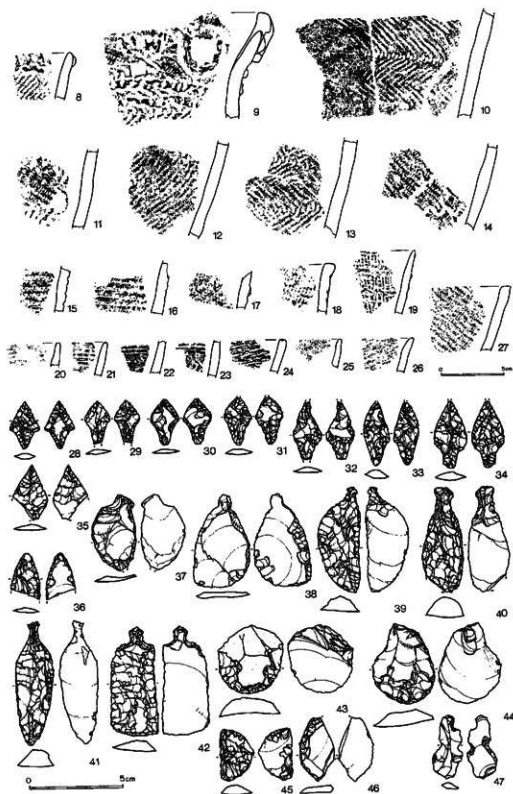
H-13



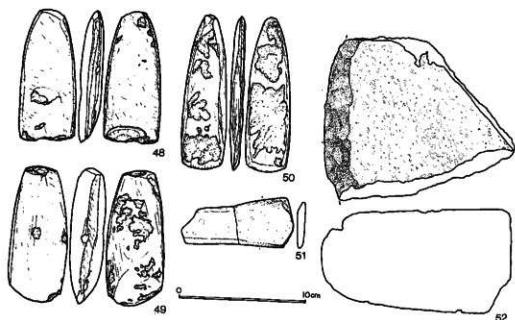
図Ⅲ-62 H-13



図Ⅲ-63 H-13と出土土器



図Ⅲ-64 H-13出土の遺物(1)



図Ⅲ-65 H-13出土の遺物(2)

遺物 1は覆土から出土したⅢ群a類の復元土器である。現存する大きさは、高さ21cm、胴部の径15cm、底部径10cmである。器形は胴部中位に最大のふくらみをもち、底部にかけて少しずつ細くなる。底部の立ち上がりは外へ張り出す。文様は体部全体に節の大きな結束羽状縄文がつけられている。

2～7は、床面から出土したⅢ群a類の土器である。2は推定復元したもので口径は約26cmを測る深鉢である。口縁部に幅の広い貼付帯をめぐらし、その上に幅5mmほどの細い貼付帯を等間隔で斜めにつけている。太い貼付帯からは、RLの斜行縄文を施し、その上に太い貼付帯上につけたものと同じ細い貼付帯を、横位に2本一組で数段にわたりつけている。これら細い貼付帯上には、器面と同じ縄文を施文する。土器の内面はよくみがかれ平滑である。接合した土器には、ここから約30m離れたc-69-32区出土のものもある。

3も推定復元したもので、口径は約26cmを測る。器面には結束羽状縄文が施されている。口縁上部に2本一組の貼付を、そこから3.5cm下のところにも2本一組の貼付を横位にめぐらす。2つの貼付帯上には、結条体で縦位に刻み目をつけ、さらに口縁上部の幅の太い貼付帯上には、端部圧痕もしくは刺突を施している。

4は小さな瘤状突起をもつⅢ群a類の口縁部である。口縁上部に肥厚帯があり、その上にRLの斜行縄文を施し、さらに結条体による縦位の深い圧痕をつけている。肥厚帯の直下には円形の棒状工具による刺突文がめぐる。

5～7は、床面出土のⅢ群a類土器の胴部片で、結束羽状縄文がつけられている。

8～27は、覆土出土の土器である。8～14はⅢ群a類土器である。体部の文様は結束羽状縄

文が多いが、14には綾結文がみられる。15-18は、Ⅰ群b-1・2類土器である。15-17には組紐圧痕文が、18には結条体圧痕文が施されている。19はⅠ群b-3類土器、20-26はⅠ群b-4類土器である。20-23は同一個体と思われ、ニシンタイプの魚骨回転文がつけられている。27はⅣ群b類土器である。

28-36は石鏝である。31・33・35・36は床面から、その他は覆土から出土したものである。石鏝は、一次剥離面を両面に残し、頭部が正三角形に近く基部の幅が太い有茎鏝が多い。石材は、28が頁岩のほかはすべて黒曜石である。

37-42はつまみ付ナイフである。床面から出土したのは38のみである。つまみ付ナイフの多くは片面加工であるが、薄いもの(37・38・42)と厚いもの(39・40・41)の2種類ある。形態には一側縁が少しふくらみもう一方は大きくふくらむもの(37・38・39)、左右対称で長さの長いもの(40・41)、長方形のもの(42)がある。石材は、37・39・41が珪岩、ほかは頁岩である。

43・44はラウンド・スクレイパーである。45・46は、側縁および端部に刃部のあるスクレイパーである。石材は43・45が黒曜石、46は頁岩である。47は黒曜石製の加工痕のあるフレイクである。48-50は石斧である。48は床面出土のもので、刃部を欠損している。49は厚みのある片刃の石斧である。50は薄身の片刃石斧である。石材は48・49が緑色泥岩、50が頁岩である。

51は砂岩製の石鋸である。床および覆土から約1.7m離れて出土した破片が接合したものである。52は覆土上部から出土した安山岩製の石皿片である。

時期 床面から出土した土器から、Ⅲ群a類の時期と思われる。

(佐川俊一)

(2) Ⅳ群a類土器の時期の住居跡

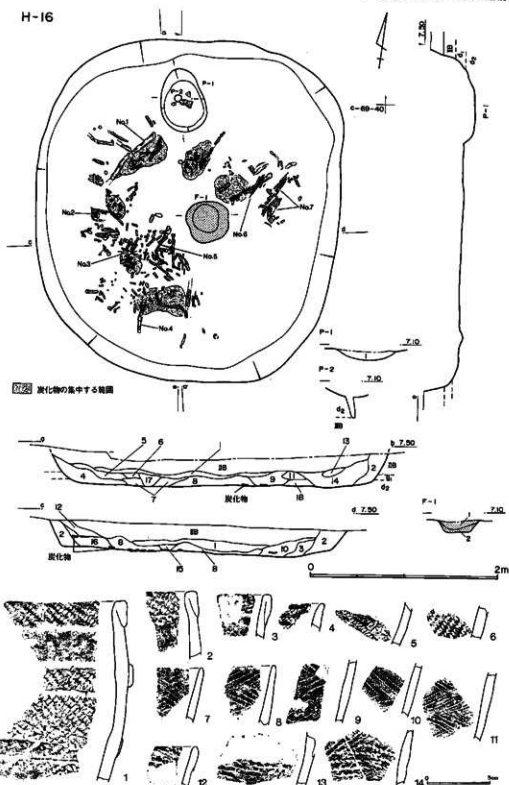
H-16 (図Ⅲ-66・67、図版Ⅲ-32・33)

位置 c-68-49、c-69-40 規模 3.60×3.23/3.26×2.95/0.29m

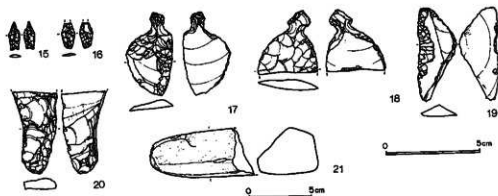
- 土層
- 1 黒褐色(Ⅱ黒 軟らかい 炭化物が多量に混入する)
 - 2 茶褐色(Ⅱ黒>d₁ 軟らかい壁際に推積する)
 - 3 茶褐色(Ⅱ黒+d₁)
 - 4 黒褐色(Ⅱ黒>>d₁+d₂)
 - 5 暗褐色(d₂+d₁>>Ⅱ黒)
 - 6 橙褐色(d₁>>d₂+Ⅱ黒)
 - 7 暗褐色(d₁>>d₂+Ⅱ黒)
 - 8 暗黄褐色(d₂+d₁>Ⅱ黒 この層の下部に炭化物が平面的に広がる)
 - 9 暗橙褐色(d₂>>Ⅱ黒 炭化物が層をなす)
 - 10 橙褐色(d₂ 炭化物、赤褐色の焼土が混入する)
 - 11 橙褐色(d₁+d₂)
 - 12 茶褐色(Ⅱ黒>>d₁+d₂ 炭化物が混入する)
 - 13 橙褐色(d₂)
 - 14 橙褐色(d₂+Ⅱ黒)
 - 15 暗褐色土(d₁+d₂+Ⅱ黒)
 - 16 黒褐色(d₁+d₂+Ⅱ黒)
 - 17 黒褐色(Ⅱ黒>>d₁ 軟らかい)
 - 18 茶褐色(Ⅱ黒>d₁+d₂ 炭化物が混入する)

特徴 調査区北側の低い河岸段丘に続く標高7.50mの平坦地に位置する。

H-16



図三-66 H-16と出土の土器



図Ⅲ-67 H-16出土の遺物

Ta-c 火山灰を除去した段階で黒色土の円形の落ち込みとそれを環状に取り囲む Ta-d₁、d₂ 混じりの黄褐色土が堆積しているのが確認できた。竪穴住居跡であると予想しトレンチを掘り、窪みに堆積していたⅡ黒層を取り除いた段階で多量の炭化物が検出され、焼失住居跡であることがわかった。

掘り込み面はⅡ黒層上面である。平面形は隅丸四角形で、壁は全周でほぼ急角度に立ち上がる。

床面は Ta-d₂ を約 10cm 掘り込んでおり平坦で軟らかである。

炭化物は覆土 1 層と覆土 12 層下部、床面の壁から約 50cm 内側の面に広がっていた。特に南西側と北東側の床面に多い。比較的に太い材は、折り重なって竪穴の中心に向かって倒れ込む様な状態のものが多い。腐植して床面に貼りついた状態のものもある。図Ⅲ-66、No. 1 は径 6cm、長さ 6cm 以上ある太い丸材。残存状態は良好である。柱材かもしれない。No. 2 は残存状態はあまり良くないが、板状のものとみなされる。No. 3 は短い蔓状のもの。No. 4 は径 4cm、長さ 30cm の丸い材。No. 5 は径 5cm、長さ 30cm 程の節のある材で、いずれも残存状態は良い。No. 6・7 は径 5mm 程の茅材で 20～30 本が束になった状態で床面に広がっていた。この周辺には、赤褐色の焼土が堆積していた。これらの炭化材は樹種同定を行なうため、204ヶ所からサンプルを採取し現在鑑定を依頼中である。

炉 (F-1) は住居のほぼ中央にあった。掘り込みは浅いが炭化物が混じる暗赤褐色の焼土が堆積していた。

住居跡に伴うと思われるピットは、北側の壁に近い位置から検出された (P-1)。平面形は楕円形で断面形は浅い皿状を呈している。このピットの底面を精査中に細い杭状のピット (P-2) が検出された。径 4cm、深さ 30cm 程のものであるが、住居に伴うものかどうかは、はっきりとしない。

掘り上げ土は遺構の北側部分の未調査地区に広がっていることが土層断面から確認できた。

床面の炭化材を取り除いた段階で、Ⅳ群 a 類土器片 (図Ⅲ-66-1・2) が出土した。

遺物 床面からⅣ群 a 類 (1-3)、Ⅰ群 b-2 類、b-4 類土器と石鏃、つまみ付きナイフ、加工痕のあるフレイクが出土した。

覆土から、Ⅰ群 b-2 類 (4・5)、b-4 類 (7-14) 土器と石鏃 (15・16)、つまみ付きナイフ (17・18)、スクレイパー (19・20)、石斧片、たたき石、すり石 (21)、加工痕のあるフレイクが出土した。

1・2 は床面と P-1 の覆土最上部から出土した。口縁がやや内傾する深鉢形土器。口唇の断面は角形で指でなでられたように平滑である。貼付帯は幅広く平坦で、貼付帯上から器面にかけて太い RL 原体による斜行縄文が施されている。口縁部の貼付帯のすぐ下は無文である。器面は凹凸があり、胎土には小砂利を含む。炭化物が付着する。3 は平滑な貼付帯上に LR 原体による縄文がつけられている。4 は組紐の圧痕文がつけられている。5・6 は縄文が施されている胴部破片。7-9 は同一個体の破片。口唇断面は薄味で器面には白縄自巻の原体によると思われる羽状縄文と綾格文が施されている。10-13 は白縄自巻 RL と LR で羽状縄文が施されている。12・13 は同一個体の破片。14 は比較的太い白縄自巻 RL と RR の原体による縄文が施されている。

15・16 は黒曜石製の五角形鏃、17・18 は片面加工で裏面の一侧縁に調整痕が残る。19・20 は剥片の形状をほとんど変えることなく刃部をつくりだしているもの。21 は狭いすり面がある。

時期 掘り込み面、床面の土器の出土状況から判断し縄文時代後期前葉 Ⅳ群 a 類 (余市式) 土器の時期と考えられる。 (遠藤善澄)

(3) Ⅳ群 b 類土器の時期の住居跡

H-2 (図Ⅲ-68・69、図版Ⅲ-34・35)

位置 c-69-81・91

規模 $3.75 \times 3.70 / 3.65 \times 3.55 / 0.22 \text{ m}$

土層 1 黒褐色 (Ⅱ黒 + d₂)

2 茶褐色 (Ⅱ黒 + d₂ > d₁)

3 黒褐色 (Ⅱ黒 + d₁)

4 茶褐色 (Ⅱ黒 + d₂)

5 黒色 (Ⅱ黒)

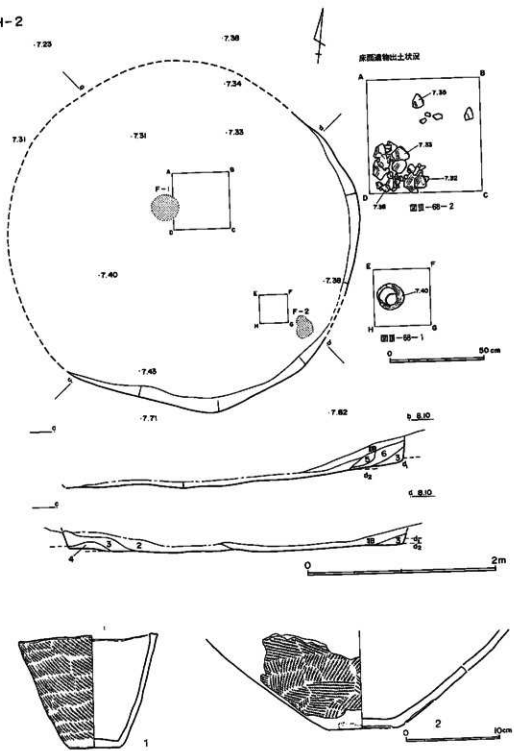
特徴 調査区北西部の標高 7.30~7.80 m の川岸の低い緩斜面に位置する。

Ta-c 火山灰を除去した段階で黒色土の円形の落ち込みが確認できた。トレンチを掘り調査した結果、壁は南側でほぼ垂直に立ち上がることがわかったが、北西~北側では明瞭な立ち上がりは確認できなかった。平面形は円形かと思われる。床面は Ta-d₂ を 10 cm 程掘り込んで作られている。全体的に凹凸があり北側部分は敷らかいが南側部分は比較的しっかりと踏みかためられたような状態であった。覆土は黒色土 (Ⅱ黒) を主とする土で非常に薄く堆積している。

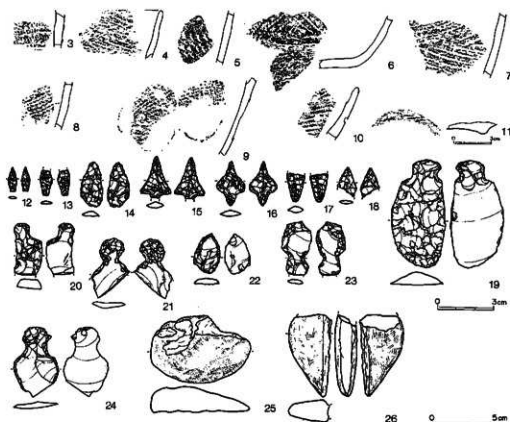
焼土は 2 ヶ所検出された (F-1・2)。炉跡と思われる F-1 は住居跡のほぼ中央に位置する。明瞭な掘り込みは認められなかったが、炭化物混じりの焼土が浅く堆積していた。焼土中にはフレイク・チップが多量に混入していた。炉のほぼ真上からⅣ群 b 類土器 (図Ⅲ-68-2) の破片が多量に出土している。炉を使用し廃棄した後に土器片を置いたような状態で

Ⅲ 第Ⅱ黒色土層の調査

H-2



図Ⅲ-68 H-2と床面出土の土器



図Ⅲ-69 H-2出土の遺物

ある。またF-2の北西側の床面からは、ほぼ完形のⅣ群b類小形鉢形土器（図Ⅲ-68-1）が出土した。この土器は輪横度の位置で割れた底部を床面、残りの口縁部から胴部を意図的にその上にかぶせる様にして置かれた状態で検出された。柱穴は検出されなかった。

遺物 床面からⅣ群b類（1・2）、Ⅰ群b-4類（7）土器と石鏃（16）、スクレイパー（24）が出土した。

覆土上部からはⅣ群c類（9-11）土器、石鏃（12-15・17・18）、つまみ付きナイフ（19-21）、たたき石（25）、すり切り残片（26）、覆土中～下部からⅠ群b-3類（3）、b-4類（4-6）、Ⅳ群b類土器とスクレイパー（22・23）が出土した。

1は小形の鉢形土器。口唇断面は角形で内面から口唇にかけては丁寧に磨かれ黒光りしているところがある。器面は凹凸があり0段多条の原体によるRL斜行縄文が施されている。底部は縄文施文後軽く磨かれている。焼成は良く胎土に砂粒が混じる。

2は大形の深鉢形土器の底部。同一個体と思われる破片がF-1の周辺から多数出土したが細かく砕けているものが多く接合できなかった。口径に比べて底部が小さい器形のもの。器面には0段多条のLRとRLの原体により羽状縄文が底部近くまで施されている。内面にはヘラ削りの痕跡が残る。焼成は良く胎土に細い砂粒を含む。

3は隆起線間とその上に短縄文が施されている。4は薄手の土器で比較的太い自縄自巻RLとRRの原体による縄文が施されている。6は平底のもの。8は1段Rの縄を2本並列して2軸に巻いた撚糸文が施されている。9-11は同一個体の破片。覆土の最上部から出土したものである。非常に細かい破片が300点程あったが接合しなかった。底部はあげ底で、器壁は薄く器面には羽状縄文が施されている。

12・13は五角形礫。12は長さが13mmの非常に小さいもの。14は木葉形。15は有茎平基、16は有茎凸基のもの。17は先端部のみのもので比較的厚みがある。いずれも黒曜石製。19は覆土最上部から出土した。片面全面加工のもので頁岩製。22は剥片の形状をほとんど変えることなく刃部を作り出している。23・24は挟り込みのある刃部をもつ。25は扁平礫のところで使用痕がある。蛇紋岩製。26は挟り切り痕のある頁岩の礫。研磨して整形した痕跡がある。

時期 床面の遺物出土状況から判断して縄文後期中葉 IV群b類(エリモB式)土器の時期と考えられる。(遠藤香澄)

H-3 (図Ⅲ-70-75、図版Ⅲ-36-39)

位置 c-69-42・43・52・53 規模 3.28×3.14/2.95×2.87/0.56m

土層 1 茶褐色(Ⅱ黒>>d₂ 隣接するP-5の掘り上げ土)

2 茶褐色(d₁+d₂>>Ⅱ黒)

3 黒褐色(Ⅱ黒 壁際の(Ⅱ黒)の崩落土と思われる)

4 茶褐色(Ⅱ黒>>d₂ 軟らかい)

5 黒褐色(Ⅱ黒>d₂)

6 明茶褐色(Ⅱ黒+d₁+d₂ 非常に硬い)

7 橙褐色(d₂>>d₁)

8 橙褐色(d₂>>d₁>Ⅱ黒)

9 暗褐色(Ⅱ黒>>d₂)

10 橙褐色(d₂>>Ⅱ黒)

11 暗褐色(d₂>>Ⅱ黒+d₁)

12 暗褐色(Ⅱ黒+d₂)

13 黒褐色(Ⅱ黒>>d₂)

14 暗褐色(d₂>>Ⅱ黒)

15 黒褐色(Ⅱ黒+d₂)

16 暗褐色(Ⅱ黒+d₂)

17 黒褐色(Ⅱ黒>>d₂)

18 茶褐色(Ⅱ黒+d₂+d₁)

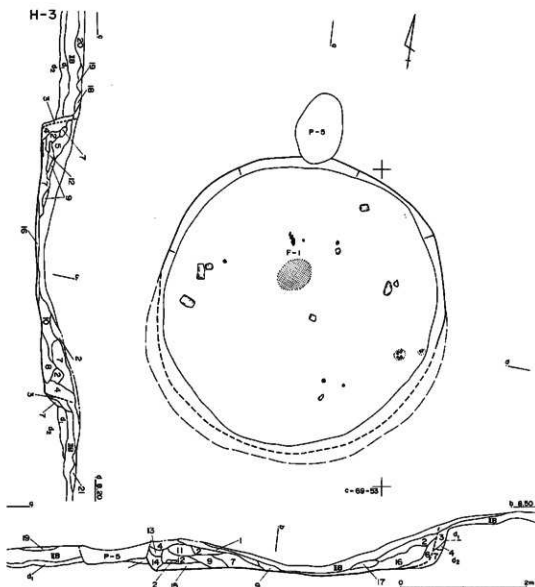
19 橙褐色(d₂>Ⅱ黒>d₁)

20 橙褐色(d₂+Ⅱ黒)

21 黒褐色(Ⅱ黒+d₁)

特徴 標高8m-8.20mの平坦面に位置する。

重機によりTa-c火山灰を30cm程除去した段階で、断面形がすり鉢形を呈する非常に大きな円形の落ち込みが確認できた。Ⅱ黒の上面に残っていた約10cmの火山灰を人力で除去すると、窪みの内側と外側にTa-d₁、Ta-d₂が混在する火山灰が広範囲に広がっていた(図の網の部分)。竪穴住居跡の存在を予想し、東西、南北にトレンチを掘り調査した結果、径が3m-3.30mの大形の円形の竪穴住居跡であることがわかった。周辺のTa-d₁、d₂混りの火山灰はその掘り上げ土である。掘り上げ土は北東側の一部を除き、竪穴を取り囲む範囲から検出された。北側の壁の一部はP-5の構築により一部壊されている。床は南側ではEn-aロー

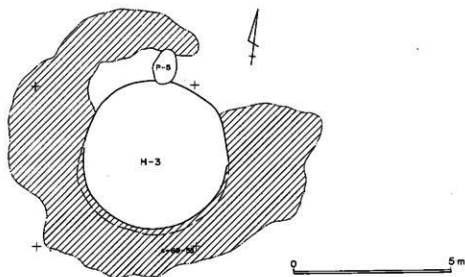


図Ⅲ-70 H-3

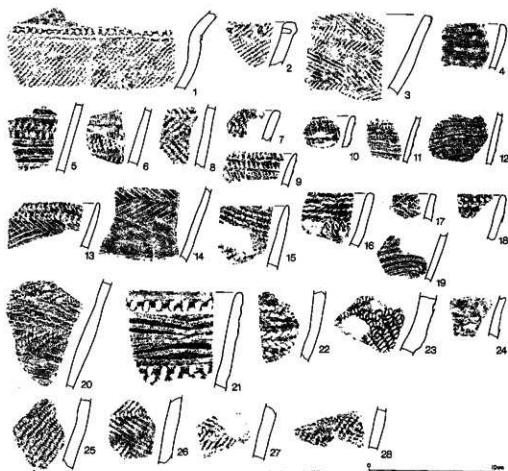
ムが混じる。Ⅲ黒上面に、北側ではTa-d₂中に掘り込んで作られている。北側の床面は軟らかく、平坦である。竪穴の中央部はやや凹んでいる。

南北側のトレンチで壁の立ち上がり进行调查していく過程で、竪穴が作られた当初の壁と考えられる面（セクション図の破線部）と、その当初の壁が崩落した後の壁と考えられる面（セクション図の実線部）とが明瞭に区別できた。また北側の壁際からは崩れ落ちる壁の土留めをするかのような状態で台石の破片（図Ⅲ-75-81の網の部分）が検出された。

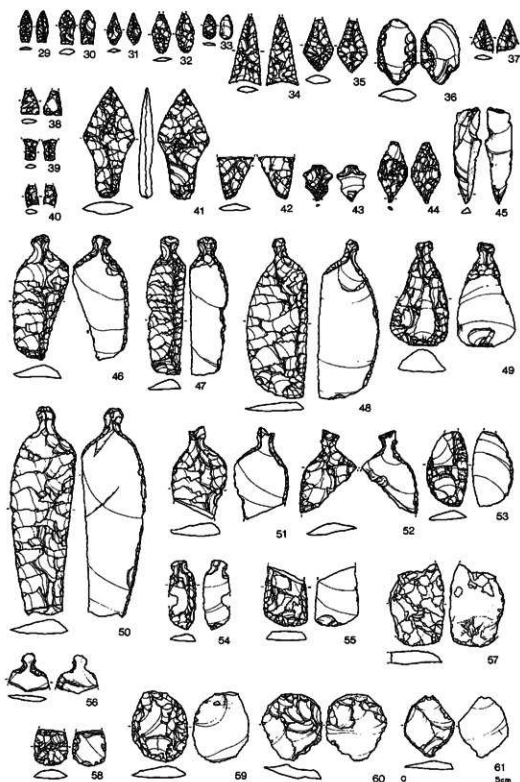
覆土の堆積は浅く、北側には本遺構より新しいP-5の掘り上げ土（図Ⅲ-70 a-bセクション覆土1層）が堆積していた。



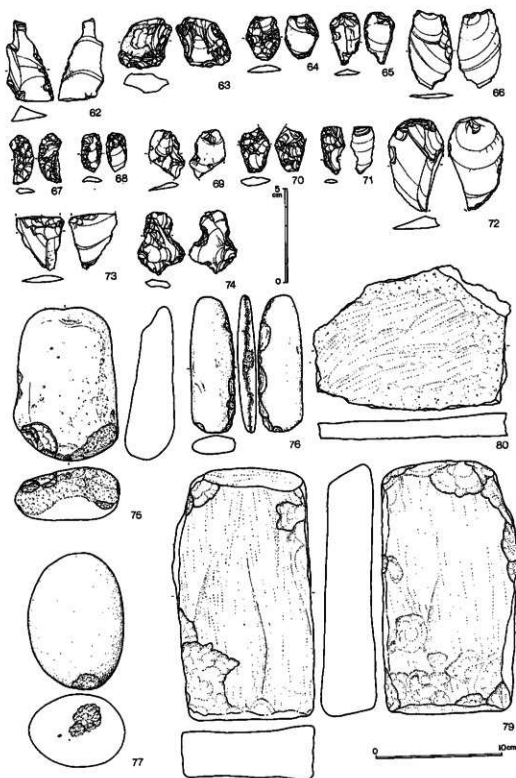
図Ⅲ-71 H-3掘り上げ土の範囲



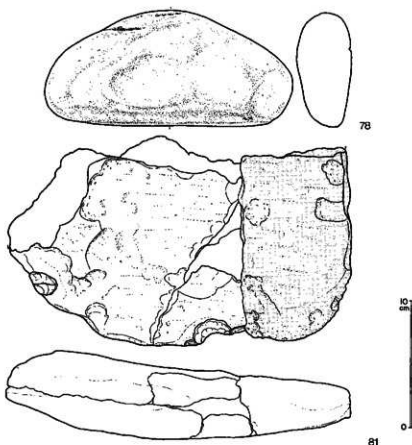
図Ⅲ-72 H-3出土の土器



図版-73 H-3出土の石録(1)



図Ⅲ-74 H-3出土の石器(2)



図三-75 H-3出土の石鏃(3)

浅い掘り込みのある炉(F-1)が竪穴の中央からやや北側寄りの位置から検出された。焼土中には細かい炭化材が混じっていた。また床面のところどころから炭化材が検出された。柱穴の有無を調査するため床面を約30cm掘り下げたが柱穴、付属するビット等は検出されなかった。

遺物は床面から出土したものは少量で、Ⅳ群b類、Ⅰ群b-4類土器が5点、石器24点である。大部分は覆土上部と壁際、周辺の掘り上げ土中から出土したものである。覆土、掘り上げ土中の土器はいずれもⅠ群b-4類土器が8割近くを占め、次いでⅢ群a類、Ⅰ群b-3類が多い。石器は少ない。

遺物 床面からⅣ群b類(1・2)、Ⅰ群b-4類(19)、Ⅲ群a類(24)土器、石鏃の未製品(36)、とスクレイパー(59・60)、たたき石(75~77)、すり石(78)、砥石(79)、台石片(81)、が出土した。

覆土からはⅣ群b類(3・4)、Ⅰ群b-2類(6・7)、b-3類(10~12)、b-4類(13~15・17・19・20)、Ⅱ群a類(21・23)、Ⅲ群a類(27)土器と石鏃(35・38・40)、石槍またはナイフ(42)、つまみ付ナイフ(48~51・53・54)、スクレイパー、砥石、台石片(80)。

R フレイク (63-65) が出土した。

掘り上げ土中からはⅠ群 b-1・2 類 (5・8)、b-3 類 (9)、b-4 類 (16・18)、Ⅱ類 a 類 (22)、Ⅲ群 a 類 (25・26・28) 土器と、石鏃 (29-34・37・39)、石槍またはナイフ (41)、石錐 (43-45)、つまみ付ナイフ (46・47・52・53・55・57)、スクレイパー (58・62・63)、砥石、台石、R フレイク (67-74) が出土している。

1 は床面と覆土最下部から出土した破片が接合したものである。頸部でくびれる深鉢形土器と思われる。器面には LR 原体による斜行縄文が施されている。頸部のくびれ部には 2 本の横走沈線を描き、その間に工具で刻み目を施している。周りの包含層から出土した土器 (図Ⅲ-115-27) と同一個体と思われる。2 は口唇が角形で磨かれている。器面には 0 段多条の原体による斜行縄文が施され、口縁部には突瘤文が施されている。3 は器面に 0 段の条数が異なる 2 本の原体により羽状縄文が施されている。口唇の断面は角形で口縁には細い棒状工具で沈線と刻み目が施されている。波状口縁を呈すると思われる。4 は無文の口縁部。5 は組紐の圧痕文と短縄文、6 は角形軸に燃糸を巻いた結条体圧痕文と短縄文が施されている。7 は結束羽状縄文が施されている。9-12 は隆起線上にかけて短縄文が施されている。9・10 は比較的大い隆起線があり、11・12 は微隆起線となっている。13 は波状口縁のもの、口唇の断面は尖り気味で口縁に縄端圧痕が施されている。器面には細い原体による燃糸文が施されている。14 は羽状に燃糸が施されている。16-18 は口唇断面が角形を呈する。15 は口唇断面は尖り気味で厚手である。器面には太い自縄自巻の原体による羽状縄文が施されている。16 は口縁部に縄端文が 4 条めぐっている。その下位には短縄文が施されている。器面には 2 条並列する燃糸文が施されている。口唇にも縄の圧痕がつけられている。18 には口縁に縄端圧痕文がつけられている。19 には細い同じ撚りの縄を 2 本並列させた燃糸文が羽状に施されている。20 は比較的大い自縄自巻 LR と LL の原体による縄文が施されている。21 は H-3 の周辺の包含層から出土した土器 (図Ⅲ-110-1) と接合しないが同一個体の破片。22 は太い原体による縄文が施されている。23 は太い原体による縄文が施されている。節が磨り消されているところがある。25-28 には結束羽状縄文が施されている。27 は 1 段の縄を結束した原体によるもので、無節の羽状縄文となっている。28 は 0 段と 1 段の縄を撚り合わせた原体によるもの。異節の羽状縄文が施されている。

29-32 は五角形鏃。33 は木葉形、34 は無茎凹基、35 は尖基。36 は石鏃の未製品。37 は基部が欠損しているが、五角形鏃と思われる。39 は基部の破片。30 はメノウ製、36 は頁岩製。その他は黒曜石製である。41 は有茎のもの。43・45 は素材である剥片の形状をほとんど変えず、機能部を作りだしている。44 はつまみ部と機能部の区分が不明瞭である。46-48、50-52 は裏面の側縁に調整痕を持つ。49 は片面周辺加工のもので打点と反対側に小さなつまみ部が作り出されている。54・55 は片面全面加工のもの。57 は風化している。49・56 が黒曜石製でほかは頁岩製。58 は片面加工の寛状のもの。59・60 はほぼ円形に近い形をした片面加工のもの。一部に円礫の面が残る。61・62 は剥片の形状をほとんど変えることなく刃部を作り出している。58 は珪

岩は黒曜石。63～74は加工痕のあるフレイクである。覆土、盛土中から多数出土している。黒曜石、頁岩のものがある。74は挟り込みがあるもの。75は扁平礫の一端と側縁の一部に使用痕がある。片麻岩製。76は緑色泥岩製で細長い扁平礫の一端に使用痕がある。77は球形礫の両端に使用痕がある。78は扁平礫の一端縁に比較的幅の狭いすり面がある。77・78は安山岩。79は砂岩製で両面に使用面がある。81は床面から出土した部分と、北西壁に土留めをするように貼り付けられていた部分（図の網の部分）が接合したものである。安山岩製。

時期 床面の遺物出土状態から判断して縄文時代後期中葉、IV群b類（エリモB式）土器の時期と考えられる。

（遠藤香澄）

(4) 縄文時代中期・後期の性格不明のピット

P-3（図Ⅲ-76）

位置 d-70-03・13・14

規模 0.85×0.60/0.77×0.54/0.10m

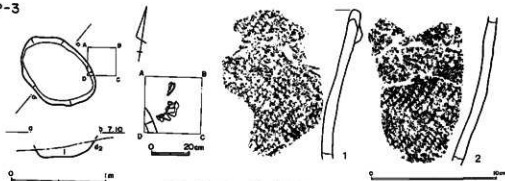
土層 1 暗褐色（Ⅱ黒+d₂）

特徴 美沢川に面した入江状の地形の水際で検出された。Ⅱ黒層の包含層調査を終えた段階でTa-d₁の上面に楕円形のプランが認められ調査を行った。土壌覆土と思われる部分からⅢ群a類の土器片が流れ込んだ状態で出土している。

時期 覆土の遺物から縄文時代中期と考えられる。

（皆川洋一）

P-3



図Ⅲ-76 P-3と出土遺物

P-4（図Ⅲ-77）

位置 c-69-88

規模 1.4×0.42/0.72×0.31/0.30m

土層 1 褐色（d₁+d₂）

2 褐色（d₁>Ⅱ黒）

特徴 遺構集中区の北側、標高約12mの緩斜面上に位置する。Ⅱ黒層上面で小さな楕円形の浅い凹みにトレンチを入れて確認した。平面形は楕円形を呈し土壌の底面はTa-d₂を掘りこんでつくられている。掘りこみ面はⅡ黒層中である。覆土の1層と2層は分層したがその境は明瞭ではない。P-4の北東および北西側には、掘り上げ土と思われる土が厚さ4cm程で堆積していた。（図の網の部分）

遺物 1は、覆土1層中より出土したIV群b類（手稲式）の胴部片である。

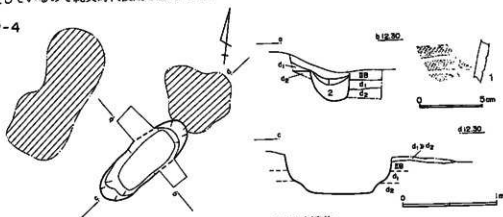
時期 Ⅱ黒層上面で、落ちこみと掘り上げ土を確認したこと、覆土中から後期の土器が出

Ⅲ 第Ⅱ黒色土層の調査

土しているので縄文時代後期と思われる。

(佐川俊一)

P-4



図Ⅲ-77 P-4と出土遺物

P-5 (図Ⅲ-78、図版Ⅲ-44-4)

位置 c-69-51・52

規模 1.10×0.73/0.94×0.58/0.31m

土層 1 黒褐色(Ⅱ黒>d₁ 粘性あり) 2 黒褐色(Ⅱ黒>d₁)

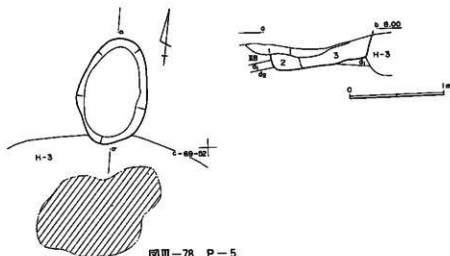
3 茶褐色(Ⅱ黒>d₂)

特徴 Ta-c 火山灰を除去後、小さな浅い黒色土の落ち込みを確認した。北東部分はH-3の壁を一部掘り込んで作られている。平面形は不整な楕円形。本遺構のほうが新しい。床は凹凸があり軟らかい。壁は全周でやや急角度に立ち上がる。覆土はⅡ黒を主とする土が堆積していた。またⅡ黒に Ta-d₁、Ta-d₂がわずかに混入する掘り上げ土(図の網の部分)がH-3の廃棄後の窪みに堆積していた。遺物は出土していない。

時期 縄文時代後期中葉～後葉の時期と思われる。

(遠藤香澄)

P-5



図Ⅲ-78 P-5

P-8 (図Ⅲ-79、図版Ⅲ-44-2)

位置 b-69-04・05・14・15

規模 1.40×1.06/0.70×0.83/0.34m

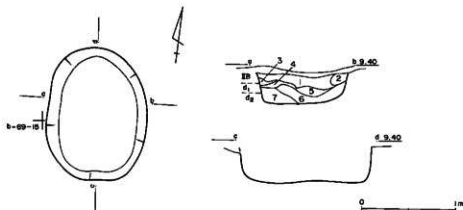
- 土 層 1 茶褐色 (Ⅱ黒 + $d_1 + d_2$) 2 黒色 (Ⅱ黒 壁の崩落土と思われる)
- 3 橙褐色 (d_2) 4 黒褐色 (Ⅱ黒 $> d_1$)
- 5 橙褐色 ($d_2 > d_1 + \text{Ⅱ黒}$) 6 橙褐色 ($d_2 > \text{Ⅱ黒} + d_1$)
- 7 暗橙褐色 (Ⅱ黒 + d_2)

特 徴 Ta-c 火山灰を除去した段階で黒色土の浅い落ち込みを確認した。掘り込み面はⅡ黒中部と思われる。平面形は楕円形。底面はやや凹凸があり、壁は全周でほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。

時 期 縄文時代中期以降のものと思われる。

(遠藤香澄)

P-8



図Ⅲ-79 P-8

P-10 (図Ⅲ-80)

位 置 b-69-63・64

規 模 1.90×1.39/1.63×1.10/0.26m

- 土 層 1 黒色 (Ⅱ黒 粘性がある) 2 橙褐色 ($d_1 + d_2 > \text{Ⅱ黒}$)
- 3 橙褐色 ($d_2 > \text{Ⅱ黒}$) 4 茶褐色 ($d_1 + d_2 > \text{Ⅱ黒}$)
- 5 暗橙色 ($d_1 + d_2 > \text{Ⅱ黒}$) 6 茶褐色 ($d_1 + d_2 > \text{Ⅱ黒}$)
- 7 橙褐色 (d_2)

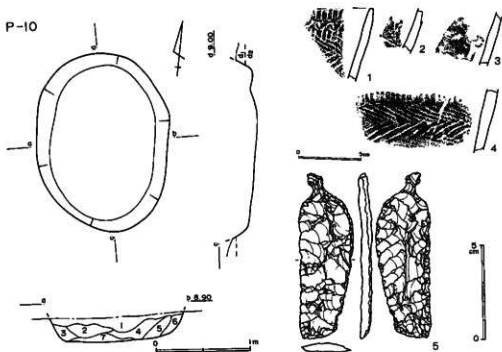
特 徴 Ta- d_1 上面で黒色土の落ち込みを確認した。平面形は楕円形で床面は軟らかく凹凸がある。壁は全周でやや急角度に立ち上がる。覆土2-7層は比較的硬く Ta- d_2 が多く混じる土が堆積していた。遺物は土壌の北西側覆土2・7層付近からまとまって出土した。

遺 物 覆土からI群b-4類土器(1-4)とつまみ付きナイフ(5)、礫が出土した。1の口唇断面は角形で口縁部に短縄文とそれに加えて綾格文を施している。器面には自縄自巻LRとRLの原体による縄文が施されている。東銅路Ⅳ式の比較的古い段階のものかと思われる。2には太い原体による綾格文が施されている。4は器面に自縄自巻の原体による縄文と短縄文が施されている。5は頁岩製の両面加工のつまみ付ナイフ。

時 期 縄文時代中期以降と思われる。

(遠藤香澄)

Ⅲ 第Ⅱ黒色土層の調査



図Ⅲ-80 P-10と出土遺物

P-11 (図Ⅲ-81、図版Ⅲ-44-5)

位置 c-69-83・84・93・94

規模 1.60×1.55/1.55×1.35/0.38m

土層 1 褐色 (Ⅱ黒 + $d_1 > d_2$)

2 褐色 (Ⅱ黒 + d_1)

3 橙褐色 (d_2)

4 暗黄褐色 ($EnL > d_2$)

5 明茶褐色 ($d_1 > d_2$)

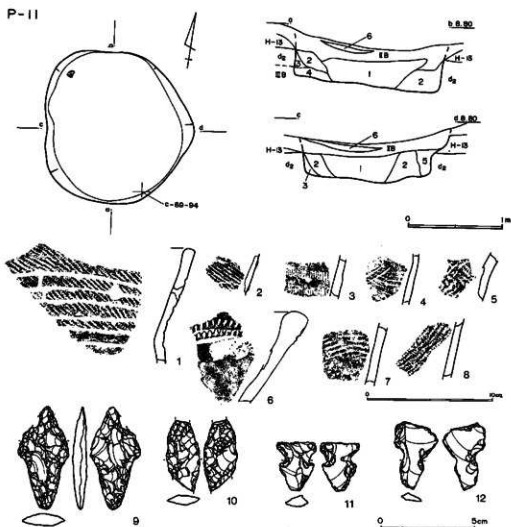
6 橙褐色 (d_2 P-11掘り上げ土の二次堆積)

特徴 遺構集中区の中央部、標高約 8 m の平坦面に位置し、中期の住居跡 H-13 を切っている。径 1.5~1.6 m の円形を呈し、深さは 38 cm と深い。壁の立ち上がりは直立気味で、底面はⅢ黒層上面を掘りこんでつくられている。

Ta-c 除去後のⅡ黒層上面で c-69-94 区を中心とした径 5~6 m の範囲で浅い落ちこみが確認された。落ちこみは全体にゆるやかな傾斜をなすものであるが、このピットの部分では顕著であった。この範囲内を当初住居跡を想定してトレンチを入れ調査したところ、この中央の深い落ちこみが単独の土壌であることが判明した。

遺物は、覆土 1 層の上部 (Ⅱ黒層中) から多く出土した。北西壁の底面近くからはⅣ群 b 類土器の口縁部破片 (1) が出土した。また、覆土 1 層の下部から底面にかけては、少量の炭化材とフレイクが出土している。

遺物 1 はⅣ群 b 類 (手稲式) の突起部の破片である。なお、この土器破片は、b-69-04・05・15 区、c-69-96 区の包含層出土のものと接合した (図Ⅲ-115-22)。これらの調査区と P-11 との距離は、5~15 m と比較的近い位置にある。6・7 はⅣ群 b 類 (ホッケマ式) の



図Ⅲ-81 P-11と出土遺物

口縁部と胴部の破片である。2はⅠ群b-3類、3はⅠ群b-2類、4はⅠ群b-4類の早期、5はⅢ群a類の中期の土器の胴部破片である。8はⅣ群c類土器である。

9は黒曜石製の石槍である。10は頁岩製のつまみ付ナイフ、つまみ部と先端部を欠損している。11・12はいずれも黒曜石のフレイクで、両側縁にえぐりが入っている。

時 期 ビットの時期は、底面近くから出土した土器(7)から縄文時代後期中葉のホッケマ式以後、覆土上部からⅣ群c類土器が出土していることからその間のものと思われる。

(佐川俊一)

P-12 (図Ⅲ-82)

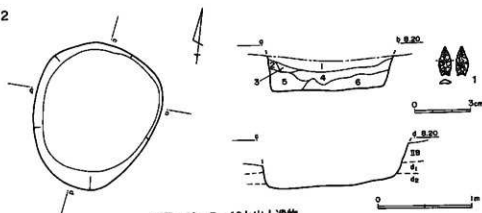
位 置 c-69-62

規 模 1.54×1.30/1.30×1.18/0.39m

土 層 1 黒色(Ⅱ黒>>d₂ 粘性がある) 2 暗橙褐色(d₂>>d₁+Ⅱ黒)

3 黒褐色(Ⅱ黒>>d₂+d₁) 4 黒褐色(Ⅱ黒>d₁)

P-12



図Ⅲ-82 P-12と出土遺物

- 5 茶褐色 (Ⅱ黒>d₂+d₁) 6 茶褐色 (Ⅱ黒>d₁+d₂)

特徴 H-3の掘り上げ土を調査するために掘ったトレンチの土層断面で確認できた。平面形は不整な円形。床面はTa-d₂層を約5cm掘り込んで作られている。壁は全周ではほぼ急角度に立ち上り、壕口部で広がっている。覆土はⅡ黒を主とする土が堆積していた。

遺物 覆土からⅠ群b-2類、b-3類、b-4類、Ⅳ群b類土器と石鏃(1)が出土した。1は黒曜石製の五角形鏃。

時期 掘り込み面がⅡ黒層上面であると推定でき、遺物の出土状態、覆土の状態などから判断し縄文時代後期頃のものである可能性がある。(遠藤香澄)

P-18 (図Ⅲ-83)

位置 c-69-30・40

規模 1.58×1.37/0.88×0.83/0.49m

土層 1 茶褐色 (d₁+d₂>Ⅱ黒)

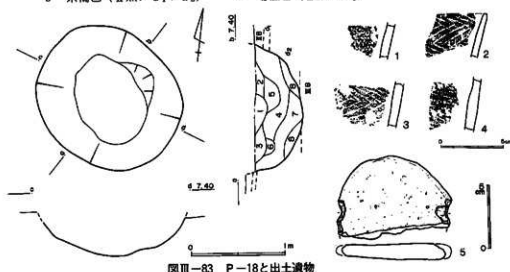
2 暗褐色 (d₁>d₂>Ⅱ黒)

3 黒褐色 (Ⅱ黒>d₁+d₂)

4 黒色 (Ⅱ黒>d₁+d₂ 粘性があり軟らかい)

5 茶褐色 (Ⅱ黒>d₁+d₂)

6 暗褐色 (Ⅱ黒+d₂)



図Ⅲ-83 P-18と出土遺物

7 茶褐色 ($\text{II黒} > d_1 + d_2$ 硬い) 8 橙褐色 ($d_2 \gg \text{II黒}$)

特徴 II黒 を15cm程掘った段階で黒色土の円形の落ち込みを確認した。平面形は楕円形。掘り込み面は II黒 中部かと思われる。底面は III黒 上面まで掘り込まれ、断面形はすり鉢状を呈する。北壁の一部は木の根によるとと思われる攪乱を受けている。

遺物 覆土からI群b-1類(1)、b-4類(2~4)土器と石鏝(5)、フレイク・チップ、礫が出土している。1には紐紐の圧痕文が施されている。2の口唇はやや丸味を帯びている。器面には比較的細い自縄自巻の原体による縄文が施されている。3には自縄自巻の原体による縄文、4には縄端圧痕が施されている。5は長軸の両端に打ち欠きがある。片麻岩製の石鏝。一部欠損している。

時期 縄文時代中期以降、後期の可能性がある。

(遠藤香澄)

(5) Tピット

T-1 (図III-84、図版III-46-1~3)

位置 e-71-86

規模 2.20×1.20/1.40×0.41/1.29m

特徴 調査区東部の台地上から北西に下がる標高18.30mの緩斜面上に位置する。e-71-86区のTa-d₂の上面で楕円形のプランを確認した。底面の長軸線上に杭穴を2個もつタイプのものである。杭穴の大きさは南西の方が径5cm深さ23cm、北東の方が径7cm深さ27cmで、その先端は尖っている。杭穴の覆土はEnPにTa-d₂が微量混じる土で、Tピットの覆土9層の土に類似する。杭穴の壁面は、硬くしっかりとしている。

T-1調査中、東側のe-71-76区の II黒 層上面から5cm下でT-1の掘り上げ土と思われる土を確認した。掘り上げ土は、 II黒 にTa-d₂が微量含まれており、その分布範囲は1.0×1.3m、厚層は8cmである。

(佐川俊一)

T-2 (図III-84)

位置 e-72-63・64

規模 1.80×0.95/1.05×0.35/1.65m

特徴 調査区の南側、斜面下位に位置する。 II黒 層上面から7cm程掘り下げたところで、Ta-d₁とTa-d₂の混在する掘り上げ土を検出した。その後、e-72-74区とe-72-64区を結ぶラインにベルトを残して掘り下げたところ、Ta-d₁上面で平面形が確認された。

平面形は長楕円形で、長軸方向は、N-30°-Eである。覆土は周囲の流れ込みと崩落土による自然堆積層である。坑底面はEnLに掘り込まれ、杭穴と思われる小ピットが2個確認された。その深さは約20cmを測った。壁はEnL部分が堅く締まっているため、垂直に近い状態で立ち上がっているが、確認面から III黒 層にかけてはすり鉢状になっている。遺物は出土していない。

(森岡健治)

T-3 (図III-85)

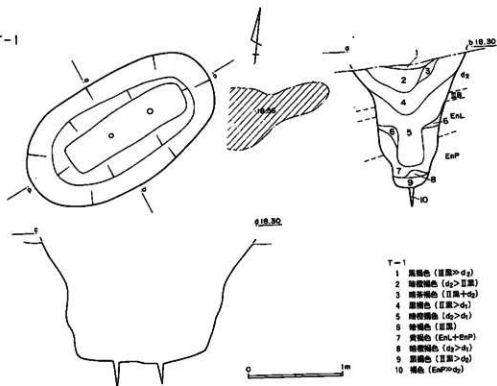
位置 e-71-79、e-72-70

規模 1.80×0.95/1.50×0.35/1.65m

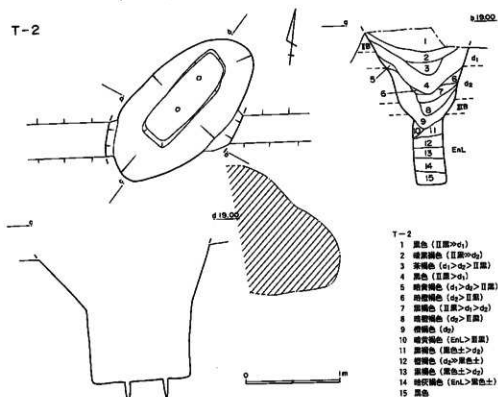
特徴 調査区東部の標高約20mの東から西に向ってゆるやかに傾斜する地形のところに位置する。包含層調査中、Ta-d₂上面で黒色土の落ちこみを確認した。平面形は楕円形を呈し、

Ⅳ 第Ⅱ黒色土層の調査

T-1

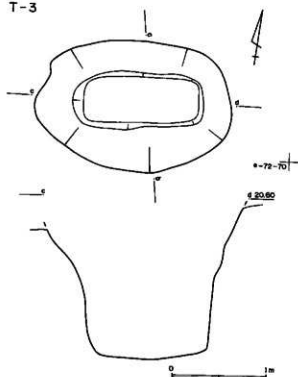


T-2

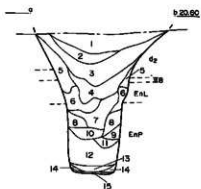
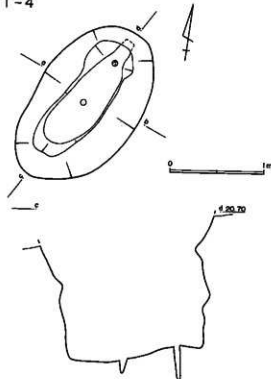


図Ⅲ-84 T-1・2

T-3

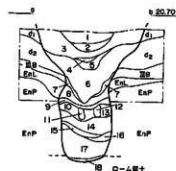


T-4



T-3

- 1 灰褐色 (互層 $> \text{EnP} > d_2$)
- 2 暗褐色 ($d_1 + d_2$)
- 3 褐色 (互層 $+ d_1$)
- 4 暗褐色 ($d_1 > d_2$)
- 5 褐色 ($d_2 > d_1$)
- 6 暗黄褐色 (互層 $+ \text{EnL}$)
- 7 暗黄褐色 (d_2)
- 8 暗黄褐色 ($\text{EnP} > \text{EnL}$)
- 9 黄褐色 (EnP)
- 10 暗褐色 ($d_2 > \text{黄褐色}$)
- 11 暗褐色 ($d_2 > \text{黄褐色}$)
- 12 黄褐色 (EnP)
- 13 暗褐色 (d_2)
- 14 黄褐色 (EnP)
- 15 褐色 (互層 $> \text{EnP}$)

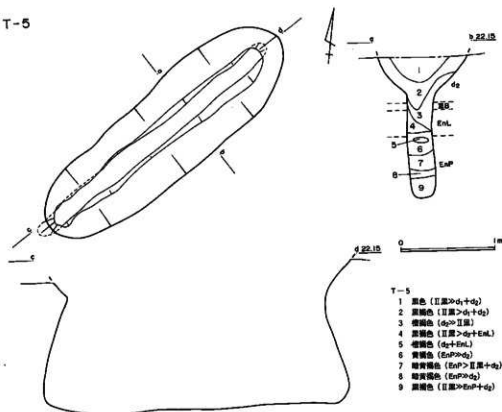


T-4

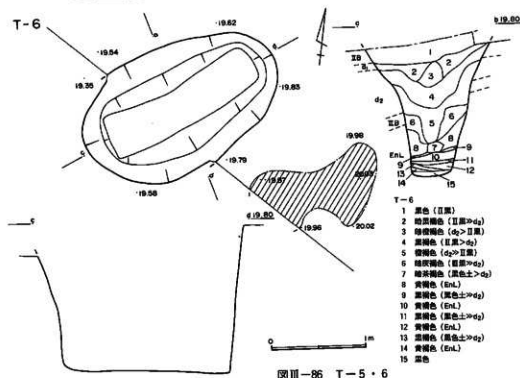
- 1 暗黄褐色 ($\text{EnL} > \text{互層} > d_2$)
- 2 暗黄褐色 (互層 $+ d_2$)
- 3 灰褐色 (互層)
- 4 暗黄褐色 ($d_1 > d_2$)
- 5 灰褐色 (互層 $> d_1$)
- 6 暗褐色 ($d_1 + d_2$)
- 7 暗褐色 (互層)
- 8 暗黄褐色 (EnL)
- 9 暗褐色 (互層 $> d_2$)
- 10 暗黄褐色 ($d_2 > \text{互層}$)
- 11 暗黄褐色 ($\text{EnL} > \text{互層}$)
- 12 暗黄褐色 ($\text{EnL} > \text{互層}$)
- 13 暗黄褐色 ($d_2 > \text{互層}$)
- 14 黄褐色 (EnP)
- 15 灰褐色 (互層 $> d_2$)
- 16 暗黄褐色 ($d_2 > \text{互層}$)
- 17 黄褐色 (EnP)
- 18 灰褐色 ($d_2 > \text{互層}$)

図III-85 T-3・4

T-5



T-6



図III-86 T-5・6

底面に杭穴はない。壁の立ち上がりは、底面から EnP の上面まで垂直に、そこから確認面まではゆるやかに立ち上がる。T ビットの長軸方向は等高線に対して直交する。(佐川俊一)

T-4 (図Ⅲ-85)

位置 e-72-51-61

規模 $1.87 \times 1.12 / 1.35 \times 0.41 / 1.37 \text{m}$

特徴 調査区東側の台地南端の緩斜面に位置している。等高線と直交しており、T-3 と列をなすものと考えられる。

平面形は、崩落のために楕円形を呈している。底面には、2カ所の杭穴が検出された。

壊底は EnP からローム質粘土にかけて設けられており、長軸北東側の底部立ち上がりには幅15cm前後の板状の刃先を持つ器具でローム質粘土を掘り込んだ痕跡が認められた。

(皆川洋一)

T-5 (図Ⅲ-86、図版Ⅲ-46-4)

位置 e-71-28・29・30

規模 $3.13 \times 0.90 / 3.13 \times 0.18 / 1.49 \text{m}$

特徴 調査区南東部の標高22mの台地上に位置する。Ta-d₂上面で細長い黒色土の落ち込みを確認した。平面形は細長い溝状を呈する。長軸方向の壁はいずれもオーバーハングしている。底面は幅が狭くⅡ黒層まではほぼ垂直に立ち上がるが、壊口部では壁の崩落により大きく広がっている。遺物は出土していない。

(遠藤香澄)

T-6 (図Ⅲ-86)

位置 e-71-78

規模 $2.20 \times 1.37 / 1.73 \times 0.42 / 1.42 \text{m}$

特徴 Ⅱ黒層を4-5cm掘り下げたところで Ta-d₂の掘り上げ土を検出し、同時に覆土1層とした黒色土が周囲より濃い色調で確認された。平面形をさらにはっきりと確認するために南西側半分を Ta-d₁上面まで下げ、T ビットであることを確認した。

平面形は長楕円形で、長軸方向は N-55°-E である。覆土はⅡ黒層~EnLの混入土あるいは互層となった自然堆積層。壊底面は幅45cmで、平坦である。壁は短軸側と長軸の南西壁がⅡ黒~Ⅲ黒にかけて若干傾斜する。出土遺物、小ビットはない。

(森岡健治)

T-7 (図Ⅲ-87、図版Ⅲ-47)

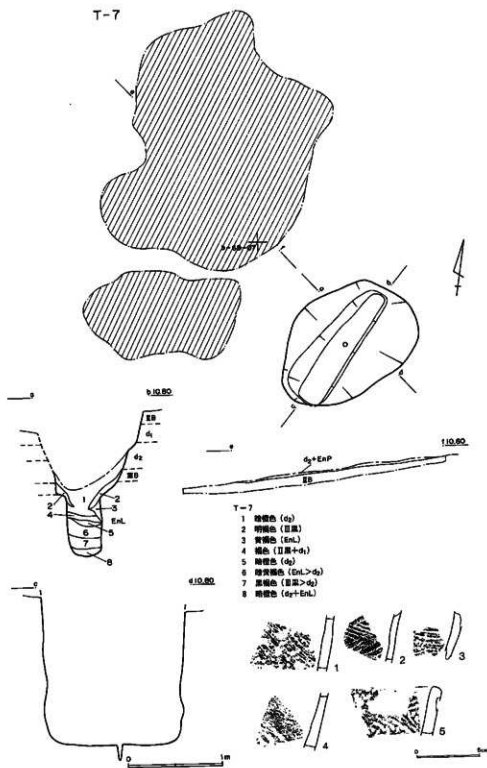
位置 c-69-97

規模 $1.52 \times 1.12 / 1.37 \times 0.26 / 1.38 \text{m}$

特徴 遺構集中区の南西端、標高10.60mの北向きの緩斜面に位置する。Ta-c除去後のⅡ黒層上面で円形の浅い凹みを確認した。当初は円形の土嚢を想定して調査したが、底面と思われた Ta-d₂の土をかなり掘り下げてもその土が汚れており、プライマリーな土層が出るまで約1.4m近く掘り下げた。その結果T ビットであることが判明した。

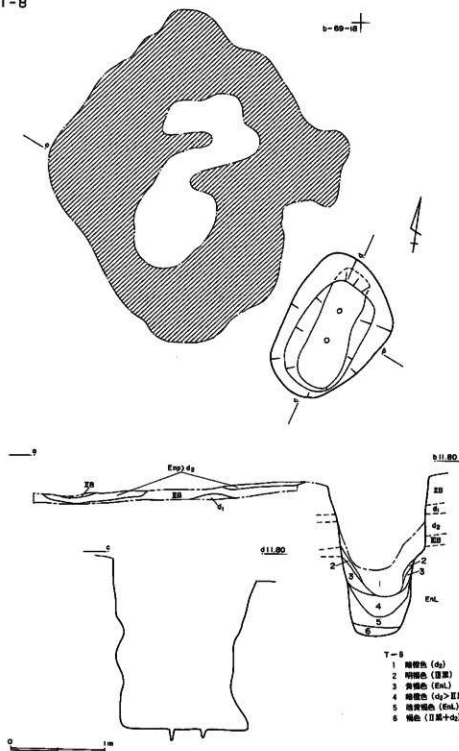
平面形は楕円形を呈し、底面中央に杭穴を1個もっている。杭穴は、径5cm深さ19cmで先端が尖っている。T ビットの東側の壁は、崩落により、そのプランが大きく広がっている。T ビットの長軸方向は、等高線に対して斜めに位置する。

T ビットの北西側、Ⅱ黒層の上部で3.5×2.5mの範囲でT-7の掘り上げ土と思われる土を確認した。掘り上げ土は、Ta-d₂とEnPが同量混じったものでⅡ黒層の上部に散在して



図III-87 T-7と遺物

T-8



図Ⅲ-88 T-8と盛土の範囲

いた。

遺物は、Tピットの覆土3層からⅠ群b-4類の土器(1)が、盛土直下からⅠ群b-4類とⅡ群a類が各1点(4・5)、盛土下からⅠ群b-4類が4点(2・3ほか)出土した。

時期 盛土の下からⅡ群a類の土器(5)が出土しているので、縄文時代中期以後である。

(佐川俊一)

T-8 (図Ⅲ-88)

位置 b-69-08・18

規模 1.53×1.02/1.27×0.40/1.65m

特徴 遺構集中区の南西端、標高11.60mの北向きの斜面上に位置する。T-8の近くには、北東10mのところにT-7がある。

この遺構の確認は、Ⅱ黒上面にて円形の浅い凹みと、その北西部に遺構から掘り上げたと思われる土が堆積しているのを認めた。T-7と同様に円形の土壇を想定したが、調査の結果Tピットであることが判明した。

平面形は楕円形を呈し、底面の長軸線上に杭穴を2個もっている。Tピットの長軸方向は、T-7と同様に等高線に対して斜めに位置する。北東の壁は底面から40cm上までオーバー・ハングしている。杭穴の大きさは、南西側のものが径5cm長さ13cm、北東側のものが径5cm長さ10cmである。杭穴の先端は、細くなっているが尖っていない。

T-8の北西側のⅡ黒上部には3.5×3.2mの範囲でこのTピットから掘り上げたと思われる盛土を確認した。土層は、EnPにTa-d₂が少量混じる土である。なお盛土の下を調査したが土器などの遺物は出土していない。

(佐川俊一)

T-9 (図Ⅲ-89、図版Ⅲ-47-4)

位置 c-69-78・79

規模 1.79×0.75/1.47×0.25/1.14m

特徴 遺構集中区の南端、標高13mの北向きの斜面上に位置する。Tピットの長軸方向は、等高線に対してやや斜めに位置する。

c-69-79区の北東隅近くのⅡ黒上面で、浅い凹みとその北西側に遺構の掘り上げ土と思われる土を確認した。

平面形は楕円形を呈し、底面長軸線上に杭穴を2個もっている。杭穴の大きさは、北側の方が径4cm深さ13cm、南側の方が径5cm深さ15cmを測る。杭穴の先端は尖っている。Tピットの断面観察中、5層下部から10層上部にかけて南側の杭穴上部の杭痕と思われる箇所がみられた。

Tピットの北西側には、コの字形に3.2×2.7mの範囲でT-9の掘り上げ土を確認した。盛土は、EnPにTa-d₂を微量含む土で、層厚は5cmを測る。この盛土下からⅠ群b-2類土器が1点(1)、Ⅰ群b-4類土器が4点(2ほか)出土した。

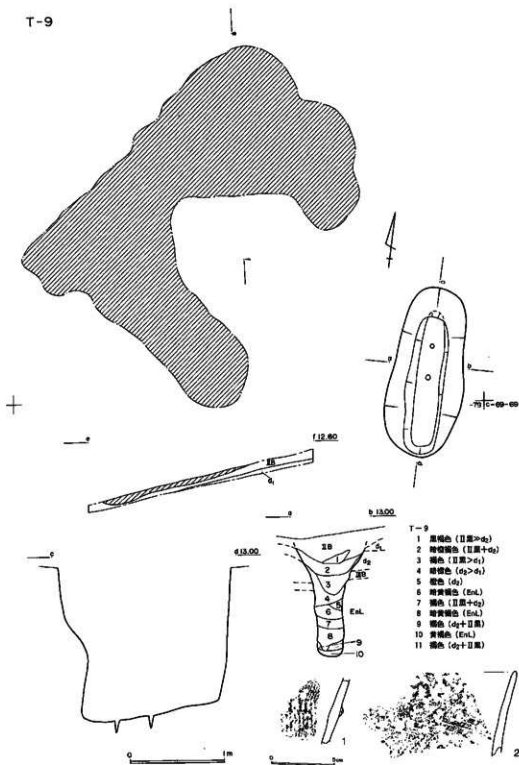
(佐川俊一)

T-10 (図Ⅲ-90)

位置 c-69-79

規模 1.43×1.02/1.12×0.42/1.60m

特徴 遺構集中区の南端、標高14mの北向きの斜面に位置する。Tピットの長軸方向は、



図Ⅲ-89 T-9と盛土下の遺物

III 第II黒色土層の調査

等高線に対して斜めに位置する。

c-69-79区の西側のII黒層上面で4.0×2.5mの範囲で遺構の掘り上げ土を確認した。掘り上げ土の南東側で浅い凹みを認めたので、トレンチを入れたところTピットを確認した。

平面形は楕円形を呈し、壁は底面からはほぼ垂直に立ち上がる。底面中央に径8cm、深さ8cmの杭穴を1個検出した。杭穴の先端は、丸くなっている。

Tピットの北西側にある盛土は、II黒層上面で認められ、Ta-d₁にTa-d₂が少量混じった土である。盛土は部分的に厚さ10cmほどのところもあるが、全体に薄く広範囲に存在している。盛土中およびその下を調査したが、遺物は出土しなかった。

(佐川俊一)

T-11 (図III-91)

位置 c-70-42

規模 1.74×1.28/1.50×0.45/1.44m

特徴 調査区西部標高18.50mの北向きの斜面に位置する。c-70-42区のTa-d₂上面にて確認した。平面形は楕円形を呈し、底面の幅は50cmと広い。杭穴はない。

T-11の北から北西にかけて、この遺構の掘り上げ土と思われるものを確認した。盛土は、II黒層中で3.0×2.5mの範囲で楕円形状に分布していた。盛土の層厚は8cmほどで、Ta-d₁にEnPを少量含む土である。Tピットの長軸方向は、等高線に対して平行に位置する。

(佐川俊一)

T-12 (図III-91)

位置 c-70-04

規模 1.62×1.13/1.34×0.49/1.38m

特徴 調査区西部の平坦部から斜面に変わる標高約19mの肩のところに位置する。

c-70-04区のTa-d₂上面で、黒色土の落ちこみを確認した。平面形は楕円形を呈し、Tピットの側壁は大きく崩落している。長軸両端の壁は、底面からはほぼ垂直に立ち上がる。底面の長軸線上には、杭穴が2個ある。杭穴の大きさは、2個とも径5cm、長さ5cmで、その先端は丸くなっている。

(佐川俊一)

T-13 (図III-90)

位置 d-70-87・97

規模 1.64×1.23/1.27×0.50/1.26m

調査区中央の台地北東端の標高21m前後の緩斜面に位置している。等高線に直交しており、平面形は崩落のため楕円形を呈している。杭穴は認められなかった。

(皆川洋一)

T-14 (図III-92)

位置 c-70-08・d-70-98

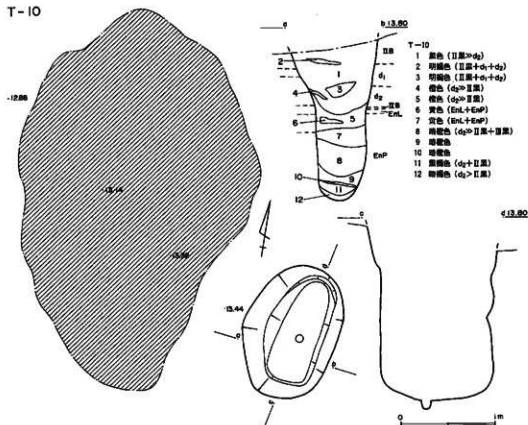
規模 1.86×1.27/1.35×0.43/1.42m

特徴 T-13の斜面上方に近接するTピットである。等高線に直交しており、平面形は崩落のために楕円形を呈している。床から杭穴が2ヵ所検出されている。P-17(図III-4)を切ってから設けられている。

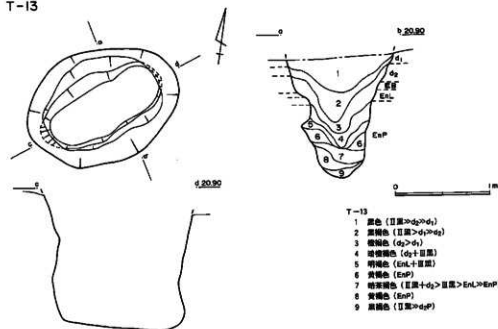
覆土からI群b-4類の土器片が出土しているが、これはP-17を切って掘込んださいにP-17から流れ込んだものと考えられる。

遺物 遺物はすべてI群b-4類土器である。1は口唇断面の口縁部である。器面には口

T-10



T-13

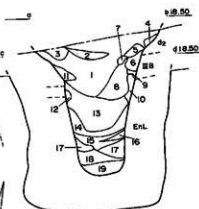
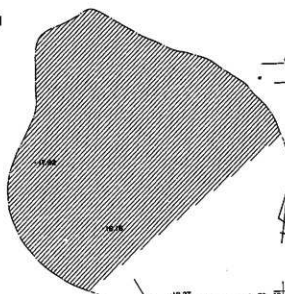


図III-90 T-10・13

Ⅱ 第Ⅱ黒色土層の調査

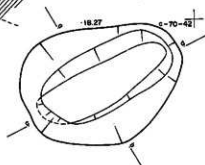
T-11

17.70

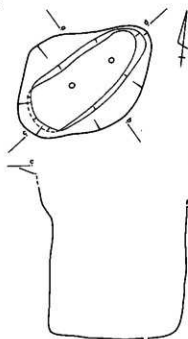


T-11

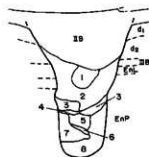
- 1 黒色 (豆黒>d₂)
- 2 黒色 (豆黒+d₂>d₁)
- 3 暗褐色 (d₁>豆黒>d₂)
- 4 暗褐色 (d₁+豆黒>d₂)
- 5 暗褐色 (d₁>豆黒+d₂)
- 6 褐色 (d₂>d₁)
- 7 暗褐色 (豆黒+d₁)
- 8 暗褐色 (d₁+d₂)
- 9 褐色 (豆黒>d₂)
- 10 黄褐色 (EnP)
- 11 褐色 (d₁+d₂)
- 12 暗黄褐色 (EnP>豆黒)
- 13 暗褐色 (d₂>豆黒)
- 14 黄褐色 (EnP)
- 15 暗褐色 (豆黒+d₂)
- 16 黄褐色 (EnP)
- 17 黄褐色 (EnP)
- 18 暗褐色 (豆黒+d₂)
- 19 黒色 (豆黒>d₂)



T-12



18.20

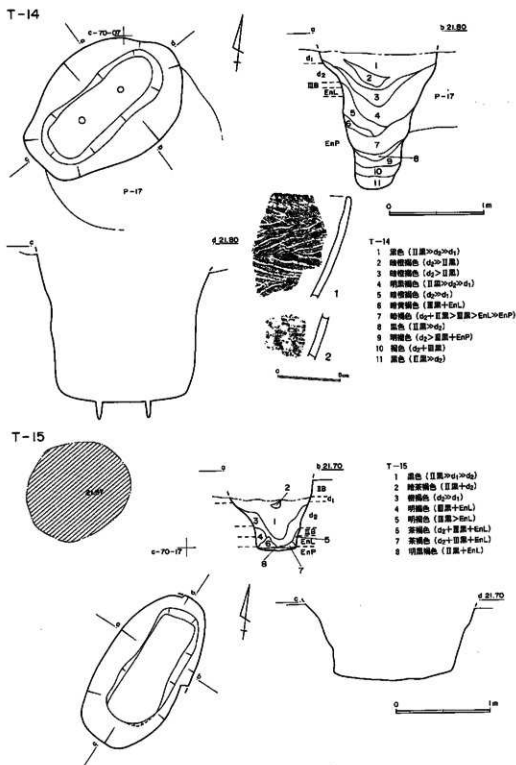


T-12

- 1 暗褐色 (豆黒>d₂)
- 2 褐色 (豆黒+d₂)
- 3 暗褐色 (豆黒)
- 4 黄褐色 (EnL)
- 5 暗褐色 (豆黒>d₂)
- 6 黒色 (豆黒)
- 7 暗黄褐色 (EnP>豆黒)
- 8 暗褐色 (豆黒>d₁+EnP)

0 1m

図Ⅲ-91 T-11・12



図面-92 T-14と遺物, T-15